
彼の世

ハスキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の世

【Nコード】

N2413I

【作者名】

ハスキー

【あらすじ】

交通事故で死んでしまった早川雅人、通称メタボとその兄早川太一。メタボは地獄へ、太一は天国へと別れて逝ってしまった。不運にもその頃、あの世では戦乱の狼煙があがっていた。二人は地獄、天国と違う立場でこの戦乱に巻き込まれていく。

第一話・死（前書き）

至らない部分が多々ありますでしょうが、読んでいただければ幸いです。

第一話・死

ある青年は夢を見ていた。奥には針の山が見え、周りは岩だらけで全体的にどこか暗い。恐らくは地獄であろう。なるほど、地獄に落ちると言うが、あの世の地下世界だからと納得した。歩き出すとしたら何かを蹴った。景色を見ていた目線を下ろすと鬼が横たわっていた。頭から血を流している。自分の右手を見ると血糊の付いた金棒を持っている。つまり自分がこの鬼を倒したのだろうか。

「いや無いって。たたく可笑しな夢だな。さつさと覚めるよ、チビちまいそうなんだけど…」

そう呟いた瞬間横たわっていた鬼が起き上がった。

「うわ！ お前が目覚めんじゃなくて俺が目覚めんだよ！」

青年がそう叫ぶと鬼は青年に襲いかかってきた。

「うおいマジかよ！ うわあああ！！！」

一瞬辺りが暗くなり、目を開けるとベッドの中だった。周りには使いなれた机や椅子があり、間違いなく自分の部屋だった。

「んだよ。やっぱ夢かよ。チビツてないよな…？」

ベッド中を確認し安心して起き上がった。制服に着替えベルトが少しキツイと思しながら下のリビングに行った。青年は体格がよく、いや太り気味で病院に行ったら「メタボ予備軍になるかもしれないね」と言われたため、皆からメタボと呼ばれている。だがメタボはそんなことは特に気にしなかった。ちなみに本名は早川雅人だがその名で呼ばれるのは家族と先生ぐらいである。

リビングに着くと朝食が用意されていることから家に自分一人であることに気がついた。いつも兄が朝食を作ってくれているのだが、起こしてはくれないのだ。

母はメタボが幼い時に他界し、父は転勤族でよく家を空けている。それで兄とほとんど二人暮らしなのでメタボには他に起こしてくれる人がいないのだ。

毎日のことだが起こしてくれてもいいのにと舌打ちをしいそいそとトーストと目玉焼きを食べた。締め牛乳を飲み終わるころにバイクの音が聞こえた。

「やべっ！」

思わず声を漏らし急いで玄関に行き家を出た。

「ギリギリだな、メタボ」

「うるせえヒーマン」

バイクの正体は友達の飛田卓^{ひだすくろ}。通称ヒーマン。こいつも太っていて肥満気味故にそう呼ばれる。類は友を呼ぶとはこのことであろう。

二人は下り坂でその先には交差点があるところまで辿り着いた。木が異常に道路側に成長して下り坂が交差点を見ると視界が悪い。事故スポットとして有名なところだ。近所に住む者は魔の下り坂として恐れられている。

「おい！ スピード落とせ！」

そう叫ぶも互いにヘルメットを被っているため聞こえない。ヒーマンはスピードを落とすもメタボは前しか見ていないのかそのことに気付かない。メタボは木の枝の隙間から信号が黄色に変わるのを見てスピードを上げた。そして横断歩道が見えたぐらいで自転車が飛び出すのが見えた。メタボはブレーキをかけようとすも物凄いスピードが出ていて、間に合はずもなく、二つは衝突した。メタボも自転車の方もぶつ飛ばされ交差点の真ん中に落ちた。そしてトラックが来て、二人を引いてしまった。

ヒーマンが着いたころ、二人は変わり果てた姿になっていた。

「うっ……」

彼は思わず口に手を当てる。そして友人の死を意識し両膝を着いて涙を流した。既に人だかりができており、やがて救急車とパトカーのサイレンの音が聞こえた。

「ん……？」

メタボは起き上がった。周りを見るとお花畑が広がっていて、川

のせせらぎが聞こえてきた。これってもしかしたらアレなんだろう
か。メタボはまた寝転がった。死を意識し、全てがどうでもよくな
った。だが、顔を横に向けるとメタボの顔が青ざめた。自分の兄貴
が眠っている。どうしよう、逃げようか？ 事故の記憶が蘇る。そ
うだ、自分が兄貴を殺したんだ。そう考えると逃げるわけにはいか
なくなつた。

「起きろよ、兄貴…」

軽く兄の体を揺さぶりながら起こそうとするが、なかなか起きな
い。

「おい、兄貴！ 兄さん！ お兄ちゃん！ 兄上！ お兄様〜！」
さすがに調子に乗りすぎたと反省するもなかなか起きない兄に苛立
ちが募つてきた。

「起きろよクソアニキ！」

「…誰がクソアニキだ！」

兄は上体を起こした。メタボは覚悟を決め話し始めた。自分たち
の死のことを。その話を聞いた兄はメタボを殴った。

「痛っ！ 死ねよクソアニキ！」

「もう死んでんだろ！ お前のせいだ！」

しばらく兄弟喧嘩を繰り返していると、黒いマントに身を包み、そ
の顔はドクロというトランプのジョーカーやタロットカードで見る
ような死神が二人現れた。

「なんだテメーら！」

兄はすかさず死神だろ、とツツコミを入れた。死神たちはノーリア
クシヨンで鎌を構えた。

二人は魂を持ってかれるかと思ひ、足がすくんだ。鎌が二人の首を
襲い激痛が襲いかかって…

「あれ、痛くねえ？」

来なかった。しかし体のある異変に気付いた。声が出ない。それど
ころか体を自由に動かすことが出来なくなつてしまったのだ。どう
やらこうして三途の川を渡らせるらしい。昔三途の川に落ちて生き

返ったという話を聞いたがそのためだろうか。

死神は小舟に乗り、メタボらもそれに連なり小舟に乗った。小舟がゆっくり動くにつれてメタボは不安になった。これまでの自分の生きざまを振り返ってみたのだ。小さな頃から悪ガキで、十三で不良と呼ばれていた。同級生も何人も病院送りにした。そして何より兄の死の原因を作った。この先が天国と地獄に別れているのなら自分は当然地獄だろう。

そう考えをめぐらし、謝罪と後悔の気持ちでいっぱいになった頃、小舟は岸に着いた。小舟を降りしばらく死神に連れられて歩くと、長い列が見えた。どうやら裁きを待つ死者の列らしい。

「畜生、どうにでもなれ！ あ…」

声が出るようになり、体の自由がきいていた。いつの間にか死神が消えていたようだ。

「仕方ない、並ぶぞ」

メタボは兄の言葉に従い列に加わった。

「ごめん…」

死んでから初めての謝罪の言葉だった。

「…仕方ないって言ったんだよ、俺は」

それは三途の川を渡る前まで喧嘩した相手とは思えない言葉だった。メタボはてつきり嫌味の一つでも言ってくるかと思っていた。しかしメタボにとってその方がまだ楽だった。兄の態度が罪の意識を深くさせたからそう思った。

「ただ心配なのはお前だよ。自分でも勘づいてるだろうけど」

「分かってる。たぶん地獄だろうな…。天国行けるといいな」

「さあ、解らないな」

それは意外な言葉だった。メタボは自分の兄貴ながらこんなにクソマジメな生き物、他に見たことがないぐらい、兄は真面目な性格なのだ。自分と違ってお天道様に恥じる生き方はしてないはずだ。

「この世界…、って言っているのか解らんけど、ともかく上に立つ人物がまともとは限らない。裁くのが気まぐれな人物ならどう転ぶ

か分からないな」

兄はこの時既にあの世のキナ臭さを嗅ぎ付けていたのかもしれない。しかしメタボは兄のまだまだどうなるか解らないという優しさだと解釈した。

やがてメタボと兄の裁きの番がきた。二人のイメージでは閻魔なりオシリスなり

と裁きを下す者がいるかと思っただが、そこには天使と鬼がいた。異様な組み合わせである。これは和洋折衷の部類に入らないだろう。なんというか、並んではいけない気がした。二人共別に宗教を信じてるわけでもないのにそう思った。

「早川太一さんですね？」

太一というのはメタボの兄の名前だ。太一はドキっとして恐々応えた。

「はい」

「貴方は天国逝きです。おめでとうございます」

太一は一瞬メタボがいることを忘れた。そして受験に受かった時のように狂喜乱舞した。先程のシリウスはどこに行ったのだろうか。「キャッホーイっ！ て、天国だあ！！！」

狂喜乱舞する兄に心の中で舌打ちし、メタボは天使に訪ねた。

「あの、俺は？」

「貴様はこっちじゃ」

天使の代わりに鬼が答えた。メタボは肩を落として落ち込み、さすがに太一も喜ぶのを止めた。

「兄貴、天国で楽しくしろよ。俺は罪を背負って地獄で過ごしているよ」

「雅人……。すまん、兄貴だって言うのに何を言っているか分からない」

「いいんだよ。鬼さん、早く地獄に案内してくれよ」

「おう、行くぞ」

鬼が歩き出し、メタボはそれについて歩いた。太一は地獄へ歩い

てゆく背中を黙って見送るしかなかった。これがあの世というものなのだろうか。そもそも自分は天国に逝けるような人間なのだろうか。そんな考えが太一の頭を過った。

第二話・地獄

地獄逝きが決定したメタボは今から地獄に赴く恐怖より、格好よく兄と別れられた自分に酔って満足感でいっぱいだった。

「鬼さんよ、地獄ってどんなところ？」

という軽口まで出た。調子のいいやつである。鬼は腹が立ち、手に持った金棒で地面をたたいた。その衝撃音が響き、メタボはびびった。

「人間ごときが、鬼に話しかけんじゃねえ！」

言い終わると前に進み出した。

「さすが鬼、おっかね〜」

口は強気だが内心めちゃくちゃびびっていた。先程まで持っていた満足感などとうに消え、恐怖心でいっぱいになっていた。

しばらく歩くと鉄格子、薄暗い部屋々々とかなりピユラーな牢屋に着いた。「来るべき時が来るまでここで生活してもらおう」

来るべき時？ そんな疑問が一瞬過ったが恐怖心に満たされた今のメタボはそれを声に出すこともできず牢に入れられた。

鬼の足音が遠退いていくのを耳で確認するとメタボは胸を撫で下ろした。しかしそうしたのも束の間、また恐怖に凍り付いた。牢に居る面子が強面のおじさんばかりが目についたからである。こんな方々と一緒に暮らすなんて、メタボはお先真つ暗になった。

「新入りかい、ヤツシー！」

「へい」

呼ばれて出てきたのは肌は荒れ、小太りで冴えない青年だが、他の方々と比べるとだいぶメタボにとってマシだった。

「俺はヤシマドル・M・ドリマーだ。長いからヤツシーでいいよろしく」

そう言って手を出し握手を求めきた。変な名前で冴えない面とは言え強面たちのお仲間なのだ。メタボは恐る恐る出された手を握っ

た。

「は、早川雅人だ。よろしく」

握った手と顔の表情からメタボが恐怖を持っているとヤッシーは読み取った。

「そう怯えんなって」

ヤッシーは笑ってみせた。メタボはこんな不細工な笑みを浮かべるやつに怯えるなんて馬鹿らしいと思った。それは地獄で初めて感じた安堵だった。

「そうだな。俺はメタボでいいよ、生きてる時ずっとそう呼ばれてたんだ」

「そ、そう？んじゃメタボ、改めてよろしく」

「ああ」

メタボはいつの間にかヤッシーのことをヒーマンと重ねていた。たぶん、気が置けない仲になるだろうと思った。

自己紹介もそこそこにメタボはこのことを聞いた。何をさせられるのか、どんな生活を送らねばならないかなどなど。そして日本人が古来より思い描いた通り針の山があったり大釜があったり灼熱があったりするらしい。しかしヤッシー達がいる牢獄は八大地獄の黒縄地獄、等活地獄に近いためそこで責め苦を受ける。この二つの地獄は主に獄卒に斬られたり殺し合いを演じさせられたりするのだが、大釜で煮られる責め苦もある。さらにこの地獄の奥底にはタルタロスという、地獄以上の苦しみが待つ場所があるという。

まだちゃんと理解したわけじゃないついでに兄が逝った天国についても聞いてみた。が、地獄に落ちたヤッシーがよく知るわけもなく、いつくかの国があり、どれも楽園なのだろうとのことである。色々なことを一辺に言われ軽く知恵熱が出そうになっていると、獄卒鬼が徘徊してきた。

「お前ら時間じゃ、はよう出い！」

言われた通りメタボもヤッシーも恐面のおじさん達も牢を出た。これから行くのは黒縄地獄だろうか、それとも等活地獄だろうか。

メタボは考えを巡らせば巡らすほどやるせなくなってきた。切り裂かれるのも、煮られるのも嫌だが、ヤッシー達と殺し合いをするのもっと嫌だと思った。

牢がある場所は大きな洞穴の中で、その中のたくさんの小室が牢になっている。メタボはそのことに洞穴から出て初めて気が付いた。そして洞穴を出て地獄の風景を見た。それは初めて見た感じがしなかった。奥には針の山が見え、周りは岩だらけで全体的にどこか暗い。そう、死んだ日に見た夢と同じ光景なのだ。

しばらく歩き、黒い壁の前で止まった。梯子がかかっており、なにやらグツグツ音がする。そして何より暑い。

「あゝ、今日は煮沸地獄か」

ヤッシーはもう慣れてるのか軽い感じで、周りのおじさん達も同様である。

「はよう登れ！」

鬼が金棒を梯子を向け指示を出す。皆は指示通り梯子を登り始めた。初めて煮沸地獄に臨むメタボにとっては異様な光景に見えた。

慣れてしまえばこうなるのだろうか？ 殺し合いをさせられる時もある？ ともかく今のメタボには嫌々従うしかなかった。

「あつっ！」

梯子に手をかけると熱が伝わってきており木製だというのに発火していないのが不思議なぐらいだった。熱さに耐えながら上まで登ると灼熱が見えた。これは大きな鍋らしくその縁に死者達が並んでいた。

「よし、全員登ったか。飛び込め！」

恐怖で固まっているメタボを余所に皆は次々と飛び込んでいった。そして悲鳴や叫び声が聞こえてくる。慣れた様子だったのが嘘のようである。

まだ飛び込んでいないメタボを見つけた鬼が近付いてきた。

「何やっとなじやおんどりゃあ！」

鬼はメタボにケツバット、否、ケツ金棒をし大釜に叩き落とした。

メタボは叫びながら落ちていき、落ちたら落ちたで叫び悶え苦しんだ。三時間ぐらい経ち、ヤタガラスという三本足で翼を広げると一人分はあるぐらいの大きさの鳥が死者達を回収し上まで運んだ。

「これが地獄か…」

当たり前だが死ぬことはないが、痛み、苦しみはある。こんな責め苦ばかりが続くと思うと絶望した。

牢に戻されると、変わらずヤツシー以外は怖い顔のおじさんばかりだが煮沸地獄と比べるとほっと出来た。

「どうだった、初めての地獄は？」

「どうもこうもねえよ…、こんなのが毎日つてやつてらんねえよ」

ヤツシーが話しかけるとメタボは座り込み疲れを露呈した。

「残念ながら、エンマが地獄の主である限り変わらんよ」

「エンマ？」

メタボにとってエンマは確かに地獄に君臨してそうなイメージはあるが、どちらかというと霊界で地獄か天国かの裁きを下すイメージの方が強い。そういえば、自分が地獄行きを宣告されたのはただの鬼ではなかったか。エンマの職場放棄だろうか。

「そうだ、紹介しておきたい人物がいるんだ」

「え？ 他に誰かいんの？」

見渡してもすでに煮沸地獄で共に苦しんだ者しかいない。ヤツシーほど言葉を交わしたわけではないが、今さら紹介してもらおうほどでもない。

「別にいいつすよね？」

「終わったばつかやしちようどええやろ。案内したれ」

「へい、こっちだ」

ヤツシーが何か許可をもらおうと壁を崩しだし、穴が露になった。どうやら前から壊してあったようで、隣の牢と繋がってるようだ。

穴を通り抜けると、数人はメタボらの牢と同様に怖い顔のおじさん、なぜか一人は忍者。まあそれは放っておいて、まさしく紅一点とはこのことだろう、一人少女がいた。その子は黒い長髪がよく似

合つ可愛らしい少女だった。

「お嬢、新入りでさあ」

ヤッシーの口調の変化も気になったがその子がお嬢と呼ばれることに驚いた。そしてメタボに悪い予感が頭によぎった。恐い顔のおじさん方がモノホンかもしれない。

「おうそうか。うちは月臣沙羅。お前はなんちゅう名前じゃ？」

関西弁、かどうか分からないがとにかく訛つてて偉そうな口振りだと思つたが、貫禄があり似合い過ぎると思つた。

「は、早川雅人です。みんなからはメタボと呼ばれてます…」

迫力に潰されそうになりながらもなんとか言つた。しかし同い年かそれ以下の少女にしか見えない相手に敬語で喋つてしまつているのでもう潰されてるかもしれない。

「そうか、ほなうちもメタボって呼ばか。ヤッシー、説明してやんな」

「へい」

片膝つけて頭を垂れていたヤッシーが立ち上がった。

「実はこの辺の牢に入ったやつはもれなく地獄組に入んなくちゃならないんだ」

ヤッシーが遠くを見て暗い顔をしている。どうやらヤッシーも地獄組とやらに参加させられたクチらしい。

「そんな無茶苦茶あるかよ」

小声で言つたつもりだがお嬢の耳には届いていた。

「なんやてえ、地獄組入らん言うんか！」

本気でこの場から逃げたいと思つたが勇気を振り絞つて言つた。

いや、立て続けに起こる不条理な事態に苛つきが爆発したと言つてもいい。

「そんなわけ解んないもんに、入ろうなんて思つかよ！」

「なんじゃとお！」

周りのおじさん達が懐からエモノ、ドスと呼ばれる小刀をちらつかせた。がお嬢が手を広げ小刀を引つ込めさした。

「ええやろ。聞かせたるわ、理由ってやつをな。その代わり聞いた
ら後には退かれへんで？」

その時のメタボは間違はなく何か弾けており、後先のことなど
考えていなかった。なぜ地獄の亡者でしかないはずのおじさん方が
武器をちらつかせたことに疑問を持たなかったのだから。この牢に
放り込まれた時点でもう何か抜け出せない領域に足を踏み入れてい
たのかもしれないが。

第三話・初任務

お嬢が言うには、地獄はエンマの怠惰によりその仕組みが簡略化しており、輪廻転生の期間が曖昧になってしまっている。また罪により地獄の場所と受ける責め苦は定められているはずだが、それも曖昧になってしまっている状態なのだそう。ちなみにここでの輪廻転生は責め苦等で魂を洗練し清くして現世の肉体へいくことをいう。

責め苦は個人別できちんと設定し実行しないと魂の洗練の効果は薄い。それゆえいつ輪廻転生できるか分からないのだ。

「話しは分かった。けどなんでそんなこと分かったんだ？」

メタボの疑問は最もお嬢はすぐに忍者を指差すことで答えを用意した。

「うちには優秀な諜報員がおるからな。それに鬼たちのばやきからも仄めかすよ
うなこと言っとったし」

加えてヤツシーが言うには重罪人と軽犯罪者が同じ牢獄に入れられるなど、明らかに不振な点も見られたらしい。

「下手すると延々こんな地獄におることになる。それでもええんか？」

メタボは唸って考えた。確かにこんな地獄で延々過ごすのは嫌だ。だが、死者が地獄に逆らうとどうなるかなんて想像出来ない。しかし…

「勝算は？」

「それを上げるために人手を集めとる。せやけど、ヤツシーが面白いもん盗んできよったから…」

お嬢が不敵に笑う。その面白いものが何か分からないが、メタボは何となく賭けてもいい気がしてきた。

「その面白いもんつてのに賭けてみるぜ。なんだか分からないが、

その方がいい気がする」

「そうか、おおきにな」

お嬢がメタボの手を握って微笑みながら言った。メタボはそこにお嬢の少女らしさを垣間見た気がした。

メタボが地獄組の牢屋に放り込まれておそらく数日が経った。

おそらくというのは地獄に時計があるわけではないので、メタボの体感だからである。

地獄で過ごして、お嬢らに土地勘を叩き込まれた。来るべき日に備えてどうしても必要なことである。その知識を一部披露するでしょう。

メタボらが収容されている牢獄から近いという理由でよく利用されているのが、八大地獄の一つ、黒縄地獄である。それは高熱の黒い縄で亡者の身体に火傷の痕をつけ、それにそって身体を切り刻む罰を受ける故にそう呼ばれる。

「黒縄地獄の周辺をよう覚えとけ。ヤツシーと働いてもらうことがある」

メタボはこうお嬢に言い含められ、黒縄地獄の周辺を頭に叩き込んだ。ヤツシーは元盗賊である。盗みに入った際に仲間を逃がす途中銃弾に倒れた経歴を持つ。そんなヤツシーと組まされるとなれば、やらされることは一つである。盗みだ。黒縄地獄には切り刻む為の刀類を保管する武器庫がある。そこで武器を調達するのだ。メタボが来る前にも何回か盗みに入り、武器調達に成功している。ヤツシーを始め盗みに入った者が言うにはたくさんありすぎるそうでおそらく管理が行き届いてないのだろう。未だ鬼達獄卒に露見したことはない。

「メタボ、ええ加減黒縄地獄は覚えたか？」

「まあ、なんとか」

「お嬢、俺がついてるし大丈夫ですよ」

メタボの曖昧な返答に眼光を鋭くするお嬢をヤツシーがなだめ

た。

「戦力的には不安やが…」

「そんな…」

「しよみメタボの武器の為やし、お前が頑張るんが道理やる。まあ鬼に気付かせんようこつちも頑張る。しつかり頑張りや！」

そうお嬢に檄を飛ばされ、メタボとヤッシーの二人はなんとか鬼の獄卒に見つからないよう亡者の列から外れ、武器庫が目と鼻の先の位置の岩場に身を隠していた。

「いつもなら見張りの鬼は忍者さんがなんとかしてくれるんだが…」

ヤッシーはチラとメタボを見る。メタボは悪かったなと舌打ちをした。

「まあいい、女の鬼みたいだし、楽勝だろ」

確かに見張りをしているのは、栗色のウェーブのかかったセミロングの髪に長身の女性だった。能面を被り、頭に鬼の角を生やしていないければ人間の女性と大差しない。

「女だからって気を抜くなよ。相手は鬼だからな」

「分かってるよ。」

ヤッシー発案の作戦はこうだ。相手は一人でこちらは二人。メタボが女の鬼を引き付けている間に、ヤッシーが武器庫の鍵を開け盗む。後は各自で牢に戻る。問題はメタボがあの子の鬼を上手く巻けるかどうかである。

「じゃあ頼んだぜ、メタボ」

「ああ」

メタボはヤッシーの位置を女の鬼に悟られないよう大きく迂回して別の岩場から武器庫の前に出た。すかさず女の鬼が問う。

「お前、こんなところで何をしている！」

「え？ ああ、ちよつと道に迷って…、んじゃ！」

メタボは一目散に逃げた。

「待て！」

女の鬼はメタボを追っていった。ヤッシーは武器庫の近くに誰

もないのを確認すると、早々と武器庫の錠前に移動した。

「しめしめってね…」

ヤツシーは針金を取り出し鍵穴に刺してガチャガチャし始めた。するとカチン、と鍵が開く音がした。ギギーッと古びた音を出して扉を開き、中に入って素早く閉める。灯りは無くともヤツシーは暗闇の盗みは手慣れているので簡単に得物の分別が出来た。金棒、太刀、槍などがある。

「あいつ体格いいからな、金棒でいいだろ」

ヤツシーが金棒を手に取り武器庫を出ると、顔が青ざめていくのが分かった。メタボがさっきの女の鬼に捕まっているのだ。

「おいおい…」

「ほう、そうやってこれまで武器を盗んできたのかい」

ヤツシーは金棒を地に落とし両手を上げ、そうだと口をつた。

「悪いヤツシー、こいつすばしっこくって…」

「あんたに口をきく権利はないよ！」

女の鬼はメタボの腹部を蹴りメタボを黙らせた。

「大人しく牢屋に帰らせてもらえる雰囲気じゃないな…」

「なに、返答次第じゃ手荒な真似はしないよ。こっちの質問に答えてくれればね」

尋問だろうか。だがお嬢たちのために口を割るわけにはいかない。当然無闇に目の前の女の鬼に逆らうわけにもいかないのだが。

「分かった…」

「話が早くて助かるよ。まず武器を盗んだ理由だ。」

ヤツシーは口ごもる。正直に地獄に反旗を翻そうとしてみますなど答えられるわけがない。どう答えるべきか…。ヤツシーが迷っている間暫しの沈黙が続く、女の鬼が沈黙を破った。

「沈黙もまた答えてやつかね。まあ武器盗むのにやましい理由以外ないだろう」

ぐうの音も出ない。このことが知れ渡ればお嬢たちは地獄に反旗を翻すことは出来なくなる。最悪タルタロス行きだっでありえる。

「頭が切れるな。羅刹女かい？」

「よく調べてるね。残念ながら夜叉だよ」

地獄の鬼、獄卒鬼の女の鬼を夜叉といい、その中でも上位の者を羅刹女という。男の鬼は役鬼、その中で上位の者を羅刹という。

「しかし久しぶりだよ。地獄に逆らおうなんて連中はさ。」

女の鬼はメタボを前に放り投げた。

「どういうつもりだ？」

「何を隠そう私も地獄に逆らおうってクチだからね」

「なっ……」

二人は絶句した。二の句を告げないと、女の鬼が話を続けた。

「私は亜依奈。あんたらに協力してやるよ」

「信用出来るか！」

「いいのかい、そんなこと言って。こうしている間にあんたらのボスは持国天に殺されてるかもしれないんだよ？」

「デタラメを……」

「まあ、それなりに誠意を見せなきゃ信じてもらえないか」

亜依奈は金棒を掲げてなにやら唱え始めた。

「出でよ、玄武！ 我らを導きたまえ！」

光と共に巨大な亀、玄武が現れた。

「届けてやるよ、仲間の所へね！」

玄武はメタボとヤツシーの二人を乗せ、光と共に消えた。

第四話・戦闘開始

お嬢はメタボとヤツシーの成功と無事を祈り、亡者の列の歩みを進めていた。鬼は最後にさっさと来いと檄を飛ばしながらどこかの地獄に向かって進む。

「持国天様に目をつけられるなんざ、気の毒なやつらだ・・・」

お嬢は鬼の微かな呟きを聞き逃さなかった。その中で持国天という言葉がひっかかった。天を冠する名を持つ鬼はかなり上位な鬼と噂される。お嬢は地獄に齒向かおうとしているのが露呈しているのではないかと冷や汗をかいた。暫く進むと黒縄地獄にあるギロチン処刑広場に到着した。広場というより荒野と言った方がしっくりくる場所で、ポツポツと断頭台が置かれているだけである。

「今回はギロチンで無限に斬られるってかい？」

地獄組組員の一人が聞いた。

「それは、直接持国天様に聞け」

鬼がそう言うのと地面がひび割れ、強烈な爆音がなり砂煙が舞い上がる。地獄組の面々は無意識に顔を隠し砂が目に入るので防いだ。微かに開いた目の先に居たのは、大蛇の頭の影である。しかもそれが八つあった。砂煙が晴れていき、巨体のシルエツトが露になった。有名なヤマタノオロチである。その上に何者かが数人乗っていた。その者たちは高く飛び上がり地獄組の目の前に次々と着地した。

「引率ご苦労だったな」

「いえ、この程度なんでもございませぬ」

地獄組の面々を連れてきた鬼は片膝をついて頭を下げた。よい、と言われ頭を上げると鬼はあることに気付く。

「おや、鍾馗様が居られないようですが」

「ああ、あいつは来る途中強者に出会ったんでな。相手をさせている。やて・・・」

先ほどから偉そうに話す鬼が地獄組の方を向いた。

「四天王が一人持国天だ。貴様ら何やら亜依奈と企ててるらしいな」
「亜依奈？ 一体誰のことや？」

地獄組の面々は首を傾げる。当然である。亜依奈は密かに地獄組を支援していたのだから。

「亜依奈が勝手にやっていたことか。だが、地獄に反旗を翻そうと
していたことには変わりあるまい？」

お嬢はメタボたちが抜けていることもあり、まだまだ時期尚早だと考えた。

「そんなことあらへんよ。その亜依奈つちゅうんがそう仕向けただけやろ」

持国天は金棒を前に出し語り始めた。

「お前ら囚人は死ぬことはない。そりゃそうだ、もう死んでんだから。しかし存在を消すことが出来る。どういふことか解るか？ 魂を消すつてことだ」

お嬢たちは自分たちの得物に手をかける。それを知ってか知らずか、持国天はまだ話し続ける。

「この金棒は特別でな。魂を潰すことが出来る。ここまで話しゃもう解るだろ？」

お嬢の目の前に組員が守るように一歩、二歩と出る。

「うちが言つたこと、信じてもらえんようやな」

「そう言つことだ。だいたい、武器盗んどいて気付かれねえと思うか？」

「それもそうやな！」

お嬢が刀を抜き出すと、組員は持国天に突撃した。しかし持国天は金棒一振りて払い除ける。その衝撃で組員たちの身体は宙に浮き、落下し背中等を打ち付けた。

そして組員たちの身体に奇妙なことが起きた。そして組員たちの身体に奇妙なことが起きた。打ち付けた背中等の痛みはいつも通り引いていったが、持国天から受けた衝撃の痛みは引かないのだ。

「ぐ…、久々の感覚じゃい…」

組員たちは立ち上がりドスを構え直す。持国天は余裕綽々といった感じに肩に金棒を乗せている。その余裕は持国天にあることを吐かせた。

「お前らが存在を消されずにいられる唯一の方法を教えてやろう。俺たち地獄の住人はこの世界の生き物だから死ぬ。死んだら肉体を持たない魂にされるんだ。つまり唯一の方法ってやつはお前らが俺を殺すってことだな」

持国天は肩に乗せた金棒を構え直す。

「出来るかどうかは別だがな」

先ほどの一振りを見て持国天の脅威的な強さが分からない地獄組ではない。故にこの状況は絶望的だった。持国天の他にもヤマタノオロチや、大剣を構えた鬼、普通の鬼も数人はいる。お嬢は覚悟を決め、刀を構え踏み込もうとした時、忍者はお嬢を抱えその場を去っていった。これは地獄組の総意である。頭のためなら魂をもかけられる。それが地獄組の極道、極みの道なのだ。

「ちい、お前！ ヤマタノオロチを貸すから逃げたの追え！」

持国天は地獄組をここまで連れてきた鬼にそう命令する。その鬼はヤマタノオロチに飛び乗り、地面に潜っていった。

「ち、忍者を信用するしかないのう。若頭もおらんことじゃし、お前ら歯あくいしばれえ！」

組員はドスを構えまたも突っ込んでいった。持国天はバカの一つ覚えのように突っ込んでくる組員に呆れながらまた金棒を一振り。悲鳴と共に組員たちのダメージは蓄積されていく。

「く…、若頭もおらんし、どうすりゃええんじゃー！」

お嬢を抱えた忍者は俊足を誇り、持国天から逃げた場所からぐんぐん離れていった。

「…ここまでくれば」

忍者はお嬢をおろす。組員は自分が守らねばと考えるお嬢は当然
忍者の行動に怒りを覚えた。

「どういづつもりじゃ！」

忍者は目線を反らし黙ったままだった。この男は普段から相当無
口であるから、いつものお嬢なら堪えられた。だが、怒りに身を委
ねるお嬢は思わず忍者をぶった。忍者は避けようとせず、無抵抗
にぶたれた。ぶたれて動いた頭を直ぐ元に戻しゆっくり口を開く。

「…地獄組はお嬢がいなくなったら終いだ。大将を守るのは当然」

「お前の戦法なんか聞いてへん！ うちにはこの戦いに皆を巻き込
んだ責任がある！ こんなところで油売ってええわけない！」

忍者はまた黙りこくった。お嬢は今度はぶとうとはせず泣き崩れ
る。忍者にはお嬢を放っておくことしか出来ない。

だが、ある気配に気付き放っておくわけにもいかなかった。

「…どうやら追っ手が来たらしい」

お嬢は泣いて真っ赤になった目を忍者に向けた。

「…来る」

地面が割れ、砂煙が巻き起こる。ヤマタノオロチの登場である。

ギロチン処刑広場から少し離れた荒野に長髪黒髪の男と、大きな
剣と長いどじょう髭が印象的な鬼が立っていた。

「そんな小刀でここまで戦うとは、やりますね」

卑しい敬語で話すのは鬼の方で、名を鍾馗という。

「大剣を器用に用い私の小刀を避ける貴様もたいしたものだ」

そしてこのお方が地獄組若頭の柏木誠である。実力は地獄組内で
トップクラスであり、抜刀術を得意としている。お嬢の次に皆から
信頼されている地獄組になくてはならない存在だ。

若頭は亡者の列を出て偵察に行き偶然持国天一行に出会ってしま
った。一行の恐ろしい力を目の当たりにした若頭は一刻も早く地獄
組に戻らねばならない。だがそのプレッシャーからか抜刀での一撃

離脱を得意とするはずが、長期戦になってしまっていた。

こうして、地獄組と鬼たちの戦いが表面化した。

第五話・天国の動乱

メタボの兄、太一は天国に召されて数日が経っていた。そこはたくさんの緑と色とりどりの花に包まれた素晴らしいところだった。召された者は皆善人で、何の問題もなくただのんびりと時間が過ぎ去っている。

太一はそんな天国の中で目標を持って過ごしていた。といってもその目標も天国ではごくごく自然なことだ。それは自分が幼い時にここに召された母親を探すことだ。家に母親の写真が一切なく顔はうる覚えだが、何もしないでいるよりかマシだった。

太一がいつものように人がいそうな場所を探しうろつろしているとき、突如爆発音が聞こえた。音の方を向くと、光や煙が見える。天国の平穩神話は崩されてしまったのだろうか。

天国の中央宮殿。そこには天使や天国を管理する夜麻ヤマがいた。今日は地獄の使者と会談がある日で、宮殿の会議室で行われようとしている。その会談は地獄から持ち掛けられたもので、会場には張りつめた空気が立ち込めていた。

「地獄の使節団のご到着です」

天使が重々しい声で言い、扉が開けられた。入ってくる人物を見ると、夜麻は思わず立ち上がった。

「エンマ、何しに来た！」

夜麻が叫んだ通り、そこには数人の鬼を引き連れたエンマがいた。「久々の兄弟の再開だと言うのに、つれないね」

「貴様との縁など、とうに切ったわ！」

エンマは声を張り上げる夜麻を気にせず椅子に腰掛けた。数人の鬼はそのまま突っ立ったままだ。

「まあ、今日は使節団として来たんだ。話を聞いてよ」

夜麻は嫌々席についた。この会談はタルタロス、エリュシオンの承認を得た正式なもので無下にはできないからだ。

「単刀直入に言うよ。天国をくれないかな？」

「何をバカげたことを…、話にならん、帰れ！」

夜麻はテーブルを思い切り叩き、その音が暫しの静寂を生んだ。

だがそれは暫しでしかなかった。エンマは直ぐに口を開き言葉を続ける。

「僕はね、ふと思ったんですよ。人間はどうしようもない生き物だと。罪を犯さ

ず生きてきた人間なんていないぐらいにね。大小はあるけど、罪は罪。裁かれな

いなんて不公平だ。だから天国なんて必要ない。いや、天界なんて必要ない。冥

界だけでいいんですよ」

夜麻の怒りは頂点に達していた。夜麻にとってどうしようもない人間がいるのも事実だが、一生懸命生きてきた善人がいるのもまた事実なのだ。その善人を否定されることは天国を否定されることと同様に許しがたいことだった。

「エンマ！ これは明らかに天国に対する越権行為だ。それ相応の対応を取らせてもらう！」

夜麻は立ち上がり右の手のひらから炎を生み出した。それを見てその場にいた天使は短剣を構え、鬼たちは金棒を構えた。

「望みというならば」

エンマが指を鳴らすと、待つてましたと言わんばかりに鬼たちが攻撃を仕掛けてきた。

「僕らが使うことになる宮殿だ。あんまり壊さないでね」

外からこの騒ぎが聞こえたのか、外で待機していた鬼たちも暴れ始めていた。宮殿の中と周辺で鬼と天使の争いが始まったのだ。

しかし天使と鬼では力は鬼の方が上であり、数が多くホームグラウンドとはいえ天使の劣勢は否めなかった。だが天使勢に戦闘専門部

隊がいらないわけではなかった。宮殿周辺に細い光の筋が次々と鬼たちを貫いていく。

「天国のピンチに我らあり！ ヴァルキリー隊の登場よん！」

この場の雰囲気合わないハイテンションの持ち主は紛れもなく天国戦闘部隊ヴァルキリー隊の隊長、エレン・ヴァルキューレである。

ヴァルキリーは戦闘能力に特化した天使の称号のようなもので、西洋騎士の鎧みたいなものを身に纏い、三角錐の長く大きな形状をした槍、ランスを武器にしている。それは穂先、通称スパアーヘッドと呼ばれる部分が膨らんだ形状をしていて、そこから光の筋、俗にいうビームが出たのだ。

生き残った鬼たちはヴァルキリー隊の存在は知っていたがどんな人物がいるかは知らず、少し困惑した。

「ええい、エンマ様の命令では最優先事項だ！ 徹底的に叩き潰せ！」

鬼は体勢を立て直し、反撃に出た。ヤタガラスに掴まり、航空能力を得たのだ。しかし遠距離攻撃手段を持たない鬼はやはり突撃するしかない。

「あらま、悪魔みたいね。でも悪魔退治のがお手の物よん！」

エレンはヤタガラスを狙って撃つよう指示を出し、その目論みは成功した。これらの様子をいつの間にか宮殿から脱出しその屋根の上でエンマが見ていてため息をついた。

「さすがは天国の守護者達だね。応援を呼ぼうかな」

なにやら呪文を唱えると、エンマの周りに光が生まれた。

「聖獣の名の下に我が望みを叶えよ…、空間を掌握し『麒麟』、我が下僕達を召喚させよ！」

そう言うつと空間に歪みが生まれ、そこから麒麟が現れた。そして麒麟が咆哮を上げると、上空から強い光が射し、そこからたくさん鬼とヤタガラスが出てきた。そして、それらを率いる四天王の一人増長天が現れた。

「やっぱりあの程度の戦力じゃ天国は崩落出来ないみたいですね？」

「そうみたい。でも君とその部下ならやれるでしょ？」

「お任せを」

増長天は甲冑を身に付けているのにも係わらず、飛び上がりながら移動していった。鬼はヤタガラスとペアになり飛んでいった。

「やっと見つけたぞエンマ！」

エンマが振り向くと目線の先には夜麻がいた。肩で息をし、相当探し回ったようである。

「兄さんと戦うと宮殿が壊れそうだからあまり戦いたくないんだけどね」

エンマは金棒を構えた。言葉に反してやる気満々である。

「貴様、麒麟を…。まさか『四霊』すべてを!？」

「さあどうだろうね！」

エンマは金棒を槍のように構え突進した。夜麻は炎を出し牽制するも、それをものともせずエンマは間合いを詰め、夜麻に重い一撃を加えた。

増長天はヴァルキリー隊隊長を探していた。天国にとっての対抗手段がヴァルキリー隊だけなら頭を潰せば戦闘が早く終わると考えたからだ。だが理由はそれだけじゃない。

「どいつもこいつも弱そうだなあ。これじゃ隊長も期待できそうにねえなあ」

この台詞から分かるように、彼にとって戦闘は楽しみであり、娯楽程度にしか思っていないのだ。あちこちで戦ってるヴァルキリー隊たちを見て自分の欲求を満たしてくれるのは隊長格だけだろうと判断した。

「あらん？ あの鬼…、何か感じが違うわね」

エレンは増長天に気がついた。エレンが言う“感じ”とは単に見た目から判断したものではない。増長天の放つ百戦錬磨な殺気と子

供染みた好奇心が交じった、不思議な感覚を感じ取ったのだ。

「なんか気味が悪いわ…」

増長天もエレンに気付き、彼女に突っ込んでいった。ニタニタ笑いながら突っ込んで来たためエレンは余計気味悪かった。

「随分積極的だけど、強引なのは嫌いなよね!」

エレンはランスを振り回して増長天を払うも、体をひねって避けられた。

「やるなあ! んじゃ、こいつはどうかな!」

増長天は金棒をブーメランのように投げた。エレンは金棒を避け帰ってきた金棒をランスで突き衝突を防いだ。しかしその時エレンは増長天に背を向けてしまい、その隙を突かれ背後からホールドされていた。

「ちよ、離しなさいよ!」

エレンは必死に抵抗したが増長天の腕力は強かった。増長天はそのままバツクドロップの態勢を取り落下していった。

「ちよつと、このままじゃあんたも危ないんじゃないの!？」

「四天王はそんなにヤワじゃないんでねえ」

「四天王…!？」

「それにお前つてクッションもあるしなあ!」

増長天はエレンを下に放り投げた。

「きゃあ!」

エレンは地面に激突し、増長天はエレンを踏みつけ着地した。エレンは吐血し、暫く動けなくなった。

「ヴァルキリー隊隊長つてもこの程度かよ。つまらないねえ。さて次行くかあ」

増長天は次の強者を求め去っていった。エレンは気を失った。まだ戦が終わったわけではないが、この事態は天国にとって悪い方向に向かって進んでいることは確かである。

第六話・フェアリー

太一は火の手が上る方へ近付いて行った。するとどんどん自分の方へ人が走ってくる。やがてそれは太一をそこらに生えてる木が転がる石を見るような目で走り去っていく。悲鳴や必死で地面を蹴る音を伴いながら。太一は途中、「逃げる」、「殺されるぞ」、などと叫ぶ声が聞こえたが、人と逆向きに行きたがる足を止めることはできなかった。それは正義感からなのか、単なる好奇心からなのか、自分でも分からない。

暫く進み空を見ると、天使さえ血相変えて逃げている。天使は天国で主に死人の世話をしていて、真面目な種族だ。それが自分の役割を投げ出して逃げている。太一は天国そのものに危険性を感じた。だが逆向きを進む足が踵を返すことはない。

上げていた顔を元に戻すと、何か小さな物体が太一の額にぶつかってきて、そのまま尻餅をついた。

「ごめん！ でもさっさと逃げた方がいいよ！」

太一は驚きでぶつかった怒りを無くした。目の前で羽の生えた小さな人間喋っているのだ。パッチリした目、白磁の肌、華奢な体と可愛いらしい少女のような姿だ。

「妖精か!?!」

よほど気になったのか太一がまず発した言葉がこれだった。

「えっとフェアリー族っていう一応天使で…、じゃない！ 早く逃げるの！」

その小さな天使は、太一の耳を体いっぱい使って太一を逃げさせようとする。

「耳がっ…！ やめろ！」

太一が声を荒らげると、それを上回る声で鬼の雄叫びが聞こえた。二人の背筋は凍りつき、足が竦む。そしてどこからジャンプして来たのか、鬼が上空から着地した。

「これは珍しい！ フェアリー族か！」

何が楽しいのか鬼の声は意気揚々としている。だがその表情はおびただしい他なかった。

「くそ、喧嘩はアイツのが得意なのに」

太一は脳裏に自分の弟の顔が浮かんだ。別段運動神経が鈍い訳ではないが、喧嘩というものはメタボと違いしたことがない。だが太一は後に退こうとはしなかった。

「何考えてんの！？ さっさと逃げて！」

「君みたいなお小さい子、放って逃げられないよ」

「そういう種族なの！ 魔法だって使えるしあんたの十倍は強いわよ！」

鬼は律儀に会話が終わるまで待とうとしたが、我慢の限界が来た。「ごちゃごちゃうるさい！ まとめて殺してやる！」

鬼は金棒を振り回しそのまま投げた。太一は尻餅をつき偶然避けることが出来た。

「ちい、このへっぴり腰が！」

金棒は遠くで木に突き刺さってしまい、戻ってこない。鬼は肉弾戦を挑もうと突っ込んできた。が、光一線がそれを遮る。

「チャム！ 大丈夫か！」

太一は空を仰ぐと一人のヴァルキリーが佇んでいた。ゆっくり翼をはためかせながら下りてくる。「シャロン副隊長！ 来てくれたんですね！」

チャムと呼ばれた小さな天使は、シャロンの登場がよほど嬉しいのかチヨロチヨロとシャロンの周りを飛び回る。

「ああ、これ以上鬼の勝手にはさせん！」

シャロンはランスを鬼に向け口上を叩きつけた。鬼はこの状況に顔を歪ませるところか、憎たらしく笑ってみせる。

「面白い！ やってみせるよ鳥人間！」

鬼はまたも肉弾戦を挑もうとシャロンに突っ込んでいった。シャロンは二人に下がれと言うと、牽制にビームを二、三発撃つとラン

又を構え鬼に向かっていった。

暫く両者一步も退かないつばぜり合いが続く。太一はこんな状況で何も出来ない

自分に苛立ちを覚えた。

「クソっ！」

思わず漏れた太一の言葉で、チャムは太一の苛立ちを感じ取った。

「力、あげよつか？」

「え？」

太一の疑問はもつともだ。こんな小さな天使に何が出来るのであるうか。いや、容姿は妖精そのもので彼女自身も魔法が使えると言っていた。

「ぐっ…！」

鬼のパンチがシャロンのみぞおちに決まり、シャロンは片膝をついてしまう。

「好機！」

鬼はランスを蹴り上げ、それは太一の側に突き刺さった。その後シャロンは一方

的に鬼に痛めつけられる。太一は見ていられなかった。

「チャムって言ったな…。力をくれるのは本当か！」

「本当よ。…シャロン副隊長を助けて！」

「もちろんだ！」

「じゃあ…！」

チャムは歌を歌い出した。太一はそんなことしてる場合じゃないと怒鳴ろうとしたが、自分の身体の異変を感じた。なぜだか感じる高揚感、何でもできそうな気がする自信、太一は自分に強大な力が備わったのを感じたのだ。

「チャム、この歌は？」

「ソルジャーソングって言って歌を聞いた者は一定時間パワーアップするの。ついでに特殊能力がなんか付くらしいよ」

話を聞いて曖昧なものだと太一は思ったが、自分の身体に起きた

事態を否定することはなかった。

太一はまず側に突き刺さったランスをシャロンに届けようと思った。いくらパワーアップしたと言えど鬼に敵うかは分からない。自信に溢れているとは思えないほど太一は冷静だった。

だがランスを持った瞬間、自信が上回った。ランスの握り、ビームの出し方、そして戦闘術が太一の頭の中に刻み込まれたのである。しかし自信と冷静さの葛藤のすえ太一はランスを届けることが第一だと考えた。

「出るお！」

太一はビームを出し鬼の注意をシャロンから反らせようとした。鬼は軽々ビームを避け太一に注目する。

「次は貴様が相手をするか！」

太一は舌打ちした。鬼は必要以上に自分に興味を持ってしまったようだ。これではランスをシャロンに届けることが困難になる。

「あんたが戦えばいいのよ！」

チャムは太一を見透かしたように叫んだ。その声をきっかけに太一は奮い立った。

「やってやる…！」

太一はランスを鬼に向ける。そしてがむしゃらに突撃した。しかし鬼はそれを真正面から受け止めた。太一はビームを出そうとした時、鬼は飛んで避け距離を開けた。

「ビームを二回も…、まぐれじゃねえみたいだな。面白い」

鬼はニヤリと笑う。太一はビームを出すことがそんなにも珍しいことが分からなかった。いや、そんなことを考える余裕が無いのだ。鬼がジグザグに動きながら近づいてくる。その速さに翻弄され太一は狙いを定めることが出来ない。

「こうなりや！」

太一はランスの矛先にエネルギーを集中させ、ランスを空に放り投げた。

「なんだと!？」

鬼は思わず足を止めてしまう。その隙に太一はジャンプしランスをキヤッチし鬼に突撃し、ランスが鬼の胸を貫いた。引き抜くと血が吹き出し、地面を赤く染める。幸い太一にはさほどかからず、鬼は地面へ倒れた。太一は緊張の糸が切れたのか地面に座りこんだ。チャムとシャロンが駆け寄ってくる。

「シャロンさん、ケガはもういいんですか？」

「ああ、チャムのおかげでな」

「チャムの？」

太一は視線をチャムに送ると、チャムはウインクで返した。

「気になるなら後でチャムに聞け。まだまだここは危険だ」

シャロンはランスを拾い上げて言った。太一が座りこむ時に落としたりしない。

「しかしあそこまでランスを使いこなすとはな、君がヴァルキリーならと思うよ」

「だったら俺が…」

シャロンは太一の口を塞いだ。

「君は守る対象だ。頼む、逃げてくれ」

そう言い残しシャロンは飛び去った。シャロンの誇りや信念が分からない太一ではない。名残惜しそうに口を開く。

「分かりました。ご無事で」

太一は走り出した。自分はどうか戸惑っているチャムにシヤロンは指で背中を押した。

「ついてやってくれ…」

チャムはコクンと頷くと太一のところに飛んで行った。

シャロンは見えなくなるまで二人を見つめた。そして煙の登る天国宮殿の方を向く。フェアリー族の能力は相手との相性で大きく変わる。先程の戦いを見て太一とチャムの相性はかなりいいと思った。自分が手こずった相手を簡単に倒してしまったのだから。太一の協力を得ればあるいは…

「最早考えまい」

太一は守るべき死者の一人。そう思い送り出したではないか。シヤロンは自分に言いかけ、戦場へ飛びたった。

第七話・持国天

組員の方々は再び立ち上がった。そしてドスを握り直す。持国天はいい加減面倒臭そうに構えていた金棒を杖代わりに言った。

「興醒めだな…。てめえら、俺の代わりにこいつらやつちまいな！」

持国天の後ろで待機していた鬼は金棒を挙げ歓喜し、ドタドタと組員の方々に駆け出した。組員も覚悟を決め駆け出そうとしたとき、強い光がし、そこから巨大な亀が現れた。

「これは…、玄武！」

持国天は口角が上がる。しかし鬼を含め皆何が起こったか分からない様子だった。

巨大な亀の上から三人飛び上がり着地してきた。メタボ、ヤツシー、そして亜依奈である。

「ご苦労だったね、玄武」

亜依奈がそう言うのと玄武は光に包まれ静かに消えていった。組員も鬼たちも口をポカンと開けたまま呆然としている。

「ヤツシーにメタボ…？」

「心配ない。この姐さんは味方だ。…正直俺も状況を整理しきれない」

そういうヤツシーの表情は少しひきつって見えた。無理もないことである。一緒に玄武に乗ってやってきたとはいえ、なされるがままといった風だったのだから。

「とにかく今は目の前の鬼たちだ！」

メタボは武器庫で奪った金棒を構えた。

「どうやらエモノは手に入ったようじゃな」

「この姉ちゃんのおかげでね。これで俺も戦える。」

メタボの言葉で鬼たちへと移った。

「お前、意外に場が分かっているじゃねえか。だが俺はその女しか興味がねえ。鬼頭亜依奈！ よくも武器をこんなやつらに提供しや

「がったな！」

持国天の叫び声が訝する。

「やっぱバレたてたか。ま、あんたはここで倒されるんだ。何でもいいじゃないか」

亜依奈は持国天に金棒を向けて応えた。

持国天は嬉しそうに金棒を構えた。

「嬉しいねえ！ 野郎共！ 亜依奈は俺がやる！ さっき言った通りザコ共を片付けろ！」

亜依奈達の登場で足を止めていた鬼達は再び雄叫びを上げ地獄組に突貫して行った。組員達は気持ちを切り替え鬼達を迎え撃とうと構える。

「本当に鬼とやり合うのかよ…」

メタボが吐露したことをヤツシーは聞き逃さなかった。

「嫌なら隠れててもいい。けど自分の身は自分で守れよ」

小声で自分は戦闘向きじゃないと耳打ちすると、既に突貫している先輩組員の後に続いていった。二つの勢力はぶつかり戦闘が始まる。亜依奈は持国天と激しい攻防戦を繰り広げ、組員達も奮闘している。当然ヤツシーも。メタボは金棒を握りしめた。

「ヤツシーに出来て、俺に出来ないわけねえ！！！」

メタボは戦場を駆けた。目についた鬼をひたすら殴りにかかった。

「ぐぎゃあ！」

鬼が痛がつている。メタボの攻撃が効いているのだ。だが簡単にやられてくれる鬼ではない。鬼はメタボを殴り飛ばした。メタボの身体は宙を舞い、そして地面に叩きつけられる。

「ぐ…」

「メタボ！」

先輩組員はメタボの身体を半身起こした。そしてメタボに鬼の攻撃は魂を消す程の力があることを教えた。だが、先程の鬼の様子から分かるように、こちらの攻撃で十分鬼を倒せることも教えた。

「これじゃ本当の殺し合いじゃねえか…」

メタボは立ち上がり金棒を構えた。言葉とは裏腹に戦意は衰えてないようだ。

「鬼退治と行くぜ！」

メタボは叫びながら鬼の群れに飛び込んでいった。金棒を振り回し鬼をどんどん薙ぎ倒していく。その姿は宛ら鬼神のようだった。もう鬼に臆していたメタボはいなかった。

「スゲえ…、火事場のバカ力ってヤツか？」

ヤッシーはメタボの著しい変化に驚愕した。メタボの意外な頑張りにより地獄組は鬼を追い込んでいく。

「ち、あのガキやるな…」

「何ぶつくさ言ってるんだい！」

亜依奈は思い切り持国天のみぞおちを金棒で突いた。持国天はうずくまり膝を地に着ける。それが持国天の怒りに火を付けることになった。

「亜依奈ア！！！！」

持国天は亜依奈の足を掴んだ。

「しまった！」

そのまま持国天は立ち上がり亜依奈を掴んだままジャイアントスイングのようにぐるぐる回り、そして投げ飛ばした。

「くっ！」

亜依奈は悲鳴を噛み締め衝撃に備えようとしたが、ダメージは大きい。地面をえぐり、二三跳ねとび、動かなくなってしまった。

「亜依奈さん！」

メタボは叫んだ。しかしその声に亜依奈は応えない。

「く、互角じゃなかったんか!？」

組員の一人が地団駄を踏む。確かにこの場で戦っていた者の目にはそう映っていた。それがいきなり倒されてしまった。持国天が力を抑えて戦っていたとしたら、恐るべきことである。

「俺は四天王だぜ？ 夜叉ごときに遅れを取るかよ！」

メタボ達は持国天を取り囲むが、ここまで実力差を見せつけられると手を出せない。

「くそお！」

意を決してメタボが突っ込んだ。金棒と金棒がぶつかり合う金属音が虚空に響き渡る。それは一撃で止まらず、二撃三撃とどんどん響く。

「こいつ…、人間にしては…」

軽々とメタボの攻撃を受け流し捌く持国天だが顔をしかめて呟いた。

「はあっ！」

持国天は初めて自ら力を入れメタボの攻撃を弾き返した。その衝撃でメタボはよろめき尻餅をついてしまった。

持国天はメタボの首を掴み持ち上げた。

「人間にしてはあの連打は見事だ…。俺の部下を薙ぎ倒したのも頷ける。」

メタボは持国天を蹴ったり手を引き離そうと抵抗するが、締め付けは強くなるばかりだ。

「だが、四天王の降すには及ばんっ！」

持国天は力をさらに入れ、とうとうメタボの抵抗は止まってしまった。糸の切れたマリオネットのように手足が力無く垂れていた。ヤッシーや他の組員は憤慨することもできずただ恐怖に震えるしかなかった。

「くそ！」

ヤッシーはナイフを構えた。

「やめろ！」

組員の制止の声も聞かずヤッシーは突っ込み、持国天のメタボを掴む腕にナイフを刺した。血が流れるが持国天に痛がる様子は無く不気味に笑っただけだった。

「そんなにこいつが大事か？」

ヤッシーの中で恐怖が打ち勝ち足をすくませた。その刹那持国天

はヤツシーを蹴り上げメタボを放り投げた。地面に叩きつけられた衝撃でヤツシーは気を失った。

「残るはつまらぬ雑魚ばかりか。まあ俺の部下の礼でもさしてもらおうか」

持国天が腕に刺さったヤツシーのナイフを抜き捨て組員たちに近付いていく。彼が組員たちを屠る（ほぶ）のにそう時間はかからなかった。

第八話・若頭VS鍾馗

若頭と鍾馗が対峙していた。小刀と大剣、若頭の方が不利に見える。しかしやり方次第では若頭にも勝ち目はある。少し小競り合いをし、一旦互いに退くとそれを分かったから一步も動けないのである。

「いつまでもこうしているわけには…」

その焦りから若頭は鍾馗に突っ込んだ。鍾馗は好機とばかりに大剣を振るう。だが、焦っていたと思われた若頭の方が上手だった。大剣を冷静に見切り大振りの隙を突いて小刀を刺し込んだ。

「ぐうっ！」

鍾馗は悲鳴を上げ反撃に出ようとしたが、その前に若頭は鍾馗から離れた。

「人間にしてはその反応速度…、素晴らしいですね」

脇腹に刺さった小刀を抜き捨て鍾馗は悪態を吐いた。優秀な武人である鍾馗が傷つき流血する、ましてや人間相手になどあってはならないことだ。

「褒め言葉と受け取ろう。伊達や酔狂で若頭をしているわけではない」

「若頭…？ 極道者が、島の縄張り争いと同じにしてもらっては困りますね」

若頭は微笑を浮かべた。それは鍾馗にとって自尊心を刺激する不愉快なことではなかった。大剣を構え若頭に振り下ろす。若頭は受け流すようにそうっと小刀で防いだ。若頭に取って鍾馗のようなタイプは御し易い。普段の鍾馗ならこのような力任せはしないが、若頭によって完全に感情のコントロールを奪われていた。

「くそお！ その余裕の笑み、腹が立ちますね！」

キーンッ！ キーンッ！

鋭い金属音が響く最中若頭は微笑を崩さない。

「生前島の縄張り争いなんぞしてはいない。毒を持って毒を制す…、ただそれだけだ」

「何を仰る！ 所詮は地獄に堕ちた罪人だろう、この偽善者が！」
鍾馗が縦に大剣を振り下ろすと若頭は受け流すことはせず避けた。その一撃は勢い余って地面に突き刺さった。若頭はその隙に鍾馗と距離を取る。

「偽善者か。そうだな、所詮我らは罪人だ。この地獄にも我らを恨む輩もいるだろう。だが、必要なことだ。我らの世界にも、この地獄にも」

鍾馗は大剣を地面から抜こうと試みるが、焦っているせいか中々抜けない。若頭は小刀を構え鍾馗に高速で突撃した。鍾馗は急いで避けようと大剣から手を離すが、その時には小刀が腹に刺さっていた。

「く…、貴様本当に人間ですか…？」

鍾馗は刺さった小刀を抜き捨てたが、片膝をついてしまった。

「仏に支えた者の落とし子が我が一族の祖と云われるが、眉唾物だ。」

若頭は地面に刺さった大剣を抜き取り、その刀身を鍾馗の首筋に沿わした。

「仏に支えた者が、極道に堕ち地獄の役人に牙を向くか…。天国で御先祖が泣いてますよ」

ドサツ…

鍾馗の首が落ちた音だった。鍾馗の最後の言葉は若頭の逆鱗に触れるにたる言葉だったのだ。人あらざる者でも血が通うようで、大剣は血糊がつき若頭は多少返り血を浴びた。

「天国の祖先を泣かすのは貴様らであろう、下衆が！」

鍾馗の屍から大剣の鞘を奪い、それに大剣を納めた。

「武器不足が否めなくてな…。」

若頭が先を急ごうと歩みを進めるが、足首を掴まれるのを感じた。
「な!？」

「この私が刑天のように生き長らえるとは…、だがいいでしょう。これも高尚なる持国天様のため。必ずや倒して御覽にいれる！」

若頭はたじろんだ。鍾馗は首無しで言葉を発し足首を掴んでいるのだ。そのまま鍾馗は立ち上がり若頭を投げ飛ばした。

「さて、いささか気だけで位置を把握するのはちとつらいですね。目も使うとしますか。口も言葉がこもってしまえますからね」

鍾馗は服を上半身だけ脱いだ。すると両胸に両目が、へその辺りに口があった。

「その姿…、まさしく刑天！ 戦いの舞を踊るか！」

若頭は大剣を構えた。刑天とは主君の仇討ちのため単身天帝に挑むも返り討ちにあい首を切り落とされてしまいが、戦うことを諦めず首無しで戦い続けた妖怪である。

「このままあなたを生かしておけば必ず持国天様に仇なすでしょう…。その憂いを断つことができるなら、戦いの衝動に身を委ねるもよいでしょう！」

鍾馗は雄叫びを上げると若頭に突進してきた。

「徹底的に叩き潰すしかないようだな！」

若頭は大剣で迎え撃つが受け止められてしまった。刃でないところを両手で挟まれたのだ。

「く…。」

明らかに力が上がっているのを若頭は感じた。それに飲まれてしまつ前に後ろに下がった。

「持国天とやらへの忠誠心が成せる業とでもいうのか…」

「気安く持国天様の名を口にするな！」

また鍾馗が攻撃を加えてくる。若頭は牽制に小刀を投げた。鍾馗はそれを掴む。

「苦し紛れの攻撃が…、何っ!？」

鍾馗が気付いた頃、若頭は自分を切りかかる直前だった。胸に小刀を投げることは今の鍾馗にとって目に投げられると同義。小刀を掴んだ腕により鍾馗の視界は狭まり若頭に気がつかなかつたのだ。

鍾馗は真つ二つに裂け、二度と立ち上がることはなかった。

「刑天は巨人故に脅威だったのだ……」
そう呟き若頭は二つに裂けた鍾馗の屍から立ち去った。

地獄のどの辺りだろうか。ともかく渓谷まで忍者はお嬢担ぎ逃げてきたはずだった。ところが意外な追跡者に狙われた。ヤマタノオロチである。渓谷を崩し砂ぼこり、いや砂嵐を起こしながらそれは現れた。忍者はお嬢を担いだまま落石を避け渓谷の天辺まで登る。

「見つけたぞ！」

ヤマタノオロチに乗っていた鬼が叫ぶ。

「まさかこないなもんが追ってくるなんて」

「……………」

単身ヤマタノオロチに挑もうとする忍者をお嬢は腕を掴んで止めた。

「うち腹くくる。地獄組の長として、皆の魂消されるん見過ごすわけにはいかん。守られるより守りたいんや！」

頬を伝う涙が一つ二つと数を増やす。忍者は何か言おうと口を動かそうとするが、ヤマタノオロチに阻まれた。急ぎお嬢を担ぎ上げ飛び上がる。次の着地地点を探しながら忍者はぼそぼそと言葉を綴る。

「…共にこの場を脱しよう」

着地しお嬢を下ろし言葉を続ける。

「指示を、お嬢……」

「忍者……」

お嬢は涙を拭い勝ち気な表情を見せた。

「ほんなら、ヤマタノオロチを攪乱し引き付けて。うちはあの鬼を」
忍者は頷きクナイを構えてヤマタノオロチに突っ込んだ。お嬢も別の頭に突っ込んでいく。崩されたといえど渓谷は広く二人は跳び

はねながら上に登り、ヤマタノオロチの頭、そして鬼に近づく。そして忍者はクナイを投げ注意を引き、ヤマタノオロチの頭が突っ込んできたのを見計らってギリギリで避け溪谷の壁面に突っ込ませる戦法をとった。たが生身で地下を掘り進むほど頑丈な頭で、ヤマタノオロチはほとんどダメージを受けていなかった。

お嬢は軽々と鬼のいるヤマタノオロチの頭までたどり着き、鬼が面食らっている間に抜刀した。

「な!?!」

「猛ろ! 烈獄丸!」

お嬢の叫びと共に鬼は斬殺された。これでヤマタノオロチに指示を与えるものはいなくなった。だがヤマタノオロチの勢いは衰えることはない。

「やっぱあかんか…」

だがお嬢は諦めてはいない。飛び道具が無いため直接攻撃を試みようとお嬢は今乗っているヤマタノオロチの頭に刀を突き刺した。

「はあ!」

「ギギヤアアア!!!」

ヤマタノオロチは悲鳴をあげ必死にお嬢を振り落とそうと頭を振る。お嬢は暫くは耐えられたが、次第に握力の限界を迎える。

「くっ!」

仕方なくお嬢は歯をくいしばり刀を抜いた。当然ぶっ飛ばされてしまう。溪谷の壁面に衝突かと思われたが、間一髪忍者が受け止めた。

「すまん、助かった。」

忍者はお嬢を地に下ろすと指示を仰いだ。

どないしようかな…

お嬢は一つの頭だけのたうちまわるヤマタノオロチを見て独白した。

第九話・ヤマタノオロチ

地獄組は劣勢だった。持国天との戦いでもはや立っている者は鬼の軍勢しかなく、若頭と鍾馗との戦いは辛くも若頭が勝利を収めるも、激戦のため鍾馗の大刀斬馬刀を奪えたが意識を失ってしまった。今戦っているのはお嬢と忍者とヤマタノオロチだけだった。

お嬢と忍者はヤマタノオロチの攻撃を避けていた。ヤマタノオロチは八つの首を巧みに使って連続で頭突きをしてきた。しかし二人はそれを全て飛んだり跳ねたりして避けているので地面は穴だらけになり溪谷の側面はボコボコなっていた。

「あんなに頭ぶつけといてまだ動けんのか!？」

お嬢が驚くのも無理はない。すでに全ての頭は血で染まっており、大きな血痕さえある。それにも関わらずヤマタノオロチは最初とスピードを落とさず攻撃し続けているのだ。

「ち、タフな奴じゃな」

「避けているだけではもたない……」

「分かつとる!せやけど攻撃の機会が……」

確かにヤマタノオロチはでかい図体の割りに攻撃は素早く、こちらの攻撃の隙が無い。捨て身覚悟で攻撃してもやはりあの図体ではあまり効果は無いだろう。

「こうなつたら……、忍者!合わせる!」

忍者はお嬢の考えを瞬時に理解し、巧くヤマタノオロチの頭を誘導し二人が合流しようとしたその時、お嬢は忍者を蹴り上へ、忍者は蹴られ下へといった。ヤマタノオロチの頭は見事にぶつかり合った。

忍者は落ちてくるヤマタノオロチの頭を体をひねって避けた。

お嬢は落ちているヤマタノオロチの頭に乗った。

大きな音をたて落下した後二つのヤマタノオロチの頭は動かな

かった。

「よつしゃ、これで後六つじゃ」

だが他の頭は攻撃を緩めない。まるで何ともないように攻撃を続けてきた。

「喜ぶ暇も無いんか！忍者！」

「御意……」

お嬢と忍者は同じ方法でヤマタノオロチの頭を潰していき、残りはうとう二つになった。

「よし、これで終わりじゃ！」

残りの二つの頭は急に動きを止めた。

「なんじゃ？」

ヤマタノオロチは息を一気に吸い、そして吐き出した。なんとその吐き出された息は毒の息だった。忍者は瞬時にお嬢を担ぎ、飛び上がりなんとかその息を吸わずにすんだ。

「す、すまん忍者」

忍者は毒の息がかかっていないヤマタノオロチの背中に着地した。

「でかした、これで斬り刻める！」

お嬢は抜刀しヤマタノオロチの背中をめったやたらに斬りまくった。忍者もクナイで斬り刻んだ。

「くぎやああああ！！！！」

ヤマタノオロチは悲鳴を上げ頭は頂垂れるように倒れた。

「よつしゃ！」

だが急にヤマタノオロチは体を揺らし出し、お嬢と忍者は振り落とされた。さらにヤマタノオロチの巨体がお嬢と忍者にのしかかろうとする。その時、忍者はヤマタノオロチの口に何かを投げ込んだ。そして口内で爆発し、ヤマタノオロチの頭は吹き飛んだ。

「な、どういこうこつちゃ！」

「符術大爆符……」

忍者は小さく答えた。ヤマタノオロチは爆風でのしかかろうと

した反対側に仰向けになって倒れた。そしてもう動くことはなかった。幸い忍者が吹き飛ばした頭が主となるものだったようだ。

「なんでもっと早く使わなかったん？」

お嬢が少し憤慨気味に聞いた。忍者は淡々と答えた。

「あの威力を出す力を込めるのに時間がかかる…すまない」

忍者は口下手なので淡々と聞こえてしまうのはお嬢は分かっていた。

「そうか…、なら仕方なかったわけやな。ほな行こか」

忍者は渋い顔を一瞬したが、一度は許してしまったのでお嬢を抱え走り出した。

地獄の中で八大地獄の黒縄地獄にあるギロチン広場。ここは亡者達にギロチンにより無限に斬首の恐怖を与える場所。そのためここが使われると受刑者達の断末魔が聞こえる。だが今は受刑者の数はあれど、断末魔が聞こえることはない。受刑者である地獄組の面々を四天王持国天が皆殺しにしたからだ。ここでの殺し、つまり死は魂の消滅を意味する。

「おい、こつちは何人残っている？」

持国天が近くにいた鬼に訪ねた。

「はっ！ 約三十です。そのほとんどが重傷ですが…」

そう答えた鬼にもたくさんさんの切り傷や打撲の痕がみられた。

「どの傷が堪える？」

「恥ずかしながら童わっぴにやられた傷が…」

「そうか…」

持国天は静かに頷き倒れた童…、メタボの方を見る。彼によって持国天が引き連れた鬼達は大打撃を受けたのだ。持国天は今さらながらメタボに興味を持ったが後の祭りである。

「お前から先に戻れ。ヤマタノオロチ無しじゃちと辛いだろうが…」
「分かりました」

「まあどっかで目玉野郎が見てるだろうから、運がよけりゃヤタガラスが拾ってくれるだろう」

そう持国天が言うのとヤタガラスの群れが近付いてくるのが見えた。「言った通りですね。流石は千里眼を持つお方だ。」

「この貸しは高くつくだろうかな」

ヤタガラスは次々と負傷した鬼達を掴んで行き運んでいく。うち一羽が紙を持国天に落とす。それは目玉野郎、もとい四天王の広目天からのメッセージだった。

貸しにしておきます。あなたの働き次第ではチャラにもしますがね。

メッセージを読み終え持国天はため息をついた。

「何やらされるか分からんが、仕方ない。ヤタガラスで帰れ。俺はここでヤマタノオロチと鍾馗を待つ」

「はっ！」

こうして持国天を残し鬼達は帰っていった。独り佇む彼は何とも言えない虚無感を感じていた。任務とはいえ魂を消滅させるのは彼にとって気持ちのいいことではないのだ。四天王の一人として情けないと自嘲するが、どうにも仕方がない。

持国天は再度広目天のメッセージを読み、意味を考えた。考えたくはないが鍾馗もヤマタノオロチも殺られてしまったのだろうか。だとすると広目天の言う働きとは彼らを倒した手練れを倒すことなのだろうか。それとも…、持国天は放置されるメタボを見た。

途中別人と思える力を開花しつつあった、あの人間。本当に人間なんだろうか。酒呑童子や茨木童子を倒した源頼光、地上に降りたヤマタノオロチを倒したスサノオなど鬼や妖怪を倒す人間がないわけではない。こいつもそれらのような特別な人間なのだろうか。「なに！？」

持国天が目をやっていた者が起き上がった。ますます人間離れ

している。特別な人間だという考えが真実味を帯びてきた。

「なっ！？ ヤッシー！ 亜依奈さん！ みんな！」

メタボの呼ぶ声に応える者はいない。それを解せると唯一立ち上がっている者に

眼光を向けた。

「お前がみんなを……」

メタボは溢れる怒りを抑えながら言った。

「そうだ。地獄への反逆は重罪だ。当然の報いだろう」

「うるせえ！ てめえが魂を消した奴らはな！ お前なんかよりよっぽどあの世こと考えてたよ！」

メタボは叫びながら持国天に突っ込んでいった。

第十話・メタボVS持国天

メタボは持国天を金棒で力いっぱい殴った。持国天は金棒でそれを受け止めた。だが今回は軽くというわけにはいかなかった。

「く…、明らかに力が上がってやがる…」

「てえりやああああっ！！！！」

メタボはさらに振り被り、追撃を加えていく。前回と違い明らかにメタボが圧倒していた。しかしさすがは四天王といったところか、持国天は全て金棒で受け止めていた。持国天の金棒を持つ手が血で滲んでいく。受け止めたとはいえダメージが全くないわけではないのだ。

「畜生があっ！！」

持国天は何とかメタボの攻撃を外し、攻勢に出ようとした。が、メタボの猛攻がそれをさせてはくれない。振り抜き、切り返しの速さが前回と比べものにならないほど上がっている。一度攻撃を外されたくらいでは問題にはならないのだ。

「おりゃあっ！！」

メタボが持国天の金棒を弾き飛ばした。これで持国天は丸腰である。

「く、小僧…」

これには流石に持国天も冷や汗をかいた。だが四天王の誇りにかけて、持国天は退くわけにはいかない。素手でも立ち向かう他なかった。

「うりやあああ！！！！」

互いの咆哮が交錯する。双方とも死力を尽くしていることが分かる。持国天の拳はどんどん血で染まり、メタボの金棒にはその血の跡がついていた。

「はあっ！！」

「ぐえ！！」

持国天の拳がメタボの懐に入った。持国天は仕止めたと思ったが、メタボは気合いで踏み止まった。

「なに…」

「へっ…、鬼の大将のパンチはそんなもんかよ。こうやって殴るんだよ！」

メタボは金棒を片手で持ち、空いた左手で持国天を殴った。

「ぐはっ！」

メタボのパンチは持国天の右頬を捉え貫いた。持国天はこのパンチといい、さっきの耐久力といい、メタボがまともな人間でないことを再確認した。今まではもしかや金棒に秘密があるのではと思ってしたが、耐久力を上げる金棒など聞いたことがないし、素手で殴られてこの威力だ。

「いい加減くたばりやがれっ！ みんなの仇が！」

「貴様だつて俺の部下を殺しただろうが！」

「人間みたいな口をきくんじゃねえ！」

メタボの一撃が持国天の腹部に強打し、持国天は大きくぶっ飛んだ。

「げぼっ…」

持国天は吐血した。腹をおさえ膝を立てるも立ち上がることができない。ゆっくりメタボが近づいてくる。

「みんな、短い付き合いだったけど、いいやつばっかだった。地獄のことや浮かばれない死者のことを一生懸命考えてた。もう死んでんのに絶望もしないでさ。それなのにお前は…！」

メタボの気迫は凄まじいものだった。持国天は自分がそれによって感じる感情が信じられなかった。四天王が死人に感じてはならない感情、恐怖である。自分は部下の仇も取れずに死んでいくのか…。

「これで終いだ。鬼の大将」

「く、四天王たるこの俺が…。何なんだよ、お前は！」

自分が恐怖を抱く者が人間であるはずがない。いや人間であつてはならない。人外の者でもないとプライドが許さないのだ。

「何が四天王だ！ エンマの操り人形の人殺し！」

「その人殺しを圧倒する化け物がてめえだろ…！」

「化け物か。てめえをぶつ倒せるってんなら、それも悪くねえ。けど俺は地獄組のメタボだ！」

どうやらメタボ自身も持国天を圧倒する力の出所は分からないらしい。

持国天は一つの推論を立てた。やはり源頼光なり吉備津彦命きびつひこのみことなりの血を引いているのか同じような存在であるかということだ。この推論が正しければ己れのプライドは守られるであろうが、地獄に害を為す存在になる。

「おしゃべりはここまでだ。死人の列に並びながら兄貴達の魂を悼め！」

兄貴達とは地獄組のやられてしまった者達のこと。魂が消えてしまつてはもう輪廻転生できない。それがどういふことかはつきりとは分からないが、悲しいことだというのはメタボには分かつた。

「いくら貴様らが地獄のことを考えていたとしても無駄だ。エンマ様既にもう一つ地獄を創りあげようとしている」

「なんだと!？」

メタボは思わず金棒を振り抜く動きを止めた。それは持国天として好機であった。

「隙ができたな！」

持国天はメタボの腹部に一撃を入れた。

「ぐっ！」

隙をつかれた一撃は先ほどの一撃とは格段にダメージが違った。

だがメタボは怯まずさっきの言葉を持国天に詰問した。

「てめえ…、エンマが何をしようとしてるか教える！」

「なっ…」

持国天は予想外なダメージの少なさに困惑していた。及び腰で一歩二歩と退いていく。実際には前途の通りメタボが耐えているだけだが、それでも持国天に恐怖を与えるには十分で、持国天は虚勢

を張るのが精一杯だった。

「さあな。言えるのはもう手遅れだっていうことだけだ」

「そうかよ」

その虚勢はメタボの怒りをヒートアップさせるだけだった。情報を得ることができないと判断すればすぐにも持国天を倒すだろう。

「もう一度聞く。エンマは何をしようとしてる！」

「何度聞かれようと俺は口を割らん」

「じゃあ仇をとらしてもらおう。てえりゃあああああつ！！！」

メタボの金棒が持国天に近づく。殺意をもった、本当に殺せる威力のあるものである。その刹那、持国天の思考が回る。

エンマ様…、貴方はとんでもない者を地獄に落としてくれた。このツケは貴方が払うことになるやもしれません。持国天はそう独白し散っていった。

「終わった…」

メタボは持国天の屍を蹴っ飛ばしその場に倒れこんだ。メタボの身体は限界に達していたのだろう。徐々に身体にダメージが出ることをし、限界以上の力を発したのだ。もう指先一つ動かすことはできない。

結局持国天からはエンマが何をしようとしているか分からなかったが、放っておくわけにはいかないだろう。それにメタボ自身の得体のしれない力。持国天が言う通り本当に化け物なのだろうか。薄れゆく意識の中、そんなことを考えていると、二つの方向から足音が聞こえた。

「み、みんな…！」

「……………」

忍者とお嬢がこの地に辿り着いたのである。さらに若頭も到着した。三人共確かにここで戦闘が行われたことを知っている。地表から激しいものだったことも分かる。しかし見る限りでは一人も人影が見当たらない。

「これは…、遅かったか…」

「柏木、無事やったか！ 良かった…」

三人は合流しまだ魂を消されずにすんでいる者がいないか搜索し始めた。

第十一話・仲間入り

地獄などあの世の住人は殺されなければ死ぬことはない。殺されたあの世の住人の魂は何処に行くかというところ、地獄より深い位置にあるタルタロスという場所にいく。その統治者ハデスによって審判を受けるのだ。

メタボに倒された持国天やその配下の鬼達、若頭に倒された鍾馗やお嬢と忍者に倒されたヤマタノオロチなどがハデスの審判を受けていた。

「死者の反乱で死んだとなれば普通エリクションに送るんだが、今回は事情が違
うようだな？」

ハデスは持国天に分かりきった質問をした。タルタロスの統治者たる者、どうしてここに来たのか、その経緯などすぐに分かるものなのだ。

「貴方の前で嘘を申せるはずがございません。私はエンマ様に忠義を尽くしたままで
です」

「そういつと聞こえがいいがな。お前はその忠義とやらの向かう先を間違えた。エンマもつくづく下らぬことを考えたものだ」

持国天はエンマをバカにされて苛立つがハデスとは絶対的に力の差がある。そこで腰低くハデスに聞いた。

「お言葉ですが、貴方もエンマ様のお考え分かるのでは？」

ハデスは嘲笑した。その矛先は持国天には分からなかった。分かりきった愚問をする自分なのか、エンマなのか、人間なのか。

「私はエンマほど絶望していない。貴様らは暗く何も無い牢屋で輪廻転生を待つがいい」

持国天やその配下の鬼達はハデスの部下、一つ目の巨人サイクロプスによって連行されていった。

ハデスはエンマの蛮行を知っている。持国天の他に、天国の戦闘で死んだヴァルキリー隊兵士などもタルタロスにきているからだ。どんどん死者が来ている以上その審判のため、自らエンマを止めに行くわけにはいかないが、その代わり根回しはしようと考えた。地獄には四天王を倒す豪傑がいるので天へ。

「ヤッシー！」

「う…」

ヤッシーはまだ息があつた。他を調べたが皆手遅れだったようでお嬢は泣いて喜んだ。

「派手にやられたもんだよ…」

お嬢ら三人は立ち上がった亜依奈を見た。面識が無いため鬼がまだ残っているという認識である。

「運の悪い奴やな…」

お嬢は刀を構えた。微かに蘇った意識でヤッシーがかすれた声で何か伝えようとしているが、お嬢には届かない。

「うちは今虫の居どころが悪いんよ」

「どうやら話を聞いてもらえる様子じゃなさそうだね」

亜依奈が肩をすくめ金棒を構える。

ヤッシーが必死に話かけているのに忍者が気付いた。ヤッシーに耳を貸し、伝えようとしていることの内容を聞いた。

「てりゃあつ！」

「困った嬢ちゃんだよ」

お嬢の刀と亜依奈の金棒が交わった。

忍者はヤッシーを若頭に託すと、お嬢が二打目を打ち込もうとする前に止めた。

「何しよんじゃ、放せ！」「こいつは仲間だ。そうヤッシーが言った」

お嬢は忍者の手を振り払おうとする力を緩めた。しかしどうにも

疑わしい。能面に鬼の角、幾度か見かけた女の鬼、夜叉ではないか。
「でも！」

喚くお嬢を無視して亜依奈はヤツシーに近付いた。

「何する気や！」

「こいつを治療する。魂を消されたわけじゃないなら大丈夫だよ」

若頭はヤツシーを寝かせ亜依奈に託した。亜依奈は何やら呪文を唱えるとヤツシーの傷は癒えていった。

「すげえ…」

「これはどういう理屈や？」

「嬢ちゃんの嫌いな地獄の役人だからさ。亜依奈ってんだ。覚えといておくれよ」

亜依奈曰く獄卒鬼他地獄の役人たちは死者を癒す能力を持っている。地獄の罰で

身体を切り刻まれようが、すぐに癒し苦しみを味わらせるためだ。

「ヤツシー、大丈夫か？」

「ああ…、嘘みたいにピンピンしてるぜ。ありがとう、亜依奈さん」

こうして元気になったヤツシーを見てしまっただけはお嬢は亜依奈を仲間と認めるしかなかった。

「今回は地獄の悪趣味が役立つたようやな。けど礼は言っとく。う

ちは月臣沙羅つきのおまろ。覚えといてや」

お嬢は地獄組の代表として亜依奈に敬意を払った。亜依奈は能面の下で周囲には分からなかったが微笑んで応えた。

「分かった。これからはエンマをぶっ倒す同志だからね。後はメタボだけかい？」

「何!？」

亜依奈が歩みを進める先には確かにメタボが横たわっていた。亜依奈はヤツシーにしてやったようにメタボの傷を癒した。

「う…、亜依奈さん？　生きてたのか！」

メタボも意識を取り戻した。持国天に全員殺されていたと思っていたので驚いた。この後皆他を探したが見つからなかった。魂を失う

とあの世での身体も失うらしい。

「みんなすまん…、組長のうちが不甲斐ないばかりに…」

みんなは仲間達を悔やんだ。だが悲しみに暮れてばかりではいられなかった。

「みんな、すぐにここを離れるよ。また鬼が来ちゃ厄介だろ？」

「分かった。お嬢大丈夫か？」

「ああ、みんなのためにも泣いてばかりじゃいられんやろ」

そういう目はまだ赤かったが、決意に満ちていた。

「出でよ玄武！ 私たちを例の場所へ導きたまえ」

光と共に玄武が現れた。初見のお嬢達はいそがしく驚いている。玄武はそんなことお構い無しに皆を乗せて光と共に消えた。そして玄武は皆を洞窟の入り口まで導いた。

「ご苦労だったね、玄武。もういいよ」

亜依奈がそう言うのと玄武は消えた。お嬢達はただ驚くばかりである。

「地獄には色んなもんがあるんやな…」

「さあ入んなよ。色々聞きたいこともあるし、話したいこともある」

「それはこちらも同じだ」

亜依奈の先導でお嬢、忍者、若頭、メタボは洞窟の中に入った。ヤツシーは「場違いだな」とぼやき少し遅れてついていった。

洞窟の奥にはいくつかの灯籠が灯しており、寝床があるだけだった。広さはそこそこあり、六人入っても余裕があった。それぞれ床に座り、お嬢が最初に口を開いた。

「まず聞きたいんは、誰が持国天を倒したんや？」

その場にいなかったものは薄々亜依奈が倒したものだと思っていたが、思わぬ相手から答えがかえってきた。

「実は俺なんだよね…」

「え？」

お嬢は啞然とした。まさかメタボが拳手するとは思わなかったのだ。

「本当か？」

若頭が冷静を装いながら聞いた。メタボは頷き持国天との戦いの詳細を語った。自分の得体の知れない力のこと、持国天が言っていたエンマが何かをしようしていること等々…。

「むづ…なるほど。ひよっとするとメタボもうちと同じかもしらへん」

「同じって？」

「鬼退治の血が流れとるんや」

「は？」

メタボは意味が分からなかった。若頭がついで説明してくれた。

「お嬢ははるか昔に鬼を退治した者の子孫だということだ」

ヤツシーも初めて聞いたようで啞然としている。

「じゃあ、勝算ってのはお嬢自身だったってことか？」

「そうや。文句あるか？」

「いや、無いです…」

ヤツシーはなんて自信家なんだと思ったがお嬢相手では引き下がるしかなかった。

「要するに、俺もとんでもねえ血だか遺伝子だかがあるってこと？」

「そうや。四天王の一人倒したって言うし、間違いないやろ」

お嬢が自信満々に言う。しかし亜依奈の表情は暗い。無論仮面を着けているので彼女以外誰にも分からないが。

「…確かにメタボを始めお嬢や忍者が強いつてのは分かったよ。若頭だっけ、その大太刀持つてるってことは鍾馗倒したんだろ？」

若頭は少し寝かしてある大太刀を眺め頷いた。

「けどまだエンマを倒すには心細いよ。もっと強くないとね」

四天王の一人を倒したとはいえ、地獄組はほとんど壊滅状態にされ残りの四天王を倒すだけでもかなり辛いと思われる。

「勝って兜の緒を締めろってことやろ？」

「それもあるけど、しばらく修行が必要ってことだよ」

「修行？　　ここでか？」

「ああ」

亜依奈は頷き、真ん中を空けるよう皆に言うと呪文を唱え出した。すると空けた空間に一人一人入れる地下への穴が現れた。

「スゲー…、あなたに出来ないことなんてないんじゃないか？」

「そうでもないよ。さあついておいで」

亜依奈を先頭に、皆はその穴へ入っていった。

第十二話・修行

お嬢たちが穴を抜けると、そこには平野が広がっていた。奥が霞んで見えるほどこの空間は広がった。

「スゲえ…。どうなってるんだこりゃ？」

キョロキョロ辺りを見渡すと二回ほどお世話になった巨大な亀をヤツシーは発見した。

「亜依奈さんあれって…？」

「ああ、玄武だよ」

「そんなことより、ここどこなん？　地獄とはなんか雰囲気違うみたいやけど…？」

お嬢の疑問は最もで地獄には育たないはずのまともな植物が雑草とはいえ存在したり、お嬢らが知る地獄とは違って見えた。

「ここは玄武の間。玄武の住みかだよ」

亜依奈が言うには玄武を始めとした四獣は極めてあの世に近いものの別空間に住んでおり、何らかの理由で四獣に認められた者だけが入れる空間らしい。

「ここなら追っ手が来ることもないし、思う存分修行が出来るだろ」

「ありがとう、亜依奈。お言葉に甘えて思いつきし使わせてもらうわ」

そう言うとお嬢は忍者を連れて走り出し、修行を開始した。

「ではヤシマドル。付き合ってもらおう」

「大剣相手はつらいけど、付き合いますよ。じゃあなメタボ」

若頭とヤツシーはお嬢らとは別方向へ走り出し、修行を開始した。

「さてと、じゃあ私の相手はあんただね」

「あんたはよしてくれよ、俺には早川雅人って名前があるんだから」
亜依奈小さな声で早川雅人の名を呟いた。聞き覚えでもあったのだろうか。

「メタボでいいだろ？　そう呼ばれてんだからさ」

「ちえ、まあいいけどね」二人は金棒を構えた。もうここで修行を始める気であるようだ。

「行くぜ亜依奈さん！」

「来い！」

メタボと亜依奈の金棒が衝突し鈍い金属音が響く。

四天王の一人広目天が管轄する大叫喚地獄の館。

「広目天様、持国天様を倒した一行の行方が分からなくなりました！」

「分かっています！ 私の千里眼でも分からないんですから！」

玄武：、厄介ですね」

広目天の額の眼が妖しく眼光を見せる。これは千里眼といい、広い地獄中を見渡すことが出来る優れ物なのだ。それゆえ広目天は担当する地獄の管轄だけでなく地獄全体の監視も行っているのだ。

「四獣の間では私たちは手も足も出ません。ですが、地獄に反旗を翻すなら真っ先に狙われるならここです。亜依奈がいるなら直接ここに攻めてくることだってできます。各員警戒を怠らないようお願いします」

鬼達は会釈するとすぐに自分の持ち場に戻っていった。それを見計らったように女の鬼が姿を現た。

「広目天様、もし亜依奈が現れたのなら、是非私に相手をさせて下さい」

「百々目鬼ひひめま…、いいでしょう。借りを返したいのなら返しなさい」

「ありがとうございます。では監視に戻ります」

百々目鬼は身体中の眼を開きそのやる気を示し、持ち場に戻っていった。

「さて、私はヤタガラスの記憶を解析しなければ」

いくら千里眼で地獄中を見渡せると言っても、見たもの全てを記憶出来るわけではない。無意識でただ見えているだけの部分は多いに

ある。そのためヤタガラスは地獄中を飛び回り広目天の記憶の補完をしているのだ。

「てりゃ！」

「なんの！」

ヤッシーは若頭の攻撃を避け続けている。本来ならヤッシーと若頭は比較出来ないほど技量差があるが、若頭は慣れない武器でその差が縮み互角に見えているのだ。

「若頭、そりゃちよつとひどくねえですかい？」

ヤッシーが言うように確かに若頭の動きのキレが悪い。

「さすがにこれだけの大太刀、振り回すのが精一杯だ。」

「振り回すつてより振り回されるつて言っただ方が正しいよな……」

普段冷静な若頭でもヤッシーのこの言い様には青筋を浮かべた。

「その言葉、後悔するなよ？」

ヤッシーはしまったと思ったが時既に遅し。

「ふんっ！」

「おわつ、ちよ、た、タンマ！」

大太刀の一閃がヤッシーの小刀を真つ二つに斬った。「し、洒落になんねえよ若頭！」

「む、私としたことが……。得物の数が少ないというのに。ヤシマドルの腕でも斬り落とせばよかったか」

ヤッシーはゾツとした。いくら亜依奈に回復してもらえるといてもあんまりである。

「回復してもらえらつて言っても痛いっちゃ痛いんだぞ！」

「それくらいの痛みに耐えなければこれからの戦いやつていけるものか！」

「それとこれとは話が別でしょう!？」

「問答無用!！」

ヤッシーは斬られても直ぐに回復してもらえらつよう亜依奈の方に

逃げた。

「何やってんやあいつら……」

「……………」

お嬢と忍者は武器を交えながら二人の様子を眺めていた。

修行を一時中断し、今後の方針を決めることにした。

「他の牢に掛け合い仲間を集めるのはどうだ？」

確かに地獄の鬼たち全て相手にするには絶対的に数が少ない。だがこれをやるには大きな障害がある。

「確かにそれはやるべきだけど、広目天を倒さないと難しいね」

「広目天？」

「地獄の監視官だよ」

亜依奈は簡単に広目天について説明した。

「じゃあ仲間集めようとしたら直ぐに見つかっちゃうってこと？」

「そうだよ。それに持国天との戦いを見てるだろうから、いざ戦うとなっても厄介だ」

「なに、うちらが持国天の時より強くなればええんや。そのための修行やる？」

お嬢は自信満々に刀を掲げた。ヤッシーはその自信の出どころが分からなかった。

「まあそういうこと。けど、あんまり時間はかけられないよ。エンマが何か企んでるんだからね」

メタボは持国天の最後の言葉を思い出した。はっきり何をするかは分からないが、絶対に止めなければならぬ。

「亜依奈さんの言う通りだ、さっさと強くなるうぜー！」

「言われんでもそのつもりや！」

「私はこの大太刀を使いこなせるようにならなければ……」

メタボが持国天を倒したことによりヤッシーは完全に置いてきぼり

になっていた。戦いになるなら武器の火事場泥棒くらいしかやるこ
とがないと思うが…。

「ちくしょー、俺だつて戦つてやる!」

「ほう、なら私の大太刀の修行相手になつてくれ」

「そ、それは勘弁してくれ!」

こうして皆気合を入れて各々の修行を行った。そして広目天攻略
の日が近付いてきた。

「亜依奈さん、作戦は?」

「玄武で広目天の館に奇襲をかける。これしかないね」

普通に乗り込んで千里眼で簡単にバれてしまうので、直接広目
天の目の前に現れ一気に叩こうと言つのだ。

「よし、修行の成果見せてやろうやないか!」

「お嬢やる気満々じゃねえか。亜依奈さん、玄武呼んでくれよ」

各々の士気は十分で目の前に広目天がいたら襲いかかりそうな雰
囲気である。

「じゃあ行くよ、玄武! 我らを広目天の館へ導きたまえ!」

玄武は皆を乗せると光を纏い消えた。

第十三話・広目天の嘲笑

玄武とともにメタボたちは光を抜けた。するとそこは広目天の館ではなく火の粉が飛び交う森だった。

「どうなってんだよ亜依奈さん!? 敵さんの本拠地じゃなかったの!?!」

「おかしいねえ…。まさかあいつ!」

亜依奈が目をやる先に突如広目天が現れた。直ぐ様忍者が手裏剣を投げる。しかしそれは広目天をすり抜けた。

「アーツハツハツハツ! 幻ですよ、妖術によるね!」

広目天の高笑いは皆には耳障りに聞こえた。

「狡いやつやのう。はよう来い! ぶった斬ったる!」

お嬢が剥き出しの闘志をぶつける。しかし広目天はそれを嘲笑うように話を進めた。

「私が出すまでもありません。あなた方は叫喚地獄が一つ、炎虫の森によって倒されるのです!」

広目天がまた高笑いを始めた。皆苛立っていたが幻である以上殴ることもできない。だがメタボはあることに気が付いた。

「俺たちは死人だぜ? 叫喚地獄だが高んたか知らないけど、地獄の刑罰なんだから殺せるわけねえだろ!」

広目天はそんなメタボの発言をさらに嘲笑った。

「私は四天王が一人広目天ですよ? そんなこと分かってるに決まってるじゃないですか! その炎虫には私が手を加えました。魂を喰らうようにね!」

広目天は指を鳴らし、炎虫に皆を襲うよう合図した。メタボ達は炎虫を避けたり武器で叩き落したりして対応していく、しかし如何せん数が多い。

「確かに厄介だが、こちらには亜依奈がいる!」

「そっや! 傷付いたって回復してもらえ!」

また広目天の不敵な笑い声が聞こえた。

「何がおかしいんや!？」

「確かに亜依奈の存在は厄介です。ですからこういう手を用意しました」

広目天がまた指を鳴らすと、今度は地中から大百足が現れ、亜依奈に絡みついた。

「しまった!」

「アーツハツハツハ! 不覚でしたね! あなたには別のゲストを用意していますよ」

大百足は亜依奈に絡みついたまま地中に潜っていった。

「亜依奈さん!」

メタボの叫びも虚しく、亜依奈が地中から出ることはなかった。

「これであなた方は回復することはありません。せいぜい醜く足掻いて消滅して下さい」

そう言い残し広目天の幻は消えた。

「くそ、亜依奈さんがいないとなると何処にいけばいいかも分からないし…」

ヤツシーの言う通り、亜依奈以外の者にとって叫喚地獄というのは馴染みのない地獄なので土地勘がない。ここを打破できたとしてもどうしようもないのだ。

「…皆伏せろ」

「は?」

「ええからしやがめ!」

お嬢はメタボを無理やり抑えつけ伏せさせた。ヤツシーと若頭もそれにならい伏せた。

「符術・散爆符」

忍者は札をばらまきそれを爆発させた。炎虫はほとんど爆発に巻き込まれ消滅した。

「やつが妖術を使うなら志を強く持てば道は見えるはず…」

忍者の言葉で若頭は気付かされた。炎虫も森の景色も幻だということに。

「見えた！ あそこに門がある！」

「何言ってるんですかい若頭！ そんなもんありやしませんぜ？」

実は門は若頭と忍者にしか見えていないのだ。だがお嬢は若頭は信じられると思った。

「誠！ 門まで走れ！ うちらはそれについていく！」

「けどお嬢！ この虫なんとかしないと走れやしないぜ？」

メタボの言う通り忍者が落としたというのにまたうじゃうじゃと炎虫が飛び交い出していた。

「…俺が道をつくる」

「分かった」

メタボとヤツシーにはどういうことかさっぱり分からなかったが、お嬢と若頭は承知した。

「符術・散爆符」

忍者はさっきと同じようにして炎虫を消滅させた。

「走れ！」

若頭のかげ声で二人は走り出した。メタボとヤツシーも戸惑いながらついて走り出す。しかし忍者は走っていないかった。

「忍者！？」

踵を返そうとするお嬢を若頭は腕を掴んでそれを憚り走った。若頭が言う通り、門は確かにあった。若頭は門を蹴り開け、皆でその中に飛び込んだ。メタボとヤツシーはその場に荒い息で倒れこんだ。

「誠！ お前、忍者を見殺しにしたんか！？」

お嬢が怒りの剣幕で若頭を睨み付ける。

「合意の上だ」

若頭はそれ以上語らなかつた。お嬢はまだ反抗的な目を離そうとしない。ヤツシーはそんな若頭の拳が震えていることに気がついた。「お嬢、若頭だってそうしたくてやったわけじゃねえんです。それに忍者を見殺しにしたってんなら皆に責任ありませんぜ」

「うちは忍者のもとへ…！」

お嬢は言いかけてとめた。地響きがし、地面を砕く音がしたからだ。亜依奈を連れ去ったはずの大百足が地面から登場したのだ。

「こつちは四人。百足の化け物くらいわけないねえだろ。お嬢も若頭も頼むぜ！」

「当たり前や！ 忍者助けるためにも、ここで負けるわけにはいけへん！」

「無論だ」

お嬢と若頭が刀を構える。メタボとヤツシーも各々の武器を構えた。

亜依奈は大百足に地下に叩きつけられ、立ち上がるうとしていた隙に、大百足に逃げられた。しかし目線の先は既に大百足の跡ではない。亜依奈の視線の先にあるもの、それは…。

「百々目鬼…」

「お久しぶりね、亜依奈…」

百々目鬼の目は穏やかな口調とは裏腹に冷めた、いや冷めた中に青白い憎悪の炎を灯した、そんな印象を亜依奈に与えた。

「私は広目天様から亜依奈…、あなたの抹殺の命を受けています。覚悟はいいかしら？」

「悪いけど、そういうわけにはいかないね」

亜依奈は青白い炎を払うように強気に金棒を構え先手に出た。百々目鬼は着ている着物を破り、両腕を露にした。

「私の目に痺れなさい」

「しまった!？」

百々目鬼の腕にびっしりある目を見た瞬間、亜依奈の動きは止まった。

「残念ね。私はもうその仮面を越えてしまったの。あなたにしては軽率な行動だと思ったけど…」

「く…、やるようになったじゃないか」

亜依奈は挑発するような口調をとるが、実際話すのがやつとである。

「まだ口をきく余裕があるなんてね。その仮面のおかげかしら？」

百々目鬼が亜依奈の仮面に手をかける。

「趣味の悪いことは止めなっ！」

「それが物を頼む態度？ てかこれがなければもつと私の術に苦しむんでしょ？ だったら取らないわけないじゃない」

百々目鬼はゆっくり亜依奈の仮面を外しにかかった。徐々に露になる亜依奈の素顔は、美しい人間の女だった。

第十四話・大百足

お嬢らが武器を構えると大百足が先手を打とうと突進してきた。皆は散り散りになってそれを避けた。

「あつぶねー、あんななんまともには喰らつち堪ないぜ」

メタボは冷や汗を流し大百足が突進した跡を見る。地面はえぐれ大きな穴となっていた。

「あんなもん、ヤマタノオロチに比べればなんてことないわ」

お嬢はそう吐き捨てるが、内心不安に思っていた。ヤマタノオロチの時は忍者の絶対的な火力のおかげで終止符を討つことが出来たものの、今回は忍者がいない。

「メタボ！ 持国天倒したんやる！ 何とかしろや！」

「そうしたいけど無理っばい！」

安定した高い攻撃力が期待出来ない以上、メタボの爆発力を期待するしかないが、不安定すぎてあまりにも頼りなかった。

「ち、これじゃ足手纏いが二人や」

お嬢が悪態を吐くとメタボが彼女の肩に手をおいた。

「大丈夫、俺らでもやりようがある。ヤッシー！」

「なんだ！」

ヤッシーが大百足の突進を避けてメタボの方へ駆け寄った。するとメタボは有無を言わせぬ早業でヤッシーを投げ飛ばした。大百足は目標を宙を舞うヤッシーに絞り突進する。

「今のうちだ！ 切り刻め！」

「「おう！」」

お嬢と若頭は大百足の腹部に当たると思われる部分を切り刻んだ。その衝撃で大百足の上部で巻きつかれていたヤッシーが解放され地に落ちた。

「あれ、なんで上から降ってくんのか？」

「お前が投げたからだろうがっ！」

ヤッシーは尻を擦りながら急いで大百足から離れる。

「しぶとい虫やな、けどダメージはあるやろ」

お嬢の言う通り、ヤッシーを解放してからずっとのたうち回っている。しかしヤマタノオロチに引けを取らない巨体がのたうち回るのだから危なくて近づくとできない。

「だが治まるのを見計らって同じことを繰り返せば確実にダメージはたまってくぜ」

笑顔で親指を立てるメタボの腕をヤッシーは下ろさした。

「俺の身がもたんわ！」

そうツッコむヤッシーの肩の上にお嬢は手を乗せた。

「大丈夫、盗賊やったお前ならきつと逃げ切ることができる」

本気で言ってるのかこの人、ヤッシーは怪訝そうな顔でお嬢を見るがどうも純粹無垢な目をしている。

「信じてるで」

こんな目を向けられて、断れるわけがあるだろうか。少なくともヤッシーは断る術を持ち合わせていなかった。

大百足は痛みが引いてきたのか徐々に大人しくなり体勢を整えていく。ヤッシーに期待の目が集まる。メタボの手がヤッシーに乗る。「行こうか、ヤッシー」

「…ああ」

うなずくしかなかった。哀れヤッシー、またもや宙を舞っていった。

「よしお嬢、若頭！　今のうち！」

大百足がヤッシーに気を取られているうちにお嬢と若頭は先程と同じ場所を切り刻んだ。そしてついに大百足の胴体を切断することに成功した。

「よっしゃ、一旦退くで！」

落ちてきたヤッシーを若頭がかかえ、安全な位置まで離脱した。

「けどこういうのって、だいたい二つとも動き出して襲ってくるんだよな」

そんなヤツシーの言葉に呼応するように、切断されてから沈黙を保っていた二つ大百足の身体は動き出した。

「ヤツシーのアホ！」

「俺のせいですか!？」

若頭は素早く反応し、ヤツシーとお嬢を抱えて飛び退いた。

「すまん」

「ありがとう」

「謝罪も礼も不要だ」

ちなみにメタボはというと、下の部分に襲われたのだが、金棒で返り討ちにしていた。

「お前そんな芸当できるなら早くやれよ！」

「いや、自分でもできると思わなくて。どうもエンジンかかるのに時間かかるみたいだ。それより第二派が来るぜ」

それを聞き皆が身構える。どうやら二つ一辺に襲ってくるようだ。

「俺とヤツシーで下半身を狙う。お嬢と若頭は上半身を狙ってくれ」
皆が分かったと頷く。

「よし、行くぞ」

メタボの合図で皆が動き出す。お嬢と若頭飛び上がりは大百足の頭部の顎に斬りかかった。だがお嬢は力不足で押し返されてしまった。

「きゃあっ!」

「お嬢っ!」

若頭は片方の顎を斬り落とすことに成功したが、お嬢救出には間に合わない。お嬢はそのまま地面に叩きつけられてしまった。大百足は片方の顎を無くした衝撃でお嬢らと反対側に倒れた。その隙を見て一旦若頭はお嬢を抱えて退いた。

ヤツシーはドスを投げて下半身の百足を牽制し、出来た隙を突いてメタボは金棒でぶん殴りぶっ飛ばした。そして若頭に抱えられているお嬢を見ると二人はすぐ駆け寄った。

「お嬢!」

「平気や。なんせもう死んでるんやからな」

平気という言葉通りお嬢の身体には傷一つなかった。しかし刀は酷い刃零れを起こしていた。

「なんて硬い顎なんだ…。これじゃ俺のドスなんかじゃ太刀打ちできない」

ヤッシーは自分の武器を見つめ無力さを痛感する。

「でも飛び抜けて硬いのは顎だけだろ。じゃあそれ以外を狙えばいい」

「それに私の剣は顎を斬った。対抗手段が無いわけではない」

大百足の上部は片方の顎を失った衝撃にまだ苦しんでいる。しかし下部は体勢を立て直しメタボらに襲いかかるうとしていた。

「こいつを殴り殺すにゃ無理がある。俺が隙を作るからたたっ斬れ！」

「承知！」

メタボが走り出し、若頭が少し遅れて駆け出す。大百足はメタボに狙い剥き出しになった身体の内部にも構わず、その身を打ち付けようとしてくる。メタボはそのグロテスクさに気分を害しながらも、気合いで金棒を上へ吹き飛ばすように攻撃を当てた。大百足の下部は綺麗な直線のように垂直に上へ飛ぶ。

「うおおおおっ!!!」

叫びながら若頭は飛び上がり、大百足と同じ高さのところで大太刀を縦に振り下ろした。

「一刀両断っ!!!」

その言葉通りに若頭はそのまま大百足を縦に真っ二つに斬り裂いた。若頭の着地と同時に大百足も地に着いた。そして大百足の下部は動き出すことはなかった。

「まずは半分」

若頭とメタボはハイタッチを交わした。お嬢とヤッシーは呆気に取られて二人を見ていた。

「おい二人共！ 片割れが動き出したぞ！」

ヤッシーの叫びに応じメタボと若頭は大百足を見る。片方の顎を失った部分から体液を流しながら二人に牙をむく大百足の姿があった。

「メタボ、片方とはいえあの顎がある以上さっきの手は使えんぞ」「分かつてる。なにかいい手は…」

メタボは何かを見つけた。知らぬ間に口元が緩んだのを自覚できた。

「ヤッシーにお嬢、時間稼ぎをしてくれ。若頭は俺が合図したらたたっ斬ってくれ」

「つてどうする気だよ」

「いいから頼んだ」

そう言つとメタボはすつとんきような方向へ走り出した。

「おい！ 仕方ない、お嬢やりますぜ！」

「ヤッシーと組むのはアレやけど、しゃあなしや！」

二人は二手に分かれ大百足を翻弄し始めた。お嬢は超人染みたスピードを有し、ヤッシーも盗人稼業からかそここのスピードを持っていた。

メタボは目的の物にたどり着きそれを抱えるとジャイアントスイングの要領で回し始めた。

「ヤッシー、お嬢もういい！ 退け！」

二人はメタボの指示通り大百足から離れた。

「行けえええつ！！！」

メタボはそれを投げ飛ばし、見事命中し突き刺さった。投げ飛ばした物は若頭が斬り落とした大百足の顎だった。大百足は壁に張り付けられた状態となり身動きが取れなくなった。

「今だ若頭つ！！！」

「合点承知っ！」

若頭は駆け出し飛び上がった。そしてさっきと同じように真つ二つに斬り裂いた。下部と同じく斬り裂かれた大百足は動き出すことはなかった。

「勝った……」

若頭が示す通り地獄組の大勝利となった。

第十五話・百々目鬼

仮面を取った百々目鬼はうつすら笑みを浮かべるとそれを叩き割った。

「やっぱり綺麗な顔ね…、人間みたい。まるで妖術で化けたよう」
羅刹女や夜叉等の女の鬼は容姿が醜く生まれるものである。それを嫌い妖術で顔を美しくしている者がほとんどだ。しかし亜依奈は生まれつき美しい容姿であったのである。

「始めは半妖かとも思ってたけど、にしてはあなた力強すぎるし…、何事にも例外があるってことかしら」

百々目鬼は鋭く尖った爪で亜依奈の頬に傷をつくる。そこから一筋の血が流れた。

「容姿云々で妬んでるのかい、あんたは！」
「それもあるわね、けどそれだけじゃない！」

百々目鬼は亜依奈の首に手をかけた。百々目鬼の妖術のため亜依奈は為す術がない。

「あなたは羅刹女や夜叉たちの希望だった…。美しくて、そこらの獄卒なんかじゃ相手にならないほど強いんだからね。そんなあなたが一体何をやっているのかしらね！」

亜依奈は微かに苦しみに悶える声を出す。

「私の腕にある目の一つ一つに羅刹女や夜叉の妬みが込められているの。あなたは百もの鬼を相手にしているのと同じ」

亜依奈はそれを聞いた瞬間、何人もの鬼にまわりつかれているような感じがした。

「百々目鬼…、私を倒すために結託したのかい」

「ええ、あなたの裏切りを知ったらみんな喜んで力を貸してくれたわ」

「そうかい…」

亜依奈の目から闘志の火が消えた。百々目鬼は首から手を離したが亜依奈の首はうなだれ上がらない。

「あなたを慕う者は沢山いたけれど、今じゃもうみんな敵」

百々目鬼の言葉を返す気力も亜依奈にはなかった。

「さあ亜依奈、みんなを裏切った罪、その身で償いなさい！」

百々目鬼の腕にある数多の目が光り亜依奈を苦しめる。亜依奈にまとわりつく幻想がきつくなつたのを感じたからだ。それに加え百々目鬼は亜依奈を殴り傷を増やしていく。

「いい様ね亜依奈…。今の姿をみんなに見せてやりたいわ」

「……………」

亜依奈は首を垂れたまま動き気配が無い。どうやら気を失ってしまつたようだ。

亜依奈は優秀な夜叉だった。流星の如く突如獄卒たちの訓練施設に現れた彼女は、早々にこの訓練施設のトップに踊り出た。妖術や幻術を得意とする者が多かった羅刹女や夜叉にとって、役鬼や羅刹並みに力と体力があり、妖術と幻術にも耐性がある亜依奈は奇抜な存在に見えた。百々目鬼はそんな亜依奈に惹かれた一人だった。

「あ、あの亜依奈さん」

「なんだい？」

百々目鬼に不意に声をかけられ、亜依奈は立ち止まって振り返つた。

「あの…、どうしたらそんな風になれるんですか？　普通夜叉って妖術強いけど腕力は弱いはずなのに」

「どうやら理論先行の考えのようで亜依奈の強さが理解し難いらしい。」

「さあねえ。普通はそうかもしれないけど、あたしは例外とでも考えればいいんじゃない？」

「そんな…、例外だとしても度が過ぎてます！」

「って言われてもね…」

亜依奈は困って頭をかいた。自分にすら分らないのにどう説明せよというのか。

「実はその仮面に秘密が？」

百々目鬼は仮面を指差した。仮面について聞かれると思っていなかった亜依奈は言葉を探すのに手間取った。それを百々目鬼は狼狽えたのだと思い、さらに追い詰めるように質問を重ねる。

「やっぱり何かあるんですね！ それをつけると妖術が効かなくなるのか？」

本当のところを当たり障りなく言うのが面倒になった亜依奈は頷いた。事実この仮面にはそういった能力もあるため嘘ではない。

「やっぱり！ 通りで私の鳥目が効かないと思ったら！」

「鳥目？ 腕の目のことかい？」

「ええ」

百々目鬼は腕を捲って見せた。鳥目と呼ばれるわりには、人間の目を大きくしたような形である。

「相手の妖気を吸収したり金縛りにあわせたりできるんですよ。もちろん360度見渡すこともできます」

亜依奈は百々目鬼と模擬試合をしたことを思い出した。死角をついたはずなのに百々目鬼はちゃんと受け身をとっていたのだ。

「すごい目じゃないか。これでスピードを鍛えれば確実に攻撃を避けられる」

「あ、ありがとうございます…」

百々目鬼ははにかんで頭を下げた。亜依奈は気障に手を降ってその場を去ろうとした。

「待って下さい！ 私と仮面無しで戦って下さい！」

亜依奈は首を横に降った。

「この仮面は一心同体だから無理だよ。それに化粧の妖術は苦手ですね」

歩みを進めようとする亜依奈の裾を百々目鬼は引っ張った。

「それ、嘘です。でも仮面有りでもいいですから！」

亜依奈は肩をすくめて答えた。

「分かったよ。あんたがスピードを兼ね備えたら戦ってやる。それでいいかい？」

「はい！　ありがとうございます！」

百々目鬼は満足そうに頭を下げ、礼を言った。約束ですからね。そう嬉しそうに言っ、百々目鬼は修行に向かった。

そして数日後、訓練施設に衝撃が走った。亜依奈の行方不明の報である。その頃自分の満足のいくスピードを身につけた百々目鬼は、途方もない悲しみに沈んだ。

裏切られた？　捨てられた？　忘れられた？　浮かんでく

るのは亜依奈への不信感を煽るような感情ばかりである。それが怒りに変わるのにそう時間はかからなかった。

今度出会ったら確実に仕留める。感じとった色んな感情を全てぶつけて。それから百々目鬼は着々と実力をつけていき、四天王の一人広目天の側近の地位まで登り詰めた。

「ほう、あの訓練施設の出ですか…。亜依奈もいれば攻撃面も強化されて良かったのですが…」

広目天の心ない言葉が百々目鬼に刺さる。

「まあ私の部下なら貴女以上に相応しい人はいないでしょう。尽力して下さいね」

その言葉は先ほどの言葉を帳消しにさせるほど百々目鬼に届いた。「はい、尽力させてもらいます。貴方の部下として…」

百々目鬼は膝き、深々と頭を下げ、言った。

これは、百々目鬼の妖気に刻まれた記憶？　亜依奈は意識を取

り戻っていた。微かに開いた目の先には哀しそうな表情をした百々目鬼がいた。彼女は自分がいなくなっ、後どんな気持ちでいたか思いしらされた。だがそれゆえに自分のしていたことを否定すること

ができない。

「と…、ど…めき」

百々目鬼は声に過敏に反応し顔を手で覆い後退んだ。

「まだ息があつたなんて…」

「私は腕つぶしと根性だけは強くてね。あんたの妖術なんか根性で…！」

亜依奈は叫び妖術を根性で振り払おうとした。

「止めなさい！ そんなことをしたって私の目に捉えられた者は…」

百々目鬼の制止も聞かず苦痛混じりの叫び声が虚しく響いていた。

「そんな…」

亜依奈の腕は妖術に逆らい自由を取り戻していく。そして四肢全てが動くようになった。

「身体にまわりつく想い全て背負ってでも…、私は自分の道をいなくちやならないんだ！」

亜依奈の決死の叫びが身体全てを解放した。百々目鬼の妖術を破つたのである。

「広目天が生きてる以上、詳しく言えない。勘弁しとくれよ、百々目鬼」

亜依奈はボロボロの身体にも関わらず屈託のない笑顔で百々目鬼に見せた。

「あ…、貴女がそんなだから、殺さなくちやいけないんだ！」

百々目鬼は鋭い爪で襲いかかる。亜依奈は金棒を拾い一振り彼女をぶつ飛ばした。地面に叩きつけられ、百々目鬼は立ち上がる気配はない。

「どうして、貴女は…」

涙でかすれた声が虚しく響く。

「私を…、頼って…」

もう声は聞こえなかった。それを聞く人もすでにいなかった。

「百々目鬼、貴女までもが……」
千里眼で戦いを見ていた広目天が独り呟いた。

第十六話・忍者

百々目鬼の敗北を知った広目天は亜依奈の元へ向かった。大百足を倒したメタボたちには鬼を仕掛けさせた。これで邪魔をされず亜依奈と戦える。広目天は幻術で消していた扉を現せて亜依奈がいる部屋に入った。

「流石は亜依奈ですね。年月があっても、あの頃から差が埋まらなかったということですか」

亜依奈は広目天の言葉が勘にさわった。

「あの子は一生懸命に戦った。上司のあんたが悪く言っんじゃないよー！」

広目天は亜依奈の激昂を上回る剣幕で亜依奈を見る。

「分かっていますよ。何分こーいう性分ですてね。口が悪いのですが、態度で示せば彼女も分かってくれるでしょう」

「あんた…」

亜依奈はなまじ百々目鬼の妖気から二人の関係を見てしまっているので、広目天の剣幕に萎縮した。

「百々目鬼がずいぶん貴女の体力を削ってくれましたからね…。倒すことは造作もないでしょう」

広目天は戟げきと呼ばれる先が十字になっている槍を構えた。

「ち…」

亜依奈はふらつきながら金棒を構える。

「はあっ！」

広目天は一気に間合いを詰め一撃を加えようとする。が、間一髪避け金棒を振り回す。

「そーいえば、仮面を外した貴女を見るのは初めてですね」

「それが何だつてんだい！」

「その美しい容姿を変えぬよう、一撃で仕留めて差し上げますよ」

広目天は戟を構えて突撃する。また避けるも、退く間もなく追撃

があるため避け続けなくてはならない。普通の槍より十字の横の部分が
あるだけ、ダメージを受ける範囲が広い。縦を食らわなければ
致命傷にならないが、横部分の刀身で切り傷が徐々に増えていく。
「ちょこまかと小賢しいですね。ですがいつまでもそうしていら
ないでしょう！」

広目天は亜依奈を蹴り飛ばした。亜依奈はすぐ立ち上がるもの
金棒を杖代わりにし、衰弱していた。

「これで終わりですね。せめて一突きで殺して差し上げますよ」
ゆっくり近づき広目天は戟を構える。力を入れ、亜依奈を突こう
した刹那、誰かが割って入ってきた。

「お前は…」

亜依奈は自分の代わりに刺さっている者の姿を見た。

「無事か…？」

ぶつきらぼうに安否を聞いたのは忍者である。

「死人なら大丈夫と思って割って入ったのでしょうか…、残念でし
たね。これは死人の魂を突き刺すことが可能です」

「承知の上だ…」

忍者は自力で戟を抜き取り突っ返した。

「無事で良かった…」

忍者は倒れた。そして跡形もなく消えてしまった。魂が失われた
のである。

「炎虫から逃げおおせたことは賞賛しますが、馬鹿な真似をしたも
のです」

「広目天…！」

亜依奈は歯をくいしばり広目天を睨み付けることしかできなかつ
た。

「さて、忍者を助けに行こう！」

「おう！」

皆は意気揚々と扉に向かう。しかしタイミングを見計らったように上から鬼が降ってきた。

「ち、足止めか？」

「つかこの建物の構造どうなってんだろ」

メタボとヤツシーは武器を構えた。

「待て！ こいつらの始末は私とヤシマドルに任せてもらおう」

「え？　なんで俺をお誘い？」

ヤツシーは不思議そうに首を傾げたが、皆はその気である。

「私たちが先陣を切る。その隙に！」

「分かった！」

事態をようやく飲み込んだヤツシーは若頭と共に鬼に斬りかかった。

「てりゃあ！」

若頭の大太刀が鬼を薙ぎ倒していく。ヤツシーのドスも地味に鬼の屍を積み重ねていく。

「今のうちや！」

「ああ！」

若頭とヤツシーが作ってくれた道を突き進んだ。

「お嬢、必ず忍者を…」

「分かってる。任せとき」

メタボは思い切り扉を開き、炎虫の部屋へ入った。しかしそこは閑散としており、忍者はいなかった。扉はこれ以上逃がすまいと鬼が閉めたようだ。

「ち、どういうことだよ…」

焦げた跡や虫の死骸があるだけで忍者の姿は見当たらない。

「メタボ、この穴！」

お嬢が指差したのは最初に大百足が亜依奈を連れ去る時にできた穴だ。

「なるほど、一人になった亜依奈さんを助けに行ったわけか」

メタボが穴を覗き込むと亜依奈が広目天に戟を突きつけられてい

る場面だった。仮面は着けていなかったがすぐに分かった。それを理解した瞬間、メタボは穴に飛び込み、広目天を金棒でぶん殴った。「がはっ！」

広目天は横にぶつ飛び地面を擦っていった。

「亜依奈さん！」

「ありがとう、けど忍者が……」

遅れて穴に飛び込んだお嬢が合流した。

「忍者がどうしたんや!？」

見渡しても見当たらない忍者に悪い予感がお嬢の脳裏に過る。

「あいつにやられた……私を庇って……」

「な……!？」

二人は絶句した。あんなに強い忍者がやられるなんて、何かの間違いだと思いたかった。だが亜依奈の表情がそれを間違いだと言わせてくれなかった。

お嬢は刀を抜き鞘を投げ捨てる。

「絶対許さへん……!」

広目天は起き上がり戟を構えながらゆっくり近づいてくる。

「あなた方は後回しです。亜依奈を殺さないところらの気が済まないんですよ」

広目天は亜依奈を睨み付ける。お嬢は刀を広目天に向けて叫んだ。

「そんなん知るか!　　うちはあんたをぶった斬りたいんや!」

広目天はお嬢に視線と戟の矛先を向けた。

「では、邪魔者を倒して亜依奈の命をもらうことにしましょうか」

「メタボ、亜依奈さん頼むわ」

「ああ、って刃こぼれしてんじゃなかった!？」

お嬢は駆け出し広目天に斬りかかる。だが戟で弾かれてしまった。千里眼で見抜かれてしまっているのだ。

「大したスピードですが、この千里眼の前では無力です。というかそんな刃こぼれした刀で挑むとは、舐められたものですね。」

お嬢は間髪入れずに二撃、三撃と加えようとするが全て弾かれて

しまう。広目天は防ぎながら饒舌に解説をする。

「それに戟は普通の槍と違ってこのように刀を防げます。無論リ―チはこちらが上です。あなたの攻撃が届くことはないんですよ」満足そうに解説を言いお嬢を蹴り飛ばした。お嬢はすぐに立ち上がり刀を構える。

「じゃあまず、刀なんとかしよか」

お嬢が目を閉じ神経を研ぎ澄ますと、刀が光だし刃こぼれが直っていった。

「ほう…」

広目天は興味深そうに様子を眺めた。

「なるほど、烈獄丸はあなたが盗んだんですね」

お嬢はニタッと笑った。

第十七話・広目天

お嬢は見事に刃こぼれを直した。広目天によるとそれは烈獄丸という刀そのものの力だという。戦闘準備を調べたお嬢と広目天との戦いが始まるうとしていた。

「私たちでは使えないので、放置しておいたのは失敗だったようですね」

「今さら後悔したって遅いで。大人しくうちの刀に斬られるんやな」二人共自信满满である。しかし一向に動き出さないのは相手の出方を伺っているからである。忍者を失ったことを知って憤慨していたお嬢も今は冷静さを取り戻したのである。それは広目天も同じだ。「ち、こうもにらめっこが続いたあ…。お嬢！ 構わないから攻めろ！」

状況を読めてるのか読めてないのか分からないメタボの声が響く。少なくとも膠着している二人にとっては信じられない指示である。だがお嬢は笑みを漏らしメタボに応えた。

「そつやな、埒があかんし、先手必勝や！」

そう叫ぶとお嬢は広目天に突撃した。広目天は動き出した隙を突こうと戟を振るうが、予想よりお嬢のスピードが速かったため防ぐのが精一杯となってしまった。

「速いですね。貴女本当に人間ですか？」

「人間やで。普通とは違うけどなあ！」

お嬢はスピードを維持したまま攻撃を続ける。しかし広目天は器用に戟を使い全て防いでいる。

「ち…」

「随分やるようですね。ですが四天王を相手にするような腕ではありません」

埒があかない上、疲弊して隙を突かれるのを避けるためお嬢は一旦飛び退いた。

「ほう、いい引き際ですね。ではこちらから攻めさせてもらいますか！」

今度は広目天が突っ込んで来る。間一髪一撃目は避ける。が、普通の槍より横に刃が付いている分攻撃範囲が広い。お嬢が人並み外れた速さの持ち主と言えど、避け続けるのは困難に思われる。

「貴女には驚かせられてばかりですよ」

お嬢としては一つ言い返したいところだが、そんな余裕はなかった。服や頬に知らず知らず傷が出来ていく。

「見ちゃいらねえ…。ここは俺が…！」

「やめな」

加勢しようとするメタボを亜依奈が止める。どうして止めたかメタボには分からなかった。

「大丈夫、きつと切り抜けられる」

亜依奈は戦闘で弱っているとは思えないほど、強い意志を持って言った。

「亜依奈さん…。じゃあ助けるタイミングは任せます」

「すまないね」

「謝られても困るけど、俺もお嬢を信じてないわけじゃないッスから」

二人は再び戦いに目を移す。

「はあっ！」

お嬢は上手く戟の柄を掴んだ。さすがに広目天は驚愕した。

「素晴らしい動体視力ですね」

「そつやろう！」

お嬢は柄を支点にして広目天の顔面を蹴った。

「ぐわっ!？」

広目天は地面を擦って倒れた。お嬢は刀を突きつける。

「うちの勝ちやな」

「まだです！」

広目天は戟を振り突きつけられた刀を払った。そして体勢が崩れ

たお嬢に蹴りを入れた。

「余裕をもつからそうなるんですよ。一思いに殺せば良かったでしょう。残念でしたね」

お嬢は直ぐ立ち上がり刀を構える。

「それはお前も同じやろう」

「そうでしょうか。実力差は歴然だと思いますが」

それは二人の姿を見て分かることだった。広目天はお嬢に蹴られただけでダメージらしいダメージはほとんどない。それに対しお嬢はかすり傷が多々あり疲弊が見られる。

「かすり傷と侮っていると後悔しますよ？」

「こんなもん、忍者の攻撃に比べたら何てことないわ！」

お嬢は忍者との修行を思い出す。彼の攻撃は速い上に力強かった。だがクナイや忍者刀、武器のリーチは短かった。悔しいが広目天と忍者の差はそれくらいだった。しかし逆を言えばその差をどうにかすれば勝ち目あると言える。お嬢に一つの妙案が浮かんだ。

「やるっきゃないわな……」

お嬢は広目天に突っ込んだ。そして第一撃を加えようとする。

「芸が無いですね！」

広目天は戟で防ごうとする。がその前にお嬢は刀を引いて戟の柄を狙う。

「なっ！」

広目天は咄嗟に退いてお嬢の目論見を防いだ。

「なるほど、武器破壊を狙ったわけですか。しかし残念でしたね。」

私の千里眼にかかれれば直ぐお見通しなんですよ」

「ち……」

お嬢は千里眼を睨み付ける。広目天の動体視力、反応速度の源は千里眼にある。これをどうにかしなければ、不意をつくぐらいしか攻撃ができない。何故かお嬢から笑みが漏れた。

「どうしました？ 敗北を確信して狂いましたか？」

「そっやな。結局、あれこれ考えんのはうちの性分やない。勘に頼

って戦うんがうちや」

お嬢の目付きが変わった。迷いを捨て去った目だ。澄みきった水のように綺麗だった。

「はあっ！」

一撃一撃がこれまでと違う。広目天は急激な変わりように戸惑いを覚えた。

「考えを切り替えただけでこつも太刀筋が変わりますか…。人間とは分からないものです」

「言っちゃなんやけど、火事場のクソ力ってやつや！」

景気のいい金属音が響きわたる。お嬢が圧していると言っても過言ではない。だが急にお嬢の動きが鈍った。

「なんや、急に身体が重く…」

「やつと来ましたか。この戟は魂に攻撃をします。かすり傷とはいえ、魂を直接削られてるようなものですから辛くなつて当然ですよ」

「なんやと…」

お嬢は辛くてとうとう膝を地につけてしまった。肩で息をし始め、見るからに衰弱している。

「さあこれでお別れですね」

広目天はお嬢を突き刺そうとする。しかし一歩手前で飛び退いた。千里眼でメタボの接近を察知したのである。メタボは思い切り空振りをしてしまった。

「クソ！」

「そう何度も不意打ちはくらいませんよ」

最初の不意打ちは広目天は冷静さを欠いていたからこそ成功したと、メタボは思い知らされた。

「メタボ…」

「礼ならいいぜ、お…」

メタボはドサツと倒れた。お嬢が峰打ちをしたのだ。

「せっかくの助け船を自ら沈めるとは、正気の沙汰とは思えませんね」

お嬢は血混じりの唾を吐き捨てて応えた。

「うちが仇討ちせな意味ないやろ。メタボより付き合い長いし」

「それはそれは…。ですが弔うべき魂はもう既にないんですよ？」

広目天は嘲笑うように言い放った。

「うっさい！ 忍者の意志はうちの心に継がれたんや！」

そう叫んでお嬢は突っ込んだ。

「歯の浮くような台詞を堂々と…。虫酸が走るんですよ！」

広目天は仕止めようと迎え撃とうとする。

二人がぶつかった。それは一瞬の出来事だった。故にこの二人でさえ何が起こったか分からなかった。理解したのは広目天が先だった。

「バカな…。私の千里眼を越えるなんて…」

戟の柄は切断され、広目天の肩から腹部にかけて斜めに斬撃の後があつた。そこから血が噴き出す。

「うちの勝ちや」

勝ちを確信したお嬢はその場に倒れ込んだ。

広目天は流れる血を構わず亜依奈方へ直進する。

「亜依奈…。百々目鬼は私を…。不甲斐ない私を許してくれるでしようか」

広目天は倒れた。亜依奈には彼の死に顔が見えなかった。何か口にしようとしたが言葉にならなかった。

第十八話・エリュシオン

メタボの兄、早川太一は天国で鬼と天使の戦争に巻き込まれ、紆余曲折あつてフェアリー族と呼ばれる天使のチャム・ピールと行動を共にしていた。鬼との戦闘に勝った二人はヴァルキリー隊副隊長シャロンの指示に従つて逃げていた。

「逃げろつて言われても、当てがあるのか？」

「もちろん。天国には中央都以外に東西南北に四つの都市があるの」「そこだつて狙われてるかもしれないじゃないか」

「いくらなんでも五つの都市同時攻略なんて無理。エンマ様でもね」「急ぐよ、そう言つてチャムは前を向き羽根を忙しなく動かし先を急いだ。太一も遅れないようについていく。

「けどまた戦う場合だつてあるんだろうな…」

「そうね」

二人の声が沈む。辛くも勝つことが出来たとはいえ、こちらにはもう武器はない。チャムのソルジャーソングで能力を底上げしてもらつたとしても襲われて勝てるかどうか分からない。

「とにかく見つからないように気をつけよう」

「うん」

二人は歩みを進めた。もう戦闘は終わったのか不気味なほど静かである。もういくら進んだのか分からない。死者でなかつたらとつくに体力の限界が来ているだろう。輪廻転生を待つため時間の感覚が麻痺しているのが救いだと思つた。

「人影一つないな。本当にこつちであつてるのか？」

「あつてるはず…、ただけど…」

チャムの歯切れが悪い。太一の不安を掻き立てるには十分だった。

「おいおいしっかりしてくれよ」

「分かつてるよ！　でもしょうがないじゃん」

二人が口論していると一人のヴァルキリーが降り立った。

「良かった。まだ生存者がいたのね」

そのヴァルキリーは安堵し優しい笑顔をしてくれた。その笑顔に二人もまた安堵した。

「私はヴァルキリー隊のサレナ・ダーミツシュ。あなた方をエリユシオンへ案内するわ」

「エリユシオン!？」

チャムは心底驚いた。太一は何のことだか分からない顔をしている。彼女が驚くのも無理はない。エリユシオンは生前多大な功績を残した魂、または天国、地獄で責務を全うした魂しか行くことを許されない極楽の地とされていたからだ。

「ラダマンテユス様が緊急事態だからと特別の処置をして下さったの。今は避難場所になってるわ」

「そうだったんですか」

チャムはラダマンテユスに感謝した。非常時だというのに不謹慎だと思っただが、どうしてもエリユシオンに思いを馳せてしまう。

「さあ掴まって」

「はい!」

チャムはサレナの肩に止まる。

「僕は?」

「んー、ちょっと手荒で悪いんだけど……」

サレナはゆっくり太一に近づく。太一は少し恐怖を覚え後ずさる。しかし一瞬でサレナは太一を両腕で太一を抱えた。要はお姫様抱っこである。

「ちちよつと!？」

もちろんのこと太一は困惑している。だがサレナはそんなことにせず翼をはためかし始める。

「何処に鬼がいるか分からないから、飛ばしながらワープするわね」
「はい!」

チャムはすっかりサレナの肩に掴まる。それを確認するとサレナは思い切りスピードを出して飛んだ。そんな中太一は意見を出せる

はずがなかった。

「ワープ！」

空間がねじれ気がつくと、一見天国と変わらないが、神々しさというか、雰囲気天国より洗練された気が太一はした。

「ここがエリクション…」

チャムは目を輝かせ辺りを飛び回り始めた。全く知らない太一ですら雰囲気充てられているのだから、チャムの興奮も無理はない。「降ろしていい？」

「え、ああどうぞ！」

ついエリクションに浸っていてお姫様抱っこされていたことを太一は失念していた。急に恥ずかしさが込み上げ直ぐに降ろしてもらった。

「それじゃ、ラダマンテウス様のところ案内するわ」

「はい！」

チャムはサレナの肩に乗る。サレナは微笑み太一を手招きし案内した。

「着いたわ」

「おお…」

言葉を失うほどの立派な宮殿が太一の眼前にあった。それだけでラダマンテウスという人物の寛大さを物語っているようだった。

「ようこそエリクションへ」

奥から声が聞こえた。チャムはサレナの肩を離れ、サレナは跪いた。太一もそれにならう。しかし視線だけは微かに上を向かせた。そのためラダマンテウスが出てくるのを見ることが出来た。金髪の綺麗な美男であった。貧弱な語彙で語るなら美術の教科書に載るような彫刻と言ったところか。ともかく太一はそんな印象を受けた。

「私がここを管理するラダマンテウスだ。皆顔を上げ楽にするとい

い」

「はい」
サレナと太一は立ち上がった。

「君が鬼を倒したという人間か？」

「はい。でもそれはチャムのソルジャーソングのおかげです」

「だろうな。だが人間の中では強い部類だろう」

太一はラダマンテユスの言葉が引つ掛かった。ソルジャーソングは皆を強くするのではないのか？ そんな疑問をぶつける間も無くラダマンテユスは話を続ける。

「そこで相談なんだが、君も天国を取り戻すために戦ってくれないか？」

「え？」

当然太一は困惑した。ラダマンテユスはそんな太一を見てさらに話を続ける。

「ソルジャーソングによってフェアシユテーエンを発動させたのだらう？」

さらに太一は分からない顔をする。ラダマンテユスは視線をチャムに向けた。

「フェアシユテーエンの説明はしていないのか？」

「逃げ回るのに必死でしたから……」

チャムは焦り気味にこう告げた。

「では私の口から説明しよう。ソルジャーソングでパワーアップ以外に特殊能力が付くのは知っているか？」

確かチャムがそんなことを言っていた気がする。太一はこくりと頷いた。

「その特殊能力は個人によって違い、フェアシユテーエンというのは珍しい能力なのだ。この能力は如何なる武器でも達人級に扱うことが出来るようになる能力で、鬼の雑兵ゴキウごとき直ぐ様倒すことが出来る」

太一は直ぐに思い当たった。シャロンのランスを握った時の感覚である。戸惑い過ぎて直ぐ様倒す、とはいかなかったが。

「つまりこの特殊能力を引き出せる君は、チャムがいれば即戦力になるということだ。しかも心強いな」

確かに戦闘訓練無しにああまで戦えたのだからそうなのだろう。不安はあるが力があるなら使わないのは卑怯だと太一は思った。それに地獄の連中が攻めてきたというなら、その地獄にいる弟が気にかかった。

「分かりました。戦わせて下さい」

「ありがとうございます、そう言ってくれて助かる」

ラダマンテユスは一礼した。太一もとんでもないとばかりに一礼した。

「ではこの武器を授けよう」

ラダマンテユスが指を鳴らすと天使が風変わりな武器を持ってきた。有り体に言えば輪っかに刃がついている。

「これはチャクラムという、遠近両方で使える武器を目指して開発されたものだ。扱いが難しく使い手のなかった武器だ。だが君なら使いこなせるだろう」

「ありがとうございます」

太一は天使からチャクラム用のホルダーをもらって付け、そこにチャクラムを入れた。

「では次にチームメイトを紹介しよう。出てきたまえ」

出てきたヴァルキリーを見てチャムは仰天した。

「エレン隊長!？」

「はあゝい。ご機嫌いかが?」

太一はポカンとしていたが、隊長と呼ばれるからにはそうなのだろう。シャロンは副隊長なので上司になる。太一はそこに驚いた。

「なんか失礼なこと考えてないかな?」

「そんなことないですよ。早川太一です。よろしくお願いします」

「よろしくねえ」

二人は握手を交わした。

「さて、エレンを隊長とし太一君、チャム、サレナの四人は四天王の一人…、増長天を討ってもらいたい」

「ええ!？」

太一は素で驚いてしまったがエレンを始め皆はやる気十分であった。

第十九話・エレン

増長天、エレンにとって一度不覚をとった相手である。そのことを知るのは彼女を救出したサレナとラダマンテユスと自分自身だけである。士気に関わるからとエレンが口止めしているのだ。

「四天王って強いんでしょ？　それをたった四人で討ちにいくなんて…」

太一には四天王という単語は聞き慣れないが強いということだけは分かる。もしその四天王が今回の天国侵攻の指揮を執っていたとしたらかなりの手練れであることは確かだ。

「大丈夫だって。太一には私が…、ソルジャーソングがあるんだし」「簡単に言うなよ！　三下の鬼でもギリギリだったんだぞ！」

太一にはチャムの軽い言い方に苛立ちを覚えた。無論チャムはあまり戦意を削がないよう気をつけて言っただけで軽い気持ちなんじゃない。だが太一にそこに気付く余裕はなかった。

「まあ、自信無いなら私が稽古つけてあげるからそうカッカしないの」

そう言っただけでエレンは太一に抱きついて頭を撫でた。

「!?!」

太一は気恥ずかしさでパニックになった。

「ち、ちよつと離れて下さい！」

一瞬このままでもいいと思った考えを振り払い太一はエレンを押しつけた。

「あらら、機嫌直ると思ったのに。けど、ちよつとは落ち着いた？」

「…ええまあ」

太一は大人しく頷いた。確かに冷静になるとさっきの自分ほらしくなかった。

「すまない、チャム」

「いいよ。私も軽薄過ぎたし」

チャムは太一の頭の上に乗って微笑んだ。太一は悪くない気がした。

「私も事を急ぎ過ぎたようだ。すまないな、太一君」

ラダマンテユスも頭を下げて謝罪した。

「だが時間がないのも確かなのだ。こうしている間にも天国は着々と地獄に占領されている」

「けど、今のヴァルキリー隊の戦力じゃ地獄の軍勢には勝てない…」サレナが痛切な表情で言葉を放った。彼女だけでなく先の天国での戦いに参加した者全てが分かりきったことであった。

「ああ、だから皆にも己を高めていってほしい。エンマの目的は分からんがあまり時間がないことには変わりないだろうが…」

「大丈夫です！ 古今東西悪が栄えた日はありませんから」

エレンがラダマンテユスの懸念を払拭するように言った。それに根拠なんてものはないが力強さはあり皆を勇気つけた。太一はだからエレンは隊長なんだと思った。

「エレンさんの言う通りだな。太一君、色々と疲れただろう。部屋を用意させた

のでそこで休むといい」

「はい、ありがとうございます」

「エレンくん、サレナくん、頼めるか？」

「はい」

「お任せあれ。太一君、ついてらっしゃいな」

エレンは太一を手招きした。太一はラダマンテユスに一礼しそれに応じ宮殿を後にした。

エレンに案内されたのは宿舎の離れだった。エリユシオンは元々多くの人間が来る場所ではない。ゆえに休息できるような家屋が現状では十分になかった。

「ごめんなさいねえ。それでも無理してつくった場所なんだけど…」

「はあ…、まあ贅沢はいりませんよ」

太一はとりあえず腰を下ろした。エレンとサレナも座り込む。

「そんじゃ、立て続けで悪いんだけど戦うって言ったんだから知ってもらおうよ」

太一はごくりと生唾を飲み込んだ。登場から一貫して妙に高いテンションだったエレンがトーンを落とすとした。きっと何かあると太一は思った。

「まずどこで戦争してるか分かるかしら？」

「地獄：でしょ？」

太一は初めての戦闘を思い出した。好戦的で戦闘天使ヴァルキリよりも強い印を受けた。

「そう。何故だか知らないけどエンマ様直々に天国に攻めてきてね。私たちが駆けつけた頃には天国宮殿に鬼の大部隊が展開されていたわ」

「どうして大部隊になる前に食い止められなかったんですか？」

天国と地獄がそう簡単に行き来できるものでないくらい太一は簡単に予想できた。なのでヴァルキリー隊がホームグラウンドであるのに大部隊を展開されるのは想像できなかった。

「それは、敵に四霊を召喚できるやつがいたからよ」

「四霊？」

「鳳凰、麒麟、靈亀、応龍のことよ」

「鳳凰と麒麟くらいしか聞いたことないな…」

それに知っていると言っても名前だけで四霊と呼ばれることはもちろん、どういった存在なのか全く知らなかった。

「四霊はね、世界の狭間を守るものなの。彼らを手懐けることが出来れば自由に天国と地獄を行き来することができるわ」

「じゃあエンマは鳳凰だか麒麟だかを？」

「手にしたってことになるわね、悔しいけど…」

エレンの表情が曇る。太一はそれだけで今天国が大変なことになっているか想像できた。

「それじゃ続きを、私たちの不甲斐なさを話すみたいだけど…」

太一は黙って聞き続けた。エレンも構わず話を続ける。その後のヴァルキリー隊と鬼の軍勢との戦いをエレンは増長天と戦い敗れたことは伏せて話した。太一の士気に関わると思ったからである。

「まあこうして大敗しちゃったわけ。こっちは全軍撤退しちゃったから天国全域占領も時間の問題ね…」

エレンが自嘲的に話を終わらせた。誰だって自分の恥を話すのは辛い。

「でも、広い天国を占領ってことは敵の戦力も分散されますよね？」

「まあ、地獄の管理だつてしなきゃなんないからこれ以上増えるってことは考えにくいしねえ」

太一はサレナの方を見る。

「サレナさん、天国とエリユシオンなら自由にワープできるんですか？」

「まあ、ラダマンテユス様の許可があればだけど」

急に饒舌になった太一に皆は戸惑った。

「太一、急にどうしたの？」

「いや、話を聞く限りじゃ数で負けたつぽいし戦力が分散されてるなら奇襲すれば要所を取り返すことくらいはできるんじゃないかなって」

太一は控えめに言ったが瞳は輝いていた。それを見るとエレンは増長天のことを話した方が良かったかと少し後悔した。

「…ラダマンテユス様もそう考えてるわ。肉を切らせて骨を断つてやつ？」

太一は微妙に違う気がしたが頷いた。

「そうか、時間がないと言いつつ稽古の時間をくれたのは占領仕切つて鬼が気を緩むのを待っていたのか」

「まあね。言われる前に気付くなんてたっちゃんやるう〜」

「たっちゃんは止めて下さい…」

エレンは笑っているが太一は本気で嫌がっているようだった。

「でも奇襲をかけるにしても相手は大物よ」

「四天王ですね…」

「そう、偵察出してるから鬼の動きだけは随時分かるようになってるから、相手

を間違えることはないわ」

太一は一瞬苦い顔をしたがそれでも決意は固かった。

「それじゃ、稽古はビシバシいくわよ！」

「はい！」

皆は立ち上がり表に出た。果たして短い時間の中で太一はどれだけ強くなることができるのであるだろうか…。

第二十話・いざ天国へ

初めはエレンのスピードについてこれなかったが、太一は徐々に追いつけるようになった。チャクラムは当てられる用になったし、接近して切りつけられるようになった。

「たっちゃんやるようになったわね〜」

「だからたっちゃんは止めて下さいって…。気に入ったんですか？」
「もち」

太一は半ば諦めたように肩をすくめた。戦闘能力で追いつくことが出来てもこの人には絶対勝てない。そう思った。

「それよりやるようになったってことは…」

「ええ、いよいよ天国奪還ね」

そう話していると、サレナが偵察から帰ってきた。

「どうだった？」

「天国の五大都市全てが攻略されたようです。増長天とその側近が各都市防衛の指揮を執っています」

サレナが淡々と報告書を読み上げる。いつも落ち着きがある方ではないエレンだが、何だかいつもと違う落ち着きの無さがあった。

「で、増長天はどこにいるの？」

「如来菩薩の国、浄瑠璃国じやうるりのくにです」

それを聞くやいなや、エレンはランスを持ち翼を広げた。

「んじゃ、行きましょっか」

「って作戦も無しにですか!？」

太一は面喰らってしまった。敵陣に攻め込むのだから策の一つや二つ用意しておくべきではないだろうか。

「そんなのシャロンちゃんの担当よ。私頭使うの嫌いだし」

残念ながらシャロンは別の都市を攻略するのでメンバーにいない。チラリとサレナの方を太一は見た。何も答えない代わりにサレナは肩をすくめた。チャムは期待するだけ無駄である。そう思考した瞬間

間太一の後頭部に衝撃が走った。チャムが蹴ったのである。

「何か失礼なこと考えたでしょ？」

「考えてないよ。チャムは僕の大事なパートナーなんだから、無下に扱ったりなんか」

言葉でそう飾るも女性のシックスセンスは侮れないと思った。例えそれが小さな女の子だとしても。

「むー、やっぱり怪しい…」

「そう怪訝するなって。それより本当に策無しでいくんですか？」

これ以上チャムに掘り下げられるわけにもいかず太一はエレンに話を振りなおした。

「もちろんよ。第一奇襲が成功するかどうかも分かんないんだから」

「え、それって…」

太一に嫌な予感が過った。これが当たると今回の攻撃そのものが怪しくなる。

「そう、敵もこちらがワープしてくるなんて重々承知してるでしょ
うね」

太一は頭を痛めた。時間を無駄にかけて敵の戦力を増強させないために速攻を仕掛けたいのは分かるが、いくらなんでも無茶苦茶である。

「じゃあ四天王は私に任せてあんた達は雑魚を片付けてちょうだい
な」

頭を抱える太一を見たエレンはため息混じりに言った。

「なんでため息つきながら言ってるのか疑問ですけど、分かりましたよ」

内心作戦と言えるものとは思っていなかったが、これ以上とやかに言う気が太一に起きなかった。

「サレナちゃん、よろしく頼むわね」

「はい！」

いよいよか、と太一は心の中で呟いた。エレンほどの実力をつけたとはいえないが、やれるだけ訓練したと思う。後は天国を取り戻

すためやれるだけやるだけだ。

「んじゃ、たつちゃん。私とサレナちゃんどっちがいい？」

「はい？」

気合いを入れやる気になった矢先だったので太一はすつとんきょうな声を出してしまった。

「ワープ出来るのは私とサレナちゃんだけだから、抱えられるならどっちがいいかな？」

エレンが上目遣いで太一をニヤニヤしながら眺める。楽しんでるな、この人……。緊張をほぐすためにやっているのだと信じたいが、そう信じられない人物であることは、数日の稽古で分かっている。

「それ、選ばないとダメですか？」

「あら、急に抱えられる方が好み？」

太一は絶句しサレナは少し顔を紅潮させた。チャムはサレナの異変を勘づくも首を傾げている。

「どうしたのサレナ？」

「な、なんでもないわ」

サレナは顔を叩き気合いを入れ直した。

「太一君は私が連れていきます」

「あら、どうして？」

エレンはニコニコしながら首を傾げる。

「まずそんな大きなランス持ってでは太一君を抱えるなんて出来ないでしょう？」

サレナはランスを指差す。エレンの一・五倍はありそうな大きさである。それに比べてサレナの武器はジャベリンという投げ槍。腰に下げたホルダーに七本収まるほどの大きさで、両手が空く。

「ふ、甘いわよサレナちゃん。私にとってたつちゃんを片腕で抱えるなんて楽勝なんだから」

そう言っただけでエレンは太一を脇に抱えた。

「うわっ、ちよっと!？」

背丈はエレンと太一でそう変わらないのに軽々と抱えれた。太一

は相当なショックを受けた。これではメンツも何もあつたものではなく、文字通り荷物扱いである。

「は、離して下さい！」

「うーん、気に入らないみたいね。やっぱサレナちゃんに任せるわ」
パツと太一を解放した。急にだったので太一は地面と口付けしかけたが、寸前で手をつきそれは免れた。

「さて、みんなの緊張もほぐれたことだし、いつちよいきますか」
本当に緊張をほぐすためにやっていたのか甚だ疑問だが、皆は気持ちいを戦いへと切り替えた。

増長天が指揮を執っている浄瑠璃国。そこにある建物の一室に彼は佇んでいた。彼の相棒である金棒を一心不乱に磨いていた。そこに一人の鬼が入室してきた。

「失礼します！ 増長天様」

「ああ？」

少しかすれたドスのきいた声で増長天は答える。鋭い眼光は誰も寄せ付けない禍々しいものを持っていた。しかし鬼はそれに臆することを忘れ慌ただしく報告書を読み上げた。

「持国天様に引き続き広目天様もやられました…！」

「んだと？」

増長天の眉がピクリと動いた。

「ち、死人共の分際で舐めた真似してくれるじゃねえか…」

「多聞天様に戦力を御送りにならないでよろしいのでしょうか？」

「ああ？」

金棒を掲げたり透かしたりして増長天は相棒の磨き具合をうかがう。

「んなもん要らねえよ、あいつには。それよりこっちの守りを固める」

「は？」

鬼がキョトンとすると増長天は不機嫌そうに怒鳴り散らした。

「そろそろ生き残り共が動き出す頃だろうが！　馬頭鬼、牛頭鬼、虎頭鬼に伝令しろ！　パーティーの準備は抜かりなくってな！」

「は、はい！」

鬼は入ってきた時以上に慌ただしく部屋を出た。

「へっ、楽しくなつてきやがったぜえ……」

増長天はニヤついてまた金棒を磨き始めた。そして自分の納得のいく出来になるとゆっくり部屋を出た。

第二十一話・太一の咆哮

どうしても女性に抱えられてのワープには慣れることは太一はできなかつた。そんな太一の慣れとは関係なく、無事ワープは成功し、天国の浄瑠璃国の外れまで着いた。

「どうして直接四天王のとこまでいかないの？」

「出た瞬間に袋叩きに会いたくないでしょう？ だから先手を取られないためにわざわざ外れにワープしたのよ」

「ふ〜ん」

「俺にいたつては抱えられたままだしな」

チャムには一々浄瑠璃国まで飛ぶのが面倒に思えたが、太一を見て納得できた。

「そか、太一が邪魔だからこんな面倒なことしたんだね」

「そんなにはつきり言うなよ！」

薄々実感していたものの、こうまではつきり言われては誰だって落ち込む。太一とてその例に漏れない。

「大丈夫だつて、太一は私がいれば強くなれるんだから」

「チャム…」

無邪気な笑顔に太一はチャムが落ち込んだ原因であることも忘れて少し感動してしまった。

「やっぱり太一君つて…」

「どうかした、サレナさん？」

サレナは独りごちていたつもりだったが太一に聞こえてしまっていた。

「え、いややっぱり二人仲がいいなって…」

「そりやもちろんですよ。なあ？」

「私いないとなんにも出来ないもんねえ」

少し二人の談笑が耳障りと思つてサレナは自己嫌悪に思った。二人が仲がいいのは戦闘時のパートナーだからいいことなのだが、サ

レナの心情は複雑だった。

それを知ってか知らずかエレンが切り替えを促すように話を切り出す。

「んじゃ、潜入としゃれこみますか。囷役は都市部に入ってからお願いね」

「分かってますよ」

一行は慎重に淨瑠璃国に近づいていく。鬼を見掛ける度にひやりとしたが幸いにも見つかることなく都市部に潜入出来た。

「んじゃ、囷役頼んだわよ」

「任せて下さいエレン隊長」

「よし、チャム！」

「うん！」

チャムはソルジャーソングを太一に歌う。それを聞きつけた鬼たちが太一達が隠れる物陰に忍び寄る。ある程度引き寄せたらバツとサレナは上に飛び上がりジャベリンを鬼たちに投げつけた。

エレンは鬼たちがサレナに注目している間にその場を離れ、増長天を探しにいった。

「こつちも準備OKだ！　くらえ！」

太一はホルダーからチャクラムを取りだし一つを鬼に投げつけてもう片方で切りつける。一方は致命傷となり鬼を倒した。これが初めての鬼との戦闘ではないが、流血を見るのはあまり気持ちのいいものではない。だがまだまだ数は多い。そんなことを思っただけならいいのだと太一は自分を奮い立たせた。だがつい弱音を吐いてしまった。

「く、こんな乱戦初めてだ…」

「こつちの時こそ私の出番でしょ」

チャムがヒラヒラと鬼達の中心に向かっていく。

「お、おいチャム！？」

心配する太一を余所にチャムはウインクをしてみせた。

「まあ任せてよ！　フェアリーララバイ！」

太一とサレナは咄嗟に耳を塞いだ。鬼たちはチャムの歌声に構わず動きを止めた二人を狙う。が、今度は鬼たちが動きを止めた。

「な、なんだこりゃ！」

「か、身体が痺れてきやがった…」

「しかも眠くなって…」

鬼たちは金棒を落としバタバタと倒れていった。それを太一とサレナはポカンと眺め立ち尽くしていた。

「じ、実は最強…？」

そうやつと口にしたがチャムは不満だった。

「もう！ もつと気の効いたこと言えないの？」

「いや、なんか根本から僕らの否定された気がして…」

「そうでもないよ。後三回しか歌えないし」

「え！？」

太一はさりげなくとんでもないことを言ったチャムを直視した。回数制限があるならもつと有効に使うべきだろうに。

「一日五回歌えるんだけど、太一に使ったのとさっきので残り三回」
指折り数えて残った三本の指を太一に見せる。太一はため息をついてチャムに言い聞かせる。

「あのな、そんなに貴重ならもつと考えて使ってくれよ？」

「なによ、せつかく助けたのに言うことがそれ？」

頬を膨らませてチャムが抗議するがそんなこと聞いていられない。

「僕の指示で歌ってくれ。いいな？」

「むう、しょうがないなあ」

チャムは渋々了解した。太一は胸を撫で下ろしたがサレナは俯きかげんでなにやら呟いていた。

「亭主閣下…？」

太一はそんな言葉を聞いてしまったが聞かなかったことにした。ドタドタと足音が聞こえてきたのでその方に皆は注意を向ける。

「どうやら囿役としては上々のようね」

「みたいですね、サレナさん」

「よし、頑張るぞ！」

「僕が指示したらね！」

普段ならチャムの不満の一つや二つ出てきそうなものだが、悠長に会話している場合ではもうなかった。一斉に鬼たちが姿を現し襲いかかってくる。

太一とサレナは武器を構えそれに備え、チャムは上空へと飛び上がった。

「やあぁっ！」

太一はチャクラムを大きくカーブをかけて投げ鬼たちを牽制する。手に戻ってくると出鼻を挫かれたまま突っ込んできた鬼たちを太一は斬り刻んでいく。ソルジャーソングのおかげで上手く首をかつ斬り一撃で仕留めていく。

「ち、やってくれるじゃねえか。先にヴァルキリーをやるぞ！」

「おう！」

どうやら鬼たちのリーダー格が到着したらしく鬼たちの動きに統一性が見られるようになった。指示通りサレナに攻撃が集中する。

ランスと違い小回りのきくジャベリンでなんとか大勢を相手にしていたサレナだったが、多勢に無勢、処理仕切れなくなり腹部に金棒が当たってしまった。

「きゃあっ！」

「サレナさん！」

一度攻撃が当たってしまったところから隙が生まれてしまい次々とサレナに金棒が襲いかかる。

「くそぉっ！ 退けえ！」

太一は叫び両方のチャクラムを投げ鬼の首を切る。倒れた鬼から金棒を取るとサレナを攻撃する鬼たちを薙ぎ倒していく。

「お前らぁ！ これ以上サレナさんに手を出すんじゃない！」

「太一……」

鬼たちは太一の覇気に萎縮していく。

「な、なんなんだよこいつはよ……」

「怯むな！ たかが人間だぞ！ 行かない奴が俺がぶつ殺す！」
鬼たちはリーダー格との板挟みにあい、葛藤の末逃げ出そうとする鬼が出た。

「責様あ！」

「ひいっ！」

リーダー格は逃げ出そうとした鬼を金棒で撲殺した。頭を潰され惨たらしい血の痕が他の鬼の目に焼きつく。

「責様らもこうなりたくなければ戦え！」

「う、うわあ！」

残った鬼たちは恐怖にかられ太一に突っ込む。

「まだ抵抗するのなら容赦なんかしない……」

運良くサレナの側に落ちていたチャクラムを拾い上げ一旦金棒を置くと両方をカーブをかけて鬼に投げつける。二つとも戻ってくる。と、ホルダーに直し金棒で鬼をまた薙ぎ倒していく。どちらが鬼か分からないくらいに。

「チャム、ソルジャーソングってこんなに能力を上げるものなの……？」

「分からない……」

二人はこの光景をただ眺めるしか出来なかった。

いよいよリーダー格一人になる。

「く、くそつたれが！」

金棒で殴りかかろうとするもリーダー格は太一の金棒に瞬殺された。太一は肩で息をし、まだ興奮が冷めないでいた。

そんな様子をサレナとチャムは蒼白とも取れる表情で見ることしか出来なかった。

第二十二話・エレンVS増長天

遠くから喧騒が聞こえる。いや、そんな生易しいものではない。戦闘の音だ。きつと囷役に成功したのだろう。太一たちが無事でいてくれることをエレンは祈った。

浄瑠璃国は音楽・演劇の国と称され、いつも音に満ち賑やかな都市だった。しかし鬼に荒らされ、家屋や建物は倒壊し瓦礫の山が築かれている。一体何のために占領したのだろうか。しかしエレンにそんなことを考える余裕はなかった。エレンの狙う増長天はおそらく後ろで構えて指揮を執るようなやつじゃない。自ら前線に赴き強敵を叩くようなやつだ。囷を使うこちらの作戦に勘づけばわざわざひっかかって一人で強敵と戦おうとするだろう。

エレンはしばらく進むと、半壊している劇場のホールに着いた。何故だか無性に気になりエレンは中に入っていった。

一歩進むだけで瓦礫を踏む音がするくらい中はぼろぼろでドーム状の天井は半ば崩れ落ち光が差していた。エレンは辺りを見渡すが誰も居らず、それでも気になったので舞台へと足を運んでいく。足音がするだけで不気味なほど静かなまま、舞台まで来る。軽く飛んでそれに上がる。

「バットエンドの悲劇のヒロインのご登場か？」

エレンは観客席の方を振り返った。そこには脳裏に焼きついて離れない姿があった。

「増長天……！」

増長天はニタッと笑って観客席の一番後ろからジャンプし舞台上に着地した。その衝撃で舞台にひびが入る。

「なんだあ？ 釣られてやったのにてめえか？」

明らかに落胆した声で増長天はエレンを見下す。エレンは歯をくいしばりランスを構える。

「腰がひけてんぞ？」

ち、マジで囷を潰した方が良かったかもな

あ……」

増長天はつまらなそうに金棒を回し始めた。ここまでバカにされて黙っていられるエレンではない。

「はあっ！」

「おおっと」

エレンはランスで突撃しようとしたがひょいとかわされてしまった。

「てめえそれでもヴァルキリーが一番強えのか？　時間あったんだからちったあ強くなつてこいよ！」

今度は増長天から攻めた。金棒がエレンの背後を捉える。だが寸分のところで飛んで避けた。

「ち、羽ちぎつてやる必要がありそうだなあ……。そりゃもうズタズタになあ！」

卑しい高笑いが劇場に響く。

「伸びろおっ！」

増長天は金棒を振り回すとその勢いで金棒の柄の部分から先が伸びた。正確には金棒の中に鎖が仕込まれておりそれが伸びたのだ。

エレンは突然のことに驚き回避動作が遅れてしまった。

「きゃあ！」

金棒はエレンの羽を掠めた。エレンは一時はバランスを崩したが何とか持ちこたえた。

「やっぱ普段から使わねえとダメだなあ……。まあ直撃させちまっても面白くねえか。遊んでやるぜ！」

増長天は金棒の仕込み鎖が伸びるのを利用して鞭のように武器を操る。

「この鎖はなあ、俺の妖気次第で長さが変わるんだよ。つまり、どこに逃げてても無駄なんだよお！」

エレンは避けても避けても来る攻撃に翻弄されている。これでは近づくことさえままならない。だがエレンはふと気付く。近づく必要などないことを。

次の攻撃を避けるとエレンは急速に上昇した。

「高く空へ逃げれば大丈夫ってかあ！」

増長天は金棒を空へと向ける。エレンは急停止し、ランスを向かってくる金棒へ向ける。

「そこっ！」

ランスの矛先からビームが放たれる。それは見事に金棒を直撃した。

「ちい！」

増長天は即座に金棒の柄を放棄しビームを避けた。

「様あねえなあ…、しかし俺は素手も強えぞ？」

増長天は拳を構える。

「それでどうやって私に攻撃するつもりかしら？」

エレンはランスを増長天に向ける。だが増長天は臆することなく一つの瓦礫を手にする。

「こうやってだよ！」

増長天は瓦礫を投げた。それは物凄いスピードでエレンに向かう。咄嗟にビームを撃ちエレンはその直撃を防いだ。

「まだまだ瓦礫はあるぜえ！　ぶっ壊した甲斐があつたつてもんだ！」

増長天は次々と瓦礫を投げってくる。エレンはそれを何とか避け続けるが、体力と集中力が限界に近づいていた。

「もうへばり始めたか？　つまらなねえ。もう終わりにしてやらあ！」

増長天は一際大きい瓦礫を投げつける。エレンは何とか避けるが、投げた直後にジャンプしていた増長天に気がつかなかった。

「おらあ！」

増長天の拳がエレンの頬に入り、彼女を地面へと叩きつけた。

「やっと叩き落とせたぜえ」

増長天は倒れているエレンの胸ぐらを掴み無理矢理立たせる。

「こう至近距離だとランスもビームも使えねえだろ？」

決めた。エレンの身体は放物線を描き瓦礫の中に沈んだ。

そこに終わった舞台の観客が現れた。太一、サレナ、チャムである。

「エレンさああんっ!!!」

太一の叫びに彼女に応えはしなかった。

第二十三話・太一VS増長天

太一は少し立ち眩らんだ。その様子を見てサレナとチャムは初めて彼を心配した。慌てて側に駆け寄り、サレナは太一を支える。

「大丈夫、太一君？」

「無事なようで何よりです…」

支えられているというのに他人の心配をする太一を見てサレナは微笑んだ。

「チャムのおかげで私は平気。それより太一は？」

「ちよつと疲れただけですよ。…チャム、疲労回復は頼めるか？」

チャムはこくと頷き癒しの詠唱を始めた。

「ありがとうございます。サレナさんももういいですよ」

「え？、ああ、そうね」

サレナは太一の肩を支えた手を、少し名残惜しそうに離れた。

ひとまず敵はいなくなり一段落と思った矢先、一筋の大きな光が三人の目に唐突に入った。

「サレナさん、これって!？」

「ええ、エレン隊長のビームね」

「あんなおっきなの当たったら四天王でも倒しちゃうんじゃないの？」

チャムは嬉しそうに飛び回りながら言った。太一もそれに同意する。

「ともかく行ってみましょう。チャムの言う通り、決着がついてるかもしれない」

「そうね…」

サレナはなまじ前回の戦いの結果を知っているだけに楽観視できなかった。むしろ最悪の結果さえ想像できる。

「サレナさん…?」

黙り込んだサレナを太一は不思議に思い彼女の顔をのぞきこむ。

少しの間が開いてからサレナが太一の顔が間近にあることを認識する。

「きゃあ!」

思わずサレナは仰け反った。

「いや、そんなに驚かれても困るんですが…。とにかく行ってみましょうよ?」

そう言っただけで太一はサレナの手を引こうとする。

「そうね、行ってみたいと分からないものね…」

「何か言いましたか?」

「ううん、行ってみましょう」

「はい!」

サレナは太一の良い返事を聞くと彼を抱えた。当然太一は慌てふためく。

「つてちよつと!?!」

「善は急げよ。チャムも私に掴まりなさい」

「分かった!」

サレナはチャムが自分の肩に掴まったのを確認すると、翼をはためかせ一気に光が発した場所、廃墟と化した劇場まで飛んでいった。サレナは太一を降ろし、劇場へと近づく。瓦礫を踏み砕く音がしたと思つたら、直ぐに嫌な鈍い音がした。人が殴られた音だ。サレナの血の気が引いていく。

「行きましょう!」

太一の言葉にサレナは頷きで答えることしかできなかった。急いで劇場の中に入る。そして皆が目撃したのはエレンが瓦礫に沈んだ瞬間だった。それを認識した太一の叫びが木霊する。チャムは太一の肩に掴まり、サレナはへたり込んでしまった。

「なんだ? 囷の奴らまで来たのか?」

左手に血を滲ませ、右腕を焦がした増長天が太一たちを睨む。その剣幕に萎縮してしまったサレナはバツと太一の手を掴む。

「逃げましょう!」

「サレナさん!？」

太一には彼女の訴えが理解できなかった。それにエレンを倒された怒りで太一は満ちていた。

「離して下さい! やらねえんですか!」

「ダメ、無理なの、分かって! 逃げて!」

「サレナさん!？」

サレナの異常な取り乱れように太一は戸惑った。しかし増長天は歩を進めてくる。

「言つとくが逃がしやしねえぞお? 俺の部下片付けてここまで来たんだ、ちつたあ楽しませてもらえんだろ?」

増長天は薄く不敵な笑みを浮かべてゆっくり近付いてくる。さすがに太一も恐怖を感じたが、逃げるわけにはいかないと判断できるほどには冷静だった。

「サレナさん、戦うんだ。逃げたつて無駄だつて分かるでしょ?」

太一は優しく宥めるように囁く。だがサレナは無言で首を横に振るだけだ。

「チャム、サレナさんを頼む」

「…分かった」

チャムが頷くと太一は無理矢理サレナの手を引き離れた。

「太一君っ!」

太一はサレナの言葉を顧みず増長天へと挑んでいく。

「まずてめえからか。いいぜ、かかつてきな!」

増長天の言葉を口火に太一は一気に駆け出しチャクラムで増長天に斬りかかる。拍子抜けするほど簡単にチャクラムが増長天の身体に刺さる。しかし太一も増長天も以後動こうとしない。

「どうしたの太一! 早く離れて!」

しかしどれだけ斬り抜いて逃げようとしてもチャクラムは増長天の身体から離れそうにない。

「このっ! 取れる!」

「無駄だぜえ、そんな武器じゃ俺はびくともしねえなあ!」

増長天は太一の頭をわしづかみぶん投げた。

「太一っ！」

チャムが悲痛な叫びを上げ、サレナは目を背けた。太一の身体は瓦礫の山に埋まる。だが直ぐに這い出てきた。

「へえ、人間にしちゃ根性あるじゃねえか」

「僕は死人だ。痛いけど殺られることはない」

太一は身構える。華奢でその姿が増長天には不恰好に見え、笑い飛ばした。

「けっ、確かに今のてめえはいくらぶっ倒しても立ち上がってきそうだな。だがな……」

増長天は刺さったチャクラムを抜き捨て、落ちてあつた金棒の柄の部分を持った。その柄の先には鎖がついているが、エレンのビームで溶かされたので途中までしかない。

「こいつは魂を潰すことができる。さっきの奴のせいでありはこんだが、てめえを倒すには十分だろ」

「言ったな……」

丸腰だと思っていたから太一は少し余裕があると考えていた。唐突にそれは崩れさってしまった。しかし太一は逃げ出すわけにはいかない。まず武器を手になければ、フェアシユテーエンの能力は発揮されない。

「来ねえのか？　ならこっちから行くぜ！」

増長天が武器を振るうと鎖が伸びて太一へ迫る。咄嗟に身を屈めてそれを避ける。

「まだまだ行くぜえ！」

増長天はまた鎖を伸ばし攻撃を続ける。これを避けながらチャクラムを回収するのは至難だと思った。しかしやらなければ勝機はない。なんとか太一はチャクラムに近付こうとする。

「危ないっ！」

チャムの声のおかげで眼前に迫る鎖に気付いたが、既に遅かった。太一の腹部に鎖が叩きつけられ、身体は宙を舞った。

「ぐはっ！」

地面に叩きつけられ吐血する。太一は血を見て魂が削られているような気がした。この攻撃は何回も受けられない。視界を他に向ける。

「ん？」

太一は見覚えのある武器を手にとった。それを杖代わりに立ち上がる。

「ち、運のいいやつだな。さっきのやつの武器かよ」

そう、太一が手にしたのはエレンのランスである。これなら増長天にダメージを与えられる。それは彼の焦げた右腕が証明してくれていた。

「勝負はこれからだ…」

「へっ、面白くなってきたじゃねえか…」

太一はランスを構え増長天と対峙した。

第二十四話・増長天

太一はランスからビームを出す。増長天は難なく避ける。試しに出しただけなので別に構わない。それに牽制にもなったようだ。しかし体勢を崩した増長天を狙うには些か距離がある。太一はビームを撃ちながら距離を詰めることにした。

「ち、バンバン撃ちなくりやがって!」

増長天は鬱陶しそうにビームを避けている。鎖で防ぐことが出来ない以上、避けるしかないのだろう。フェアシューターエンのおかげで射撃精度は悪くない。

「だあっ! うざってえっ!」

増長天はビームに構わず鎖を太一目掛けて伸ばした。ビームが増長天の脇腹を貫く。鎖は太一の足を掠めた。

「ぐっ…」

掠めただけとはいえ痛烈な衝撃が太一の足に走る。思わず体勢を崩し片膝をついてしまう。

「よっしゃあっ! 続けてえっ!」

さらに二撃目が太一の太股を叩きつけた。

「があっ!」

太股を抑え悶え苦しみそうになるが、何とか気力でもち直した。さらに気合いを入れ立ち上がる。

「魂を削られるってのはどんなもんなんだろうなあ…」

卑しい笑いを漏らしながら増長天はジリジリと寄ってくる。
ぐしゃり。

「ああ?」

進行を止めるかのように増長天の右足に何か刺さった。ジャベリンである。刺さった角度からどこから飛んできたか推測しその方向を見た。足に刺さったジャベリンを抜き、その先にいたのはサレナである。

「なんだ？ やる気になつたかあ？」

「……………」

サレナは肩で呼吸をし、ジャベリンを投げた手は震えている。

「ち、戦意の無いやつが邪魔すんじゃねえよ！」

増長天は鎖をサレナ目掛けて伸ばす。

「っ！！」

サレナは固唾を飲むだけで動くことが出来ない。しかし鎖が彼女を貫くことはなかった。太一の出したビームのおかげである。

「お前の相手はこの僕だ…。サレナさんは僕を倒してからにしろ！」

「ああ？ ああ、そうだなあ。んじゃ、言う通りにしてやるよお

！」

鎖が太一に伸びる。太一は歯をくいしばり後ろに跳んだ。

「ほう、まだ動けるんだなあ。てめえマジで人間か？」

「さあ、今は違つかもな…」

太一は足の痛みに耐え自分を奮い立たせる。

ビームとサレナのジャベリンは確かに増長天を貫いた。傷が塞がれ回復した形跡がないはずなのに、彼にはまるで傷などないかのような振る舞いを見せている。やせ我慢をしている訳でもなさそうだ。本当にダメージがないのだろうか。いや外傷見ただけでダメージがあるのは分かる。ということ…。

「やっぱりこれしかないか」

太一はランスを構える。狙いは増長天の脚。フェアシユテーエンの恩恵で狙いを外すことなくサレナの作った傷にビームを放った。一寸の狂いもなくピタリと同じ傷を貫いた。

「器用な真似しやがるなあ。だが俺には…、っ！」

増長天には何が起こったかすんなり理解出来なかった。だが解つてくると苛立ちを隠せなくなる。

「なんだよ、どうなつてんだよ、なんで脚が動かねえんだよ！」

増長天は無理に動かなくなった脚を動かそうとして倒れてしまった。

「痛みに鈍いだけで、身体しつかりダメージくらってるんだよ。右腕だって使ってないようだしな」

太一はランスの切っ先に光を集約していく。特大のビームで片をつける気である。

「まだだ！ 俺にはこいつがあ！」

増長天は足掻いて鎖を振り回し太一へ伸ばした。しかしそれは想定外の者を貫いた。

「サレナさん…？」

「大丈夫、この武器は私が封じるから…」

サレナは貫かれた自らに構わず鎖を握った。太一にはサレナの背中から鎖飛び出し、それが赤く染まるのが見える。ランスを落とすそうになる。しかしソルジャーソングのおかげか何とか光の集約は続けられた。

「邪魔すんなつ！」

増長天は鎖を振り回しサレナを離れさせようとする。それはサレナの傷口をいじくると同義である。

「ぐっ…！」

鎖は大きく振り回されサレナも連なつて宙を舞った。その時に隙が出来た。太一は増長天に特大のビームを浴びせた。強大な光の束が輝き劇場を照らす。ライトが切られた劇場にカーテンコールがかかることなく静寂が訪れる。

太一は倒れ込んでしまいたかったがそういうわけにはいかない。

「サレナさんっ！」

彼女は宙を舞いその隙に撃った。巻き込まれてはいないはずだ。ランスを放り投げサレナを探す。

ビームの跡は瓦礫ごと床が無くなり地面が露になっている。その上にサレナが横たわっていた。

「チャム！ サレナさんを！」

「うん！」

二人は彼女のもとへ駆け寄る。太一は鎖の切れ端をサレナから抜

き取り必死に呼びかける。

「チャム、早くっ！」

チャムは頷き治癒の歌を歌った。傷は塞がったが目覚まさない。
「チャム、まさか死んじやいないだろうな!？」

「大丈夫!　落ち着いて!　気を失ってるだけだから!」

チャムの言葉に太一は胸を撫で下ろした。

「そっか、良かった…」

「あら、私の心配はしてくれないわけ？」

太一は心臓が飛び出そうになった。振り向くと喜びが込み上げてくる。

「エレンさん!」

「はあい、やってくれたわね」

エレンは片手をひらひら振って笑顔を見せた。鎧はボロボロだが顔などには外傷がない。戦っている間にチャムから治療を受けたのだろう。

「ちえ、たっちゃんに良いところ取られちゃったな。でもその子で戦ってくれたし、よしとしますか」

エレンは太一の持つランスを見て微笑んだ。

「サレナちゃんが目を覚ましたら行くわよ。他がどうなってるか気になるし」

「はい!」

皆は眠るサレナの側に腰を下ろした。瓦礫だらけの劇場は座り心地が悪い。だが彼女の寝顔はそれを忘れさせてくれるほど綺麗で安らぎを与えてくれた。

「今のうちにキス…、なんて考えちゃダメよ?」

「考えてませんよ!　少し気が緩んだだけです」

まだ浄瑠璃国を取り返したに過ぎない。エンマを倒さなければ、戦慄を促す鐘は鳴り止まない。

「そっね。でも今は勝利の余韻に浸っておくのも悪くないんじゃない?　きっと次戦う時の糧になるわ」

「そういうもんなんですかね」

エレンが何を示唆しているのか太一には分からなかった。単純そうに見えてエレンが一番考えが読めない。だが、今は言葉通りに受けとめ一時の休息を身体に与えようと思った。

第二十五話・エンマとヤマと

ヤタガラスの首が落ちた。広目天が死んだことにより伝達機能を失い、エンマが利用価値無しと判断したのだ。

「無益な殺生を…」

鉄格子を隔ててエンマと向かい合っているのはヤミである。長い黒髪の美しい女性で、手枷をはめられ、その先に付いてある鉄球に自由を奪われていた。

「僕の所有物をどうしようと思手だろ、義姉さん」

義姉さんとエンマが彼女を呼称したことから分かる通り、ヤミはヤマの妻である。ヤタガラスの亡骸を蹴飛ばしエンマは鉄格子に手をかけヤミを見下す。

「なんですか…」

エンマは憎悪に満ちた目で睨まれているのにも構わず不敵な笑みを絶やさず話をする。

「吉報だよ。広目天と、恐らく増長天が死んだ。ヴァルキリーと義姉さんの友達が頑張ってるみたいだね。おかげで四天王は多聞天人になっちゃったよ」

エンマは両手を広げて首を振るも、全く悔しがったりした様子はない。ヤミは心底理解できなかった。

「こんな動乱、成功するはずがないんです。分かったらこんな馬鹿げたこと止めなさい！」

エンマはヤミの怒声を聞き流し話を続ける。

「さっきのヤタガラスだけど、面白い情報を持ってきたよ。どうやら鬼狩りの血筋が広目天を倒したみたいなんだ。けど持国天と増長天を倒したのは半鬼じゃないかって…」

「っ！！」

ヤミは思わず固唾を飲んだ。肩は震え顔は青ざめ始める。

「さあて、迎え入れる準備をしないとね」

エンマはそう言い残し鉄格子から離れた。ヤミはエンマが部屋を出ると震える身体のまま祈り始めた。

エンマは次にヤマを監禁している部屋を訪れた。ヤマは鉄格子の奥で手枷足枷をはめられ鎮座していた。

「朗報だよ。そのうち助けが来るかもね」

「…四天王が敗れたのか？」

長い間口を開いてなかったのかヤマの声は掠れて小さかった。そこに天国の長の貫禄はなかった。

「まあね。後は多聞天だけだよ。地獄と天国両方で反乱が起きちゃって困ったもんだよ」

ヤマは二の句を告げようとはしない。エンマと口を聞きたくないのか、絶望しきっているのか。

「ヤミはこれを聞いたら一瞬希望を抱いたみたいだったけどね」

「一瞬…？ 貴様、ヤミに何を言った！」

ヤマが興奮気味に声を荒らげる。手のひらに火球が浮かぶ。しかし火は手枷に吸い取られ、その締め付けが強くなった。それを見てもエンマの不敵な笑みは変わらない。

「気になるんなら直接聞いてみればいいんじゃないかな？」

「貴様…！」

急にヤマは尻込みした。苦虫を噛み潰すような表情をしている。

「まあ今の兄さんに来るわけないか」

エンマはいつでもよさそうに吹き部屋を後にした。

そして彼が向かったのは元天国宮殿謁見の間。そこには最後の四天王多聞天^{たもんてん}が待機していた。

「やあ、遠路遙々ご苦労様。地獄は清姫に任せてきたのかな？」

「はい。地獄での数々の失態、こんな面目のない私にいかなご用でしょうか」

多聞天はエンマの登場からずっと頭を上げようとしない。エンマ

はそれに構わず話を続けた。

「君には反乱の象徴となつているやつらを倒してもらおうよ」

持国天らと地獄組の戦いは多聞天をヤタガラスを通して知っていた。亜依奈と覚醒したメタボが脳裏に浮かぶ。

「そのため君に白虎を授けたいと思う」

「ありがとうございます、エンマ様」

エンマから白い光が放たれ、多聞天の刀に入った。その鏢つばに白虎が描かれる。

「その刀に白虎が宿った。これで容易に地獄に戻るね」

「ありがたき幸せ。それでは早速……」

立ち上がり去ろうとする多聞天をエンマは引き止めた。

「待って。ここで戦って欲しいんだ」

多聞天は振り返り怪訝な顔をした。

「つまり、ここまで誘き寄せよと？」

「ああ。反乱の象徴たる彼らは見事天国宮殿までたどり着く。だけど僕や君に一網打尽にされちゃうんだ。素晴らしいシナリオだろ？」

「なるほど、素晴らしいお考えです」

多聞天はニタリと笑い天国宮殿を後にした。

広目天戦後。ヤッシーと若頭が合流し亜依奈の元へ集まる。論点
は一つ、忍者のことだ。

「全員無事つてわけにはいかなかったか……」

ヤッシーはそう口に出してみたが、理解は出来ても納得出来ない
でいた。

「本当にすまない……」

沈んだ亜依奈の声。目を反らすメタボとお嬢。ヤッシーと若頭は
事実として受け入れるしかないと悟った。

「まあ、仕方ない……、つて言うのは薄情だけど。忍者の旦那だって
覚悟はしてただろうしさ。顔を上げてさ、せっかくの美人なんだか

ら

周りが凍り付くようなキザツたい台詞。堪えきれずお嬢は刀の柄でヤツシーを殴った。

「お前はこんな時に何を言ってるんや!」

「いやだつてずっと仮面着けてて素顔見たことなかったからっ!」

落ち込んだ空気に暖かさが広がる。もしかしたらヤツシーは重い空気を変えたかったのかもしれない。

「とにかくこの件はこれで終いや。ここで足止めたら、忍者も浮かばれへん」

お嬢が沈黙を破り立ち上がる。若頭はお嬢が忍者によく慕っていたのを知っていた。この中で誰よりも悲しいはずのお嬢が吐き出したい気持ちを抑え歩を進めようとしているのだ。ヤツシーが空気を変えたとは言え、簡単に切り替わるものではない。ならば忍者の代わりにこの人の行く末を見届ける。心の中で若頭は誓った。

「ああ、そうだな、お嬢。亜依奈さん、次はどうするんだ?」

「…情報収集だ。広目天の下には色々集まってくるはずだからね。

けどメタボとお嬢には別にすることがある」

「うちも?」

亜依奈は体力が回復しきっていないのに玄武を呼び出した。

「この子たちを頼むよ」

玄武はゆっくり頷き事態を飲み込めないメタボとお嬢を自らの背中に乗せた。

「せめて説明してくれよ!」

そんなメタボの叫びもむなしく玄武は彼とお嬢を連れて光を纏い消え去った。

「鬼だなあんだ」

「そうだよ。今さら気付いたのかい?」

亜依奈はわざとらしく笑ってみせた。

「それで俺たちは何をすればいい?」

「情報収集って言ったろ。広目天の下には色々集まってくるからね」

「ふむ、分かった…。が、お嬢は…」

若頭は玄武が消えた宙を見る。

「大丈夫、あの子らならきつと…」

亜依奈は立ち上がり奥へ進んでいく。二人も自分たちの出来ることはしようと亜依奈についていった。

第二十六話・四靈

玄武に連れてこられたのは異空間としか言い様がない場所だった。暑いわけでもないのに遠くの方が陽炎のように歪み、空は何も考えずに絵の具を混ぜたパレットのように混沌としていた。修行した玄武の間とは何もかもが違っていた。

「なんだよ、ここ……」

「うちが知るか」

キョロキョロ辺りを見渡しても石造りの床と混沌とした空が広がっているだけだった。つまり玄武さえいなかった。

「玄武もいないってか、まいったな……」

「ちっ、亜依奈は一体何をさせたいんや」

「さあ……」

亜依奈のことだから何か考えがあつてのことだろう。しかし彼女のやることにしては脈絡が無さすぎる気がする。二人が思考を巡らしていると、混沌の空から光が射し亀裂が生じた。そこから光を纏った龍と巨大な亀が出てきた。

「我は応龍……。四靈の一つにして青龍を配し世界の繋がりを守るもの……」

「同じく靈亀……。玄武を配しておる……」

仰々しい登場にメタボとお嬢は啞然とするしかなかった。しかし何とか口を開こうとする。

「俺は早川雅人。通称メタボ」

「地獄組組長、月臣沙羅や」

二人が名乗ると応龍らが頷いた。

「玄武から主らのことは聞いておる。じゃが主らはわしらのことは何も知らんようじゃのう」

二人はこくりと頷く。ただただ地獄を正しく裁かれ罰されるところにしたいがために戦ってきた。そのため地獄については他の囚人

よりかは知っている。しかし四霊だなんだのは亜依奈の玄武しか知らない。

「先も言った通り、わしらは世界の狭間に住み、地獄、天国、現世、タルタロス、エリユシオンの繋がりや管理してある。それが四霊の仕事じゃ。玄武などの四獣はわしらの下につきサポートをしてくれる」

彼らがどういった存在かは理解した。だからこそ亜依奈や自分たちに協力をしているのが不自然に思えた。その疑問を察したかのように応龍の口が開く。

「だが困ったことが起きた。エンマが自らの立場を利用し、禁断の術を用いて鳳凰と麒麟を支配下においたのだ」

メタボとお嬢は驚愕した。今さらながら自分たちが相手をしようとしている者の大きさを知った。

「ちっ、無茶苦茶な野郎だな……」

「うむ。たかが地獄の長にしては、奴は天才的な能力を持っていたと言わざるえない。その事を知った亜依奈は協力を申し出た」

「ゆえにわしは玄武を授けたのじゃ。しかし鳳凰と麒麟を従えたエンマは強すぎる」

「そこで貴様らの稽古をつけてやることにした」

「早速始めようかのう」

矢継ぎ早に説明したかと思いきや、唐突に稽古が始まるうとする。さすがにメタボとお嬢は対応に困った。それに、どうして自分たちだけなのか。この疑問を口にする暇もなく、応龍、霊亀から発せられた光が人の形を作る。それは二人がよく知る人物となった。

「忍者……？」

「亜依奈さん？」

二人の言葉通り眼前に佇むのは、魂を失ったはずの忍者と、この場へと追いやった張本人の亜依奈であった。

「主らが思う最強の人物じゃ」

「そいつらを乗り越えてみる」

また亀裂が生まれ、応龍と霊亀は消えてしまった。

「ちっ！　今のお嬢にこいつは…」

お嬢はここへ飛ばされる直前に、忍者がいなくなったことを受け入れたばかりである。微かに震えているのが見てとれた。

「…やないか」

「え？」

「面白いやないか！」

お嬢は叫ぶと直ぐ様抜刀し切っ先を忍者に向ける。

「魂が消えてしまったら、もうでけへんと思つてた。けど、今こそ
うちは忍者を越える！」

メタボは呆気に取られたが、金棒を亜依奈に向けやる気を示した。

「へっ、やっぱお嬢はお嬢だな！」

「どういう意味や？」

「俺たちのリーダーってことだよ！」

メタボの台詞を皮切りに戦闘が始まった。まずメタボと亜依奈の金棒がぶつかり鈍い金属音を響かせる。それがゴングとなり忍者とお嬢が動き出した。

お嬢は縦に斬りかかろうとするが忍者はものともせず避ける。しかし小振りだったため大した隙はなく直ぐ様二撃、三撃と攻撃を繋げていく。埒があかないと思つたのか忍者は飛び上がりお嬢を頭を支点にして背後を取った。

「しまっ…」

忍者はいつから持っていたのか忍者刀でお嬢の背中を斜めに斬った。

「うぐっ！」

血は吹き出し思わずお嬢は片膝をつき刀を杖代わりにする。さらに汗が大量に流れ体温の上昇を感じた。本来なら出血多量で死んでいるが、既に死んでいるのもう死ぬことはない。しかも魂を削る武器というわけでも無さそうで存在が消されるわけでもない。

だがそれだけだった。体力の消耗を感じるし意識は朦朧としてく

る。痛みに耐えお嬢は忍者の方を向き、斬りかかる。しかしそんなやけっぱちな攻撃が当たるはずがなかった。

忍者は一瞬の隙を突いて斬りかかろうとする。が、間一髪お嬢は後ろに下がり腹部を隠す服が切れて少し肌が露になったただけだった。肩を上下させて息をし、霞む視界で忍者を捉える。だが忍者がぶれて見えて切っ先の狙いが定まらない。

「…奥義、散爆符」

「!?!」

お嬢は微かな忍者の声を聞くと後ろに飛び退いた。お嬢がいたところに爆発が起こる。大量の炎虫、ヤマタノオロチを仕止めた忍者の切り札だ。その威力をお嬢はよく知っている。だからこそ咄嗟に反応出来たが、爆風でお嬢は吹き飛ばされてしまった。背中が地面をすり、斬られた傷がえぐられていく。

「く…」

歯をくいしばりお嬢は立ち上がる。しかし刀を支えにしないと立ち続けることはできなかった。忍者はもうお嬢の隙を突く必要すらないと考えたのか、ゆっくり忍者刀を構えて近付いてくる。死ぬことも魂を消されることもないのだから臆することはない。そう頭で考えているはずなのに足は震えて動かない。いや、足だけではなかった。刀を構えようにも腕が上がらない。頭と身体が分離したような感覚に襲われた。

横目でメタボを見ると亜依奈の金棒が腹部に入り踞る姿が見えた。助けは期待できない。自分で何とかしなければならぬ。そう自分を叱咤激励しても足は動いてくれない。

揺れる忍者刀が一步二歩と迫ってくる。目を瞑ってしまいたくなく、それだけはやるわけにはいかない。それは、忍者が教えてくれたことだった。

第二十七話・お嬢と忍者

「速っ！」

お嬢は思わず尻餅をついた。もう何時間も対峙しており、お嬢は汗だくだった。それに対し忍者は汗どころか呼吸すら乱れた様子はない。

「…ビビるからそうなるんだ」

「なっ!? そんなことあるかい！」

お嬢は直ぐ様立ち上がり刀を構える。しかしその切っ先は震えていた。忍者は太刀と小太刀の間くらいの大きさの刀を鞘にしまった。

「どうゆうつもりや！」

「…目を瞑るようでは」

そう言い残し忍者は去っていった。お嬢はしばらく切っ先を揺らし無念を叫んだ。それからお嬢は忍者に認めてもらえるよう無茶苦茶に修行した。

だが…

「たあっ！」

「……」

甲高い金属と金属がぶつかり合う音が響く。お嬢はつばぜり合いをしているつもりでいた。

「ええ加減忍者の速さにも慣れたわ」

「……」

また金属音が鳴り響いたと思ったなら忍者は直ぐ後ろに退いた。刀は剣と違い刀身が細いため打ち合いには向かない。きっと忍者の刀はダメージが大きいのだろう。そう思いお嬢は駆け出し間合いを詰める。

「もらった！」

刀を振り抜いたつもりだったが何の手応えもお嬢は感じられなか

った。気がついたときには忍者は背後に回っており、峰打ちをした。いつもそうだった。僅かな示唆を残し希望見せ、それを摘み取る。しかし確実に昔の自分よりかは強くなっていた。

「っ!？」

今のはなんだったのだろう。昔のことには違いないが、どのくらい昔なのか定かではない。だが今はそんなことを懸念している場合ではないことに気がついた。お嬢は地面に伏しており、石造りの床は体温を奪い生温かくなっていた。

そうだった。忍者に斬られて意識を失ったのだ。死ぬことも魂が消されることもなければ、意識を失うしかなかったのだろう。死んでどれくらい経ったか分からないが、未だに彼の世の身体には解せない部分が多い。

仰向けになり目に入ったのはお嬢を見下す忍者が向ける切っ先だった。きつと何十回とこのタイミングで斬られたのだろう。

またお嬢は意識を失った。

こうして意識を失っていくなかで、何故か夢を見てから目覚めていた。死んでから見るものがなかった夢を。そこで出てくるのは決まってお嬢と忍者。いつも通り僅かに勝てるという示唆を残し希望を与え摘み取っていく。だが今回は示唆も希望も見せてはくれない。彼との修行でそれを奪われてはただの苦痛、まさしく地獄でしかない。

地獄…？

そうだ、地獄だ。自分たちは地獄をぶっ潰すために戦ってきたのではなかったか？ お嬢は自分にそう問いかけ奮い立たせる。

だから、まずこの地獄をぶっ潰そう。それは忍者を乗り越えることに繋がるはずだ。目を覚ましたらそうしよう。

お嬢は目を覚ました。そうはつきり意識すると直ぐに立ち上がった。忍者は突然のことで斬りかかることが出来なかった。

「残念やったな」

「……」

忍者は無言で武器を飛び道具に切り替え手裏剣を投げってくる。お嬢は器用に身を翻しつつ忍者に近づく。

「はあっ！」

お嬢は一気に刀を振り下ろした。忍者はそれを刀で受け止める。

忍者はお嬢の刀を振り払おうとするが、お嬢はびったり忍者の力の入れ具合に合わせるので振り払えない。

「……！」

「へっ、てりゃ！」

お嬢は忍者を蹴飛ばした。よたよたと後ろへ下がっていったが尻餅をつくことはなかった。

「たあっ！」

すかさずお嬢は踏み込み間合いをつめ刀を振り下ろす。その速さは忍者が対応できないものとなりつつあるのか、避けることはなく刀で受け止める。

「どうした？ 避けへんのか？」

「……」

忍者は無言だがお嬢の急激な変化に戸惑っているとお嬢は思った。だが戦術において忍者の柔軟性は計り知れないものがある。それに忍者の武器は刀だけではない。懐から札をちらつかせるとお嬢は退かざる得なかった。

忍者は刀をしまい、札やクナイを構える。符術や飛び道具主体に切り替えるようだ。

「ち、こちらに合わせてくれへんか……」

お嬢は刀を低く構え飛び道具を警戒しながら距離を詰めることに

した。忍者は燃えた札とクナイを前方四方に一斉に投げる。これでは迂濶に近寄れない。クナイを刀で弾き返そうとして折れてしまう可能性があるし、炎で溶解したものを刃こぼれと同じように烈獄丸の能力で修復出来るか分からない。

「はあっ！」

お嬢は燃える札を斬り血路を開いた。そして直ぐ様烈獄丸の能力で修復を図る。一か八かの賭けだったがお嬢はその賭けに勝った。少し溶解した刀は何事もなかったかのように修復された。

修復能力を使いながら斬っていくのでスムーズに燃える札を処理しながら忍者に近付いていく。だが忍者はそのまま簡単に斬られる者ではない。後ろに退きつつクナイを投げた。

「つつ！」

お嬢は足を止めた。クナイはお嬢の目の前に突き刺さる。

「しま……」

これは逃げるためだけではなく足を止め隙を作るためのものだとお嬢は気が付いた。顔を上に向けると刀を構え飛び上がっている忍者が見えた。

また斬られるのか。

やはり忍者は越えられないのか。

この地獄は終わらないのか。

いやだ。目を覚ます前心の中で宣言したじゃないか。この地獄をぶっ潰し忍者を越えろと。

そう自分を奮い立たせると不思議なことに周りの現象がひどくゆっくり見えた。忍者の飛び上がり落ちてくる軌道、そこから放たれる刀の軌道の予測が見えた。

それを信じ刀を構えた。二人が衝突する。金属音ではなく、微か

な肉を裂く音がした。

お嬢は片膝をついた。肩から血が吹き出る。忍者は倒れた。肩から腰にかけて斜めの斬撃の痕があった。そして霧散し消えていった。お嬢は勝ったのだ。傷を負ってしまったが間違いなく忍者を斬ったのだ。

「これで忍者を越えられたんかな……」

お嬢は仰向けに倒れ、呟いた。その頬には涙が伝っていた。涙の理由は彼女自身にも分からなかった。忍者を越えられた喜びからなのか、二度と会えない仲間を想つてのものなのか。

涙にどんな意味が込められていたとしても、越えなければいけないものだ。お嬢は涙を拭い立ち上がった。

まだ彼女には大役が残っている。エンマの地獄をぶっ潰す大役が。

第二十八話・メタボと亜依奈

メタボには弱点がある。亜依奈との修行で自らに眠る潜在能力を引き出すことが出来るようになったが、それに時間がかかることだ。味方がいればカバーしてもらえるが、一対一だと不利にならざるえない。

景気良く亜依奈とゴングを鳴らしたはいいが、二撃目の金棒が交わることはなく、メタボは亜依奈に蹴り飛ばされてしまった。

上手く受身を取り倒れることはなかったものの、メタボの不利に変わりはない。それにこの亜依奈は情けをかけてくれない。応龍が産み出した幻影か何かの類いだろっから、魂を消される心配は無いだろっ。その点を除けば容赦なく攻撃してくるといふことだ。

「情け容赦ねえ、敵と戦ってる時の亜依奈さんか。手強いんだろっな。けど…！」

初めて会った時、持国天と戦っている時、修行をつけてもらっている時、確かに亜依奈は強いと思った。

だがあつまり大百足に拐われて次に目にした光景はボロボロだったり、持国天にやられたり、メタボには亜依奈の強さを疑っている自分がいた。

しかも亜依奈を戦闘不能まで追い込んだ持国天をメタボは倒している。力を引き出すことが出来れば亜依奈を倒せるはずだ。あくまで出来ればの話だが。

「うわっ！」

亜依奈の金棒はメタボの頭があった空間に軌道を描く。間一髪しやがんだからよかったものの、少し遅れていたらメタボの頭は潰れていただろっ。

「できそうにないから俺の中の最強つてわけだ…」

そう呟いてメタボは亜依奈から距離を取る。

亜依奈は玄武の間で自分を付きつきりで修行をしてくれた、いわ

ば師匠のような存在。メタボの知る亜依奈を完全コピーしたのが目の前の彼女なら、時間稼ぎだってままならないだろう。なぜなら亜依奈はメタボの戦闘パターンや癖を重々分かっているからだ。

「それでもやるしかねえ！」

メタボは決心して亜依奈に突っ込んでいく。二十メートルはある距離を一気に詰め、最後に踏み出した右足に体重を移動させるのを意識して金棒を振り下ろす。が、亜依奈を捉えることはなく、金棒は虚空を殴った。

その大振りで生まれた隙を見逃す亜依奈ではなかった。空いた脇腹に金棒が叩き込まれる。亜依奈が力を抑えたのかメタボは衝撃で飛ばされることはなかった。

だが強烈な痛みが襲ってくることには変わりなく、跪いてしまった。歯をくいしばり痛みを耐え、半目で亜依奈を捉える。だがふと、その先に映るお嬢と忍者との戦いに焦点を移す。我が目を疑う光景があった。忍者がお嬢を斬り裂いたのだ。血が吹き出しお嬢は倒れて動かない。

「お嬢っ！」

メタボは直ぐにお嬢へと駆け出そうとするが、当然亜依奈がそうはさせまいと妨げてきた。

「退けよ、お嬢がやられてんだぞ！」

メタボは亜依奈に金棒を振り下ろす。しかし怒りに身を委ね、冷静さが欠如した攻撃が亜依奈に当たるはずがなかった。勢い余ったメタボに足を引っかけると無様に転けた。

「痛っ……」

起き上がるうと四つん這いになるメタボの背中に衝撃が走った。金棒が身体を貫通し石畳に縫いつけた。亜依奈は一気にそれを抜きとり、血の水芸が披露される。あまりの衝撃でメタボの意識は飛んでしまった。

「あんたの力は戦いの中で目覚めていく。血が煮えるような熱いものを感じたら、それをエネルギーにして理性をもって束ねな。そうすればあんたの力はあんたの良きパートナーとなってくれるよ」

そう言ってくれた人は誰だっただろうか。紛れなく、亜依奈だった。この人に俺は路地裏の喧嘩レベルの戦いをまともなものにしてもらった。覚醒した得体の知らない力の使い方を示してくれた。

そんな恩人の仮面を被った敵が、立ち塞がる。胸クソ悪い話だ。お嬢だけでなく自分の身すら守れやしない。揺らぐ意識の中、目を覚ました瞬間また意識を失うことになるのは分かった。だがメタボは立ち上がらないでいるわけにはいかなかった。自分を鍛えてくれた亜依奈に申し訳が立たないし、弱点を克服しなければこれからの戦いに差し支える。そして何より、仲間を助けられずにくたばる自分が許せないのだ。

何とか自分がどういう状態にいるか理解できるくらいに意識を回復させた。俯せになっていたので、腕立て伏せのように力を入れ起き上がろうとする。

それに気付いた亜依奈がまたも金棒でメタボの背中を貫こうとした。しかしそれは出来なかった。彼の背中中は鉄板が入ってるかのようにつに硬く、金棒を物ともしなかったのだ。

「っ!？」

亜依奈はハッと息をのみ後退る。メタボは現状を理解しきれないが、とりあえず立ち上がった。側に落ちてある金棒を拾い構える。「…これは弱点の克服なのか、単に時間経って力が出てきたのか分からねえけど、あんた終わりだぜ?」

メタボは金棒を固く握りしめ亜依奈を睨んだ。無表情の仮面を着けた亜依奈から表情を読み取ることは出来ないが、先程までのように速攻することはない。ふと亜依奈は仮面に手をかけた。

「素顔見せて混乱させようって腹か? そんなんで止められるほど今の俺は…っ!？」

メタボは驚愕した。無理もない、仮面を取った瞬間亜依奈はメタ

ボになつてしまつたのだから。

「なるほど、条件をクリアしちまえば最強は俺なのか。我ながら自意識過剰だぜ」

まるで鏡の中から出てきたかのようにそっくりな自分の形をした敵を見据え、メタボは薄く笑つた。やがてその笑いは大きくなつていった。

「面白えっ！　偽物が本物に勝てるかよ！」

メタボは一気に間合いを詰め偽物目掛けて思い切り金棒を振り下ろす。が、偽物は金棒でメタボの一撃を受け止め、力比べとなつた。しかし力量に差などなく、

膠着状態が続いた。四霊はここまで忠実に再現できるものなのかと、メタボは感心した。力、速さ、技量が同じとなると後は戦術で差をつけるしかない。しかしこの偽物が同じ思考をし、同じ戦術を立てるなら、メタボは自分自身の思考を越えなければならぬ。そんなことが可能なのか分からないが、勝つにはやるしかなかった。

一度力を緩め拮抗を解き距離を取る。

こういつた場合どうするか。これを先読みし踏まえて行動すれば偽物を出し抜くことができる。しかし、こういつた場合どうするか。答えは偽物が先に出していた。

偽物は直ぐ様距離を詰め直し攻撃を畳み掛けてきた。例え同一人物だとしても、一々考えて行動している者と、本能的にやってのけてしまう者では当然後者の方が速く動ける。

咄嗟に金棒で攻撃を防ぐことが出来たが、それは先手を奪われたことを意味していた。

「考えんのはヤメだ！　こっちも本能的かつ野性的に行くぜ！」

メタボは一気に後ろへ下がりを一旦偽物の金棒を外す。相手がよるめいたところで一気に間合いを詰め金棒を顔面に叩きこんだ。偽物は背中を擦りながら数メートル吹き飛んだ。

「…勝つたか？」

偽物は霧散し消えた。メタボはお嬢を探そうと辺りを見渡す。ど

うやら彼女も忍者を倒した後のようで、座り込んでいた。

「よかった、お嬢も勝ったみたいだ…、うっ！」

突如メタボの全身に痛みが駆け巡った。思わず片膝をつく。

「メタボ！」

お嬢はメタボに駆け寄ろうとする。

「ならん！」

空に亀裂が入りそこから霊亀と応龍が登場した。メタボとお嬢の間に割り込む。

「忌々しい鬼の血が暴走しつつある…、力を束ねることをせなんだか」

「そんなんでもええ！　メタボはどうなるんや！」

「わしらで抑えこむ。行くぞ！」

応龍がメタボの中に入っていった。メタボはさらに苦しそうに悶える。滝のような汗を流し両腕を抱え地面をもがき足掻く。

「大丈夫なんか！」

「応龍がダメならわしが行くまで…」

やがて足掻く力を失ったのかぐったりと動きを止めた。お嬢が息をのみ様子を見守る。

「…どうやら成功のようじゃな」

お嬢は安堵しメタボに駆け寄った。

第二十九話・契約

ぐったりと倒れたメタボだったが、お嬢が駆け寄った時には意識は回復していた。ゆっくりと目を開けると、お嬢が顔を覗き込んでいた。

「俺あ勝ったのに、なんで倒れてんだ？　まさか負けたのか？」

あまりにメタボが見当違いなことを言ったのでお嬢は思わず笑った。

「なにが可笑しいんだよ？」

「気にすんなや。それより、身体の調子はどないや？」

メタボの身体には確かに応龍が入っているはずである。だがメタボは普段と変わらず会話をしている。応龍はどうなってしまったのだろうか。

「安心せい、直ぐに出る…」

応龍の声がしたがやはり姿が見えない。それに声が聞こえた、というよりも頭の中に直接語りかけたという表現の方がしっくりくる気がした。

メタボが首を傾げていると、強烈な虚脱感が襲ってきた。

「うっ…！」

メタボは思わず片手をつく。

「メタボっ！　あっ！」

お嬢はメタボを心配するのを忘れ、彼の上空に現れた応龍を注視してしまった。メタボもそれに気付き見上げてみると、腰を抜かした。

「うわっ！　いつの間に!？」

メタボのリアクションを気に留めず応龍は語り始めた。

「メタボ…、貴様に宿る力を抑圧した。その代わりにわし直々に貴様の力となってやろう」

「どうということだよ？」

「…いずれ語られる日は来よう。今からその金棒を媒介にし力を宿らせる。用があれば金棒に語りかけるがよい」

「いや、さっぱり分からねえよ！」

応龍はメタボが喚いているのを無視して金棒の中に入っていた。応龍の巨体が小さな金棒に入っていく様は圧巻だった。それが終わったらまるで嘘のだったような静寂が訪れ、ただただ金棒を眺めるしかなかった。その様子を見ていたお嬢は沈黙を守ったままの霊亀に語りかけてみた。

「…この修行はあんたらの主認定試験ってわけやったんか？」

「うむ」

あつさり霊亀は認め、もうやることは分かるだろうと言わんばかりにお嬢と向かいあった。

「ただ、お主の場合、暴走したメタボの抑止力になってもらう必要があるんで。そのための力とも考えてもらっていい」

「抑止力…」

忍者を倒した後、お嬢は横目でメタボの戦いを眺めていたが、鬼気迫るものがあり、単純な力だけなら勝てる者がいないとすら感じていた。現に今のメタボは力を引き出した強さと同等の力の偽者を倒している。

果たして自分は抑止力になりえるのだろうか。それ以前にメタボに向けて剣を振るうなど考えたくなかった。

「まあ、暴走させせなんだら、ただのパワーアップじゃよ」

霊亀は口角を上げお嬢を安心させると彼女の刀の中へ入っていた。その瞬間、マスターのいなくなった今二人がいる世界に終わりが訪れた。石畳の床は崩壊し、空の至るところに亀裂が走る。

「やべえ、応龍！ どうするんだよ！」

「安心しろ、この世界が崩壊しても地獄に戻るだけだ」

「んなこと言ってもよ！」

応龍の言葉だけでは到底メタボの不安は拭えるものではなかった。得体の知れない恐怖が二人を襲う。

亜依奈達は広目天の書齋にいた。情報収集のため片っ端から書類をひっくり返し、エンマの目的を探っていた。

若頭とヤツシーは見張りをしている。広目天を倒したとはいえ、まだ彼の部下である獄卒たちが多数残っているのだ。

「これは…」

亜依奈は思わず声を漏らす。出てきたのは天国攻略成功の報告書だった。亜依奈は初めてエンマが天国にいることを知った。だとするとある人物の安否が気にかかった。

「ヤツシー、若頭！　話がある」

亜依奈の声に応じ二人が書齋の中に入る。

「何か分かったのか？」

「ああ…、とんでもないことがね」

亜依奈が二の句を告げようとしたとき、光が現れ、その中から白虎に乗った多聞天が現れた。

「なっ！？」

ヤツシーは驚愕し、若頭と亜依奈は直ぐ様武器を構えた。

「そう警戒するな。私は戦いに来ただけではない。エンマ様の伝言を伝えに来ただけだ」

多聞天は白虎から降りると腰に下げた刀を鞘ごと落とし、戦意がないことをアピールした。

「四天王最強の男が何のようだい？」

多聞天は亜依奈が持つ書類を見て口角を上げて小さく笑った。

「それを見たのなら話が早い。エンマ様は天国宮殿におられる。貴様らをそこで一掃するおつもりだ」

「いやに自信たっぷりだね…。けど、そんな見え見えの罠に突っ込んで行くと思うのかい？」

ヤツシーと若頭はもつともだと思ったが、多聞天は違う。こちらには亜依奈が絶対断れないカードがあるからだ。

「亜依奈…、冷たいな。気付いているんだろう？　あのお方がこちらにいることを」

「……」

あのお方？　ヤッシーと若頭には皆目見当つかないが、亜依奈の様子を見れば彼女にとつて大切な存在であることは分かった。

「用件は伝えた。来なければ…、分かっているな」

多聞天は勝手に言葉を浴びせると落とした刀を拾い、白虎に飛び乗った。

「…貴様らとの決着、楽しみにしているぞ」

多聞天を乗せた白虎は光に包まれ消えていった。

「今度の敵は四獣を使うのか、厄介だな」

「…今話すことはそんなことではあるまい」

「いや、分かっちゃいるんだけど…」

亜依奈は光が消えた虚空を見つめ微動だにしない。二人がどうするべきか考えていると、またも空間に亀裂が生まれ、そこから何者かが出てきた。二人は武器を構えたが、何者かが分かると直ぐにそれを解いた。

「お帰り、お嬢、メタボ」

「ああ、ただいま…」

「ふゝ、マジで帰ってこれたぜ」

お嬢とメタボは信じられないといった表情で周りを見渡した。しかし、亜依奈を見てそんなことに拘泥している場合ではないことに気がつかされた。

「亜依奈さん、どうしちまったんだよ？」

「実はな…」

「天国に行く！」

ヤッシーが経緯を話そうとしたとき、亜依奈はそれを遮るように宣言した。

「あのお方というのを助けに行くのか？」

「それもああるけど、私らの目的はエンマを倒すことだからね」

メタボとお嬢は戻ったばかりで何のことだかさっぱり分からないが、エンマが天国にいる。それだけで亜依奈に従うには十分過ぎる理由になった。

「メタボ、沙羅でもいい。霊亀を呼んでくれ」

四霊の存在意義をするメタボとお嬢はすぐ亜依奈の意図が掴めた。

「霊亀やったらうちやな。出でよ、霊亀！」

お嬢は抜刀し刀を掲げた。すると刀は光り、強烈な閃光と轟音と共に霊亀が現れた。

「いよいよ行くのかの」

「…事態は私が思ってたより随分早く進んでいた。畏だろつが何だろつが、進むよ」

皆も大きく頷いた。ここまで来て怖じ気づくような面子はこの中にいなかった。

「…その意気込みはよし。では行こう、天国へ！」

皆は霊亀に乗り、共に光に包まれた。

その先に見たものは地獄では何の縁のない、緑と暖かな光だった。地に降り立ち、土の感触、緑の香りを堪能する。ここが天国だとはつきり認識出来た。その先に見える人物に、メタボは驚きを隠せなかった。

「兄貴…？」

第三十話・合流

メタボは信じられない者を見た。それは自分の兄だった。彼は確かに天国に行ったので、ここにいってもおかしくはない。だが、こんな偶然があるものなのだろうか。

「どうしたんや、メタボ？」

「兄貴だ、兄貴がいたんだ！」

自分の兄が近くにいます。そうはつきり認識すると知らず知らずメタボは兄に向かって走っていた。

「あれは……」

太一の方もメタボに気がついた。地獄に落ちたはずの弟が自分に向かって駆けてくる。

「雅人！ どうしてここに！？」

「霊亀つてバカでけえ亀に乗ってきたんだ。兄貴はこんなところで何を……」

メタボは太一の周りにいる人物を見回した。妖精チャムを連れ、ブロンドのお姉さん（エレン）と茶髪のお姉さん（サレナ）に囲まれ両手に花を実現している。

「ハーレム真つ最中！？」

「再会して間もなく言うことがそれか！？」

太一にしてみれば久々に会った弟の突拍子のない言葉に驚くばかりだが、エレンはケラケラ笑い、サレナは赤面して困惑していた。

「面白い弟さんじゃない？」

「いえ、ただのアホですよ」

「誰がアホだコラ！」

「お前に決まってるだろ！」

今にも兄弟喧嘩が始まりそうな勢いなので、エレンとサレナが割って入った。

「まあまあ、それより弟くん。あなた霊亀がどうのって面白いこと

言ってたわね？」

「そのことについては私から説明させてもらおうよ」

エレンたちが振り向くと、いつの間にか側まで来ていた地獄組がいた。地獄の囚人に夜叉、エレンはただ脱獄した者達ではないことを直ぐに見抜いた。

「なるほど、ワケアリさんってわけね」

「お互いにね。自己紹介がてら、近況話していこうじゃないか」

皆は各々自己紹介し、近況を話した。地獄で持国天、広目天を撃破したこと、応龍、霊亀に協力を得られたこと。天国側は、エンマに天国を奪われてしまったこと、エリユシオンに避難していること、増長天を倒し別の占領地へ向かっている最中だったことなど。

「それでだ亜依奈さん。やっぱりあのお方について話すことはできないのか？」

皆の視線が亜依奈に集まる。彼女は観念したのか、視線を皆から外し、重い口を開いた。

「まあ、隠し通すもんでもないしね。…私はヤミ様の側近なんだ」

ヤミ、このワードに反応したのはエレンとサレナだった。

「ヤミ様って、天国皇女様の…」

亜依奈は頷いた。

「私はヤミ様の命で地獄にサグリを入れてたってわけさ。まあ、裏目に出てあんたらに迷惑かけたみたいだけどね」

「申し訳ないのはこっちの方よ。天国を守るのがヴァルキリー隊の使命なのにこの様だもの」

エレンとサレナが深々と頭を下げた。

「責任感じるのもいいけどさ、やらなきゃなんないことあるんじゃないの？」

謝り合戦になりそうなのでメタボが割って互いの謝罪を終わらせた。双方も納得し頭を切り替える。

「そうだね。天国宮殿にいるエンマを何とかしないと、ここでの謝罪なんざ意味がなくなるしね」

皆は作戦を立て始めた。

天国宮殿に乗り込むこと自体はそれほど難しいことではない。応龍と靈亀がいるし、エレンとサレナはワープ（ラダマンテユスの許可がある上、体力による制限付きだが）できる。

問題はその後だ。エンマ、多聞天の撃破、ヤミ、ヤマの救出が目的である。全員で固まってエンマ、多聞天の撃破に向かうとヤミとヤマを人質に取られ不利になる。

そこで、多聞天、エンマを撃破する部隊と、ヤミらを救出する部隊とに分けることにした。

「問題はどうか分けるかってことですね…」

サレナが頭を悩ますのも無理はない。多聞天とエンマが強いのは言うまでもなく、彼らの部下も相当強いことが予測される。ヤミ救出にしても当然看守はいるだろう。彼女らほどの重要人物なら看守にどんな強者を配置してもおかしくはない。

「救出班に人数は割けまい」

若頭の言う通り、出来れば目立たず救出し相手の有利な条件を潰しておく方が望ましい。

「それじゃ私が勝手に決めさせてもらおうかね」

「ああ」

「救出班は私、ヤッシー…」

「え、俺をご指名かい亜依奈さん？」

ヤッシーは不思議そうな顔をしたが、直ぐに合点がいった。きつと救出する折りに牢屋の鍵を開けさせる気なのだろう。

「ピッキングの腕を期待してるよ」

「ああ、任せてくれ」

「んじゃ、最後に…」

亜依奈は太一を指差した。太一とチャムは亜依奈の指先を見つめた。

「って僕!？」

太一は亜依奈に指名された事実気付仰天した。

「いや、坊やというより、そっちのフェアリーさね」

「私？」

チャムは選ばれた理由が分からなかったが、エレンは納得した。

「なるほど。歌の使い方次第じゃ、救出にはもってこいね」

チャムの歌で看守達を眠らせれば迅速にヤミとヤマを救出するこ
とが出来る。

「じゃあ僕はおまけですか…」

「まあ兄貴ヒモみてえだから仕方ねえよ！」

メタボは大笑いしながら太一の肩をバシバシ叩いた。こんな弟に
我慢出来るわけは当然なく、太一はメタボにつかみかかった。

「ちよ、太一くん！」

「メタボも無駄に挑発すんなっての！」

サレナは太一を、ヤツシーはメタボを取り押さえる。

「くそおつ！　ここぞとばかりに見せつけやがって！」

「落ち着けメタボ！　妬んでるようにしか見えないから！」

ヤツシーはメタボを太一から引き剥がすことに成功したが、まだ
飛びかかりそうなので離さないでいた。

決戦前とは思えないほど、穏やかな空気が流れていた。この兄弟
はこんな血生臭い世界にいるべきではない、そう思わせた。だがそ
れを口に出すのは憚られた。

今さらエリユシオンで休めと言っても聞くような者ではない。亜
依奈とエレンそれぞれがそう思えた。

「話の腰が折れてもうたけど…、エンマ撃破はうち、メタボ、若頭、

エレン、サレナやな」

「エンマを倒す、か…」

サレナが緊張の面持ちで頬に手を当てた。四天王の一人でしかな
い増長天に苦戦した自分に何が出来るか想像できないのだ。

「心配すんなって！　俺もお嬢も若頭も強いからよ！」

メタボはそう言って笑ってみせた。聞いた話でしかないが応龍に
認められ、持国天を倒した少年の笑みは心強かった。

「それじゃ、行くとしようかね」

「おう！」

亜依奈は玄武を呼び出し、メタボは応龍を呼び出した。

四霊はまさに世界を駆ける存在である。天国、地獄間はもちろん、現世にだって行けてしまう。それはタルタロスとて例外ではない。エンマは麒麟の力を使いタルタロスへ進入した。

「酷いところに幽閉されたものだね」

壁に直接打ち付けられた手枷と足枷に繋がれた持国天がエンマを見る。

「エンマ様……」

持国天は焦燥しており、声を絞り出すのがやっとだった。

「退屈な時間はお終いだよ」

エンマは刀で手枷と足枷をたたつ斬った。

「さて、広目天と増長天のところにも行ってやらないとね」

エンマは酷薄に笑うと次の牢に赴いた。

第三十一話・天国宮殿殴りこみ

メタボ達を乗せた応龍は天国宮殿の正門へ彼らを運んだ。巨大な龍の影は宮殿を守る鬼たちを混乱に陥れるには十分だった。

「さて、邪魔な門を取っ払っちゃいましょつか」

「頼むぜエレンさん」

エレンはランスを正門へ構え、矛先に光を集中させる。鬼達は門が開かれてから包囲するつもりなのか出てくる様子はない。

「どっか〜ん！」

エレンはランスの光を解き放ちそれは巨大な光の束となり正門を奥に群がる鬼ごと破壊した。

「道は開かれたな」

「さすがは隊長、強引ですね」

「サレナちゃん、それって誉め言葉かしら？」

何はともあれメタボ、若頭、お嬢、エレン、サレナは天国宮殿へと乗り込んだ。しかし直ぐに本館というわけではなく、正門からでは百メートルくらい距離があった。鬼達はエレンの一撃で全滅したのか姿はなかった。あるいは逃げ出したのかもしれない。

だが皆が足を止めてしまうほど、エレンが焦げ跡を付けたこの空間は不穏な空気を醸し出していた。

「妙やな…。さっきのがいくら強力や言うても、すんなり本館まで通すか？」

「本館に罫を張っている可能性がある」

「ここでごちゃごちゃ言っても始まらねえ。とにかく先に進むぜ」
メタボが一步進もうとしたとき、突如地震が起こった。地割れが誘発され、その亀裂から巨大な骸骨が現れた。

「がしゃどくろ…。また面倒なのが出てきてくれたわね」

「そっやな」

エレンとお嬢は武器を構える。だが若頭は二人の武器を下げさせて一歩前に出た。

「木偶の坊の相手は慣れている。ここは私に任せて先に行ってくれ」
若頭は背中にある大太刀を外し構えた。

「あらま、決めてくれるじゃない」

「んじゃ、頼んだぜ」

「お願いします」

メタボ、エレン、サレナはがしやどくろを無視し本館へ向かって走り出す。しかしお嬢は動こうとしない。

「…もう失うんは嫌やからな」

「私はお嬢の道の妨げになる物を切り捨てる。今も昔も、これからもだ」

がしやどくろの腕がメタボ達へと襲いかかる。すかさず若頭は大太刀を振りかざし腕を食い止めた。

「すまねえ！」

メタボは駆け抜けようとしたが若頭は呼び止めた。

「あの子を頼む」

「…俺には荷が重いね」

メタボはそう言いながらもお嬢が追いつくまでスピードを緩めお嬢を待った。

「すまんメタボ！　それから若頭！」

がしやどくろの腕を押し返す若頭にお嬢は去り際に言いつけた。

「それ切り捨てたら、次の妨げも切り捨ててや」

「…分かった」

メタボとお嬢は一気にスピードを上げエレンとサレナに追いつき、本館へと入っていった。

我ながら、死ぬ直前のようなやり取りだと若頭は笑った。しかし魂を失うことなくお嬢の前に帰らなくてはならない。

若頭は大太刀を握りしめてたった一人、自分の七倍はあろう怪物に挑んでいった。

本館に入るとそこは直ぐホールになっていて、玄関から正面に大きな階段、天井にはシャンデリアなど、パーティーや舞踏会が開かれそうな大きな空間になっていた。しかしメタボ達を迎えたのはその空間に存在するにはあまりに異質過ぎた。初対面なら疑問はここまでであったろう。そう、そこに存在する彼らとメタボ達は認識があつた。

「増長天……」

「それに持国天や広目天までいやがる……」

思わずメタボ達は個々の武器を握りしめ戦慄する。倒したはずの彼らが目の前に居ては無理はなかった。

「久しぶりだな、坊主」

「それにお嬢さんも元気そうですね」

「んだよ、ヴァルキリーはいるのにあいつはいねえのかよ」

倒したはずの四天王達は思い思いのことを口走り武器を構える。

メタボ達にはどうなっているかさっぱり分からない。しかし眼前に武器を構える彼らがいる以上、こちらでも対峙する必要があつた。それにエレンに取っては好機でもある。

「やっぱり自分の手でケリつけたかったのよね。会いたかったわ、増長天」

「んじゃ、うちは組のものの仇討ちさせてもらうとするわ」

お嬢は刀の切っ先を持国天に向け睨み付ける。サレナは残った広目天にジャベリンを構える。

「あれ、んじゃ俺は？」

「てめえは多聞天直々にぶつつぶしてもらえよ！」

メタボの疑問は持国天が答え、四天王達は道を作った。一人くらい通しても構わないと思っっているのだろうか。

「いいのか？ 多聞天倒しちゃうかもしんないぜ」

「いくら貴様が強力でも、多聞天には勝てんさ。信じられんような

「先へ進むといい」

「もちろん」

「メタボ…」

お嬢が不安そうな顔でメタボを見る。彼も大事な地獄組の構成員であり、仲間なのだ。メタボは不安をかき消すような笑顔で金棒を掲げた。

「こいつで多聞天どころかエンマの首も叩き潰してやるよ」

メタボはそれだけ言って四天王達の横を通りすぎ、先にある扉の中へ入っていった。

「アホやな…。格好つけたつもりでも、あんなツラやったらしまらへんな」

お嬢は平生を保つため悪態をつき、敵を見つめた。

「メタボが心配や。早めにカタ付けるで」

「りょーかい」

「ええ」

お嬢、エレン、サレナの三人は自分が定めた相手に武器を構えなおした。持国天たちも武器を構え不敵に笑う。

「ほざけ、四天王三人相手に勝てると思うなよ！」

メタボが入ったのは長い廊下だった。道幅はトラック二台並列走行しても大丈夫そうで、高さもメタボの七倍はあろうかという、廊下にしては異常に大きな空間だった。柱の一つ一つに明かりを灯すための蠟燭、大きなステンドグラス。そこに描かれるのは天使と鬼の戦い。造りはまさしく西洋の宮殿で、奥にはその空間を拒絶するように最強の鬼が佇んでいた。

「…ここに描かれているのは、世界創造の伝説だ。この戦いで負けた鬼たちが暗い地獄を管理させられ始めたそうだ」

メタボはステンドグラスの絵に注目する。確かに天使にやられている鬼が多く描かれていた。

「許せないのだよ。天国でのうのうと暮らす天使が鬼より勝っているなど」

コツ、コツ、と足音を立てて多聞天はメタボにゆっくり近付いていく。

「故に私は証明したいのだ。鬼は天使より勝っている。その証拠として天国は鬼たちで管理する必要があるのだよ」

御大層に語る多聞天をメタボは鼻で笑った。メタボにとって、そんなことはどうでもいいのだ。

「地獄すらまともに管理出来てねえくせにほざいてんじゃねえよ」

多聞天はメタボの言い分を否定することなく受け止め、武器を構えた。白虎の印が刻まれた刀である。

「そうだな。貴様らを地獄に叩き戻すことで、そのミスは帳消しにさせてもらおう」

「その御大層な言葉使い、うざってえよ。さっさと倒してエンマの首もらうに行くぜ！」

メタボも武器を構えた。そしてどちらからともなく、二人は激突した。

第三十二話・がしゃどくろ

恨みを残し野垂れ死んだ人々の骸骨が集まった妖怪。それががしゃどくろである。大きさは若頭の七倍はあり、正面に立つと後ろの天国宮殿が見えなくなるほどであった。そんな巨体な怪物に若頭は大太刀一本で立ち向かうことを余儀なくされていた。だがそれは彼自身が望んだ展開であった。

この大き過ぎる太刀は、背丈が約二メートルある鬼でも立ち回りに難儀する代物で、特に四天王クラスの強者になると不利にすらなるものだった。しかしがしゃどくろや、前に戦った大百足相手では話は違う。このような大きな妖怪を相手にする時こそこの太刀は竜の雲を得るが如し活躍をしてくれる。

「私向きの相手だ…」

若頭は大太刀を強く握りがしゃどくろの足元へ駆ける。近づくと多くの骸骨が集まって形作られていることがよく分かって気色が悪い。それでも若頭は果敢に大太刀を振り回す。

骨を切る味わったことのない感覚が若頭に伝わる。流石に硬く、手が痺れる。それでも斬ることは出来た。だがそれにしてはがしゃどくろの様子に変化はない。

怪しく思った若頭は一度距離を取ることにした。

「なっ…」

切断されたはずのがしゃどくろの足が繋がっていった。がしゃどくろは骸骨と悔恨の集合体。ゆえに一部を斬ったところで直ぐに接合しダメージを与えられないのだ。エレンならばビームをぶつけて一撃で始末出来るが生憎若頭にそんな能力はない。

「どうしたものか…」

若頭は思わず呟いた。何とか打開策を出したいところだが、思考する時間を消すようにがしゃどくろは大きな手を若頭に伸ばしてきた。咄嗟に横に飛び若頭は捕まるのを回避した。捕まったが最後取

り込まれてしまうかもしれない。

またもがしゃどくろが腕を伸ばしてくる。若頭は今度は避けようとはせず距離を少し詰め、がしゃどくろの手首を斬った。若頭の後ろにがしゃどくろの右手が落ちる。あと左手を落とせば捕まることはないはずだ。しかし、若頭の考えは甘かった。

がしゃどくろの右手が崩れ細かい骨となり、若頭を背後から襲う。
「ぐっ……」

次々と骨がぶつかっていき、若頭は片膝をつく。骨はぶつかった後、がしゃどくろの右手を形成していった。完全に切断したはずだったが、それでもがしゃどくろの接合能力の前では無力だった。

つまり若頭が勝つには接合能力の源を断たねばならない。どこかに核となる部分があればそれを断ち切れればいい。しかし核がなかったとしたら、彼に勝ち目はない。

(そうだとしても……)

若頭は立ち上がり大太刀を構えた。

(私はお嬢の障害は全て断ち切らねばならんだ！)

がしゃどくろは組み上げた右手で若頭に掴みかかってくる。避けようとはせず若頭は手の甲に飛び乗り腕をかけ登った。

「うおおっ!!!」

そして頭蓋骨目掛けて大太刀を振り下ろす。しかし頭蓋骨は特別硬く少し削るのが精一杯だった。

「くそ……」

がしゃどくろの左手が若頭を襲う。直ぐ様頭蓋骨から飛び降り若頭は難を逃れた。

「頭に狙いを定めたのは良かったのですがね」
「っ!?!」

若頭は聞き覚えのある声に驚き回りを見渡す。しかし自分以外にがしゃどくろしかいない。だががしゃどくろという妖怪の特性を思い出せば、この事態は不自然なものではなかった。恨みを抱き野垂れ死んだ者共の集まり。それが今若頭が相手をしているものである。

顔を上げがしゃどくろの額を見る。そこにはかつて若頭が倒した鍾馗がいた。いや、正確にはがしゃどくろの額に鍾馗の頭が埋まって出てきていた。

「その怨念、利用されたか」

「忠義と言ってもらいたいですねえ。がしゃどくろに取り込まれて自我を保って

いられるなんて、そうあることじゃないですよ」

「知るか」

悪態をつくが前回の戦いと違い若頭にとって条件が悪すぎる。だが鍾馗の言葉から弱点が頭だと分かった。あとはいかにして頭蓋骨を攻撃するかである。

「おっと、精神論で攻略出来るほどがしゃどくろは容易ではありませんよ。私の刀でも傷つかないようですからね」

若頭は握る大太刀を見る。これは元々鍾馗のものである。ゆえにこの刀の切れ味、威力は熟知しているだろう。

それでも若頭は諦めるわけにはいかない。

「何ですかその目は？　まるでまだ戦意があるように見えますが？」

若頭は不敵に笑った。この程度の脅威は何でもないかのように。

この笑みは鍾馗にとってあの敗戦を彷彿させるものだった。

「相変わらずムカつくやつですね…。しかし今回はそれも虚しいですよ？」

「そうか…。しかし俺はお嬢のため斬るだけだ。例外なくな」

「お嬢…？　ああ、見逃したお嬢さん方の一人ですか？」

若頭は黙って頷く。

「これはこれは。では魂の保証はできませんよ？　何せあの扉の

向こうには我が主がおられるのですからね」

鍾馗の言う主とは持国天のことだろう。若頭に詳しいことは分からないが、亜依奈の話を聞く限りエンマが有する麒麟と鳳凰なら造作もないことなだろう。

だが、お嬢はそんなものに負けはしない。

「残念だが、貴様の主とやらは返り討ちだろうな」

「何？」

「お嬢はエンマを倒す。たかが四天王にやられはしない」

鍾馗は改めて自分の目の前にいる人物を認識した。こいつと自分は、ただ陣営が違うだけで同じ立場の戦士だと。だからこそぶつかり合う宿命にある。

「私の主は、そしてエンマ様はたかが人間風情に負けはしませんよ」

「…これ以上は水掛け論だな」

「そうですね」

二人はこれ以上語らず、片方は拳を固く握り、片方は大太刀を強く握った。現状では万に一つも若頭が勝つ見込みがない。それでも若頭は勝つことだけを信じて駆けていく。

大太刀が拳を斬り裂き、若頭は腕をかけ登った。

「また同じ手を！ 無駄だと分からないんですか!？」

鍾馗はまた頭蓋骨を狙うと思い、左手で若頭を払うことをしなかった。無駄なことだと悟らせようとしたのだ。その甘さが命取りとなった。

「はあっ!!!」

若頭が狙ったのは頭ではなく、首だった。頭蓋骨ほどの強度もなく、簡単に頭と身体は切り離された。二撃目で頭蓋骨を攻撃し、大太刀を食い込ませる。

「うおおおおおおおおおおおっ!!!」

若頭は咆哮と共に鎖骨を蹴り、自分の全体量を大太刀に託した。

頭蓋骨は地獄の重力に捕まり落ちていく。地面に衝突すると、頭蓋骨はひび割れていき粉々に砕け散った。

「全ての亡者は力によって制御されねばなりません…。それが出来るのは持国天様や、エンマ様のみです…。人間風情がしゃしゃり出る場ではないのです…」

やはり頭蓋骨が核だったのか、鍾馗の言葉は弱々しく若頭に届い

た。

「悪いが、亡者はそんなものに付き合う時間はない。早く輪廻転生せねばならんからな」

若頭の言葉を聞く者はおらず、がしゃどくろの消滅を確認すると若頭は扉の方へ歩いて行った。

第三十三話・蘇った強敵

持国天は地獄組をほぼ壊滅状態に追い詰め、増長天は天国のほとんどもを占領し、広目天は亜依奈を庇ったためとはいえ忍者を倒している。そんな強敵がお嬢、エレン、サレナの前に立ち塞がっていた。特にお嬢とエレンには因縁がある。お嬢は地獄組の仇を取るため、エレンは二度の雪辱を晴らすため。

「亜依奈がいないようですね…」

広目天はこの重大な場面で亜依奈がいないのを訝しんだ。

「この場にいなえ奴なんざどーでもいいだろ。俺たちや目の前の敵潰すだけ何だからよお」

「増長天の言う通りだな。エンマ様のご命令通りにしていればいい」
「それもそうですね」

彼らは武器を構えそれぞれの敵を見据えた。増長天にとっては二度も勝った相手、広目天は明らかな格下。この二人は負ける気がしないのか余裕綽々といった表情だった。しかし持国天はお嬢を警戒していた。ヤマタノオロチを二人がかりとはいえ倒し、広目天をも倒した相手だ。それに何か神々しいものを感じる。だが持国天は懸念を振り払いお嬢へと駆ける。それを皮切りに広目天、増長天も襲いかかりにいった。

「来るで！ 氣い抜くなや！」

「当然よん！ 今度こそ…！」

「行きます！」

サレナは広目天の戟げきがリーチに届く前にジャベリンを投げ牽制した。足下の防ぎにくいところを狙ったつもりだったが、彼は器用にジャベリンを払った。だが足を止めることと、戟の矛先を変えることには成功し、一気に間合いを詰めジャベリンを右膝に突き刺す。
「ち、やってくれるじゃないですか！」

広目天は戟を振り回す。普通の槍なら峰打ちのような効果しかな

いが、戟の鋒は十字になっているので殺傷力がある。サレナは距離を取るしかなかった。広目天はジャベリンを引き抜き距離を詰める。一振り、二振り、十字の槍がサレナを襲う。何とか避けてはいるが、どれもがギリギリでいくつかがサレナの頬を掠めた。そこから一筋の血が流れる。

サレナは何としてでも攻撃に転じたいと思い、振り上げて戟の切っ先が上を向いた瞬間を狙いジャベリンを突き刺そうとした。

「読めますね」

広目天はバックステップで距離を取るとジャベリンを避けた。ジャベリンは投げ槍なので普通の槍より小さく出来ている。少し距離を取るだけで簡単に避けられるのだ。そうは言っても、死角を突いて攻撃したはずだったのでサレナは納得が出来なかった。

「そいつには目が三つあるんや！ 死角突こうなんか考えたあかん！」

お嬢が叫ぶとサレナは頷いてジャベリンを二本両手で持つ。死角を突けないなら手数を増やして攻めようと考えたのだ。

「それでもジャベリンは突くものでしょう」

「そうかしら？」

突きの一辺倒だったジャベリンの動きが変わる。広目天第三の目、千里眼はそれを見逃さなかったが、身体が付いてこれなかった。

「つつ！？」

ジャベリンが広目天の頬を掠め、同じような傷をつくる。

「棒術の心得もありましたか…。中々芸達者な方ですね」

「けっ！ そんな雑魚に情けねえなあ！」

増長天は不甲斐ない広目天を尻目に鎖付き金棒を振り回す。

「あら、私の大事な仲間を雑魚呼ばわりしないでくれないかしら！」

エレンは鎖の先に付いた金棒を避けるとランスからビームを出す。増長天は舌打ちをし回避行動に出た。

だが、

「そうは問屋が卸さないってね」

エレンは鎖を掴み増長天を引っ張った。

「ぐわっ！」

そしてビームが彼の左肩を貫いた。痛がる増長天を見てエレンは確信した。太一との戦いのあと、彼が痛みを知ったことを。

「ざけたマネしやがってえ！！」

傷作られたことがよっぽど気に入らないのか、増長天は激昂し乱暴に金棒を振るう。

「ふん！」

ビームで金棒を撃ち落とし、一気に間合いを詰めランスを突き刺そうと突進する。

「させつかよおっ！」

増長天は金棒の柄を放棄しランスを受け止めにかかった。

「ぐわっ！！」

ランスの鋒は増長天の胸寸前で止まり、彼を貫くことはなかった。「足震えてるけど？」

「黙れよお……」

「貴方は太一君に負けて分かったんでしょ？」

「黙れえ……」

「痛みを、負けた屈辱を……」

「黙れっつてんだよおおお！！！！」

増長天は掴んだままだったランスをねじ曲げた。

「えっ！？」

エレンは思わずたじろぐ。こんなことあるはずがない。これにより心理的な優劣が逆転した。

「確かに俺は負けた……。だがよお、俺は、四天王なんだよ！」

増長天は固く右拳を握りしめエレンに殴りかかった。仕方なくエレンはランスを放棄し宙を舞い逃げる。増長天はランスを踏みつけ使えないようにした。

「これで肉弾戦のみだなあ。こんなもん、やるまでもなく俺が勝つ

だろ！」

増長天は跳び上がりエレンを叩き落とそうとする。

エレンもこのままでは埒があかないと思い、拳を握りしめ増長天と対峙することを決意した。

「増長天や広目天を互角で戦えるとは…」

「余所見する間あ、あらへんよ！」

お嬢の刀が持国天の金棒を捉える。

「分かっているさ。そんなに甘くない相手だつてことくらいな！」

持国天の金棒を握る手に力が入る。この二十にもならない女子を強敵と認めねばならない。屈辱だった。しかし持国天にはそれを認め立ち向かう器量がある。

「でああっ！！！」

金棒と刀がいくらぶつかり合っても、刀が刃こぼれすることがない。持国天はそれが刀の能力だとすぐに気がついたが、その速さが異常だった。

「その刀をそこまで使いこなすとは…」

いつまでも鋭利なその刀は、日本刀としては間違いなく最高の一品だった。よく斬れるが、代わりに打たれ弱いという弱点を見事に克服している。

（だが、刀の強度以上の力をぶつけてやれば！）

いくら回復するといっても、刀身を一気に折る程の力をもってすれば破壊することはできるはずである。

そう思い金棒を振るい、激しい打ち合いを演じるが刀が折れる気配はない。

（こいつ…、全部受け流して負荷を最小限に止めている？）

持国天は信じ難いと思ったが、それしか考えられなかった。

「やっぱ、スゴいなお前。ここまでやるとは思わなかった」

「ウチに言わせれば幻滅やな」

広目天はサレナと互角、増長天は武器を失い肉弾戦、持国天は圧

され気味と散々な戦績である。

(四天王が聞いて呆れるな、だがこれでいい…)

「はあっ！」

「ぐっ…！」

サレナのジャベリンが広目天の腹部に突き刺さる。血が流れ投げ槍を伝ってサレナの手が赤く染まる。

「見事です…！」

広目天は仰向けに倒れていった。

「うおおおおお！！！！」

「はあああああ！！！！」

増長天とエレンの拳が交わろうとする。その直前エレンは身体をずらし増長天の拳を外させ、タックルに近いかたちで彼女は増長天の鼻っ柱に拳を叩きつけた。

「がっ！？」

彼は頭から落ちるように倒れた。

「もう終いにして、メタボ助けにいかなな」

「舐めるなよ…」

持国天がお嬢に金棒を振り卸す。彼女はサイドステップでそれを避け、彼の両腕を斬り落とした。

さらに胸から腰にかけてもう一太刀入れ、持国天を倒した。

「…なんや呆気なかったな」

忍者との修行を経て自分が強くなったと思っているし自負もある。エレンもサレナも強いと思う。だがあまりにもあっさりし過ぎている気がしてならない。

「痛たた…、いい切れ味だな」

「っ！？」

持国天は斬られた傷を擦りながら立ち上がった。お嬢が驚愕の色を隠せない様子を見ると、持国天は一笑して答えた。

「何をそんなに驚いてるんだ？　俺達も同じ死人なんだ。だから死なないのも当たり前だろ？」

「まさかそれを思い知らせるために…！」

広目天、それに増長天も立ち上がった。

「その通りです」

「俺達がそう簡単にやられるかってんだ」

広目天は戟を構え、増長天は拳を握り身構える。

「つまり俺達に負けはない」

持国天の言葉がお嬢ら三人に突き刺さる。普通に戦っていても苦戦する相手が死なない。相手のようにこちらは魂を潰す武器はない。それは彼らが諦めるまで先に進めないことを意味していた。

今、エンマを倒すチャンスがあるのは、メタボと救出組に絞られてしまった。

第三十四話・潜入

太一、チャム、ヤッシー、亜依奈の四人は玄武の力により天国宮殿の一室にいた。亜依奈はヤミの側近なので土地勘に明るい。しかしいきなり鉄格子の前に出ることはなかった。

立派な洋館の通路で、小部屋が沢山並んでいた。

「どうして牢の前に出ないんだ？」

「天国宮殿に牢屋なんてないさ。それに転移した瞬間串刺しにされたくないだろ？」

「玄武があるのを知っているなら当然手は打ってあるってことですよね」

ようは天国奪還時と同じ理由である。太一もこれを経験していないければ同じ疑問を抱いただろう。

「ですけど、あまり距離があると…」

「ああ、分かっているよ。ソルジャーソングには時間制限があるんだろ？　大丈夫、そんなに距離はないさ」

亜依奈は不安を払拭するように笑った。彼女はもう仮面を付けていない。それはヤミの側近だったことを話したことで自分を偽る必要がなくなったという、彼女なりの表れだった。

「サレナに言っちゃおっかな」

「な、何を!？」

「見とれちゃってたじゃん？」

「な、バカ!」

太一は自分の顔を触る。顔が赤くなっていないか、体温の上昇で判断しようとしたのだ。

「どうかしたのかい？」

「何でもありません！　早く行きましょう」

太一は歩く速さを上げ先に進む。亜依奈は小首を傾げ、ヤッシーはメンバーが入れ替わるだけでこும்雰囲気が変わるものかと、感

慨深げに見つめていた。

(地獄組じゃ絶対こんな甘酸っぱいイベントないからなあ)

「いいかい、この通路の向こうの区画から、鍵の付いた個室が並んでる。牢屋代わりに使うなら、たぶんそこだ」

「たぶんってことは何処に幽閉されてるか分からないのか？」

「そうだよ。期待してるよ、ヤッシー」

にこやかに肩に手をおく亜依奈とは裏腹に、ヤッシーは脱力していた。今歩いている区画だけでも、部屋は一定間隔でずっとある。

鍵のある部屋の区画も同じ作りだしたら、ヤッシーの作業量は大変な数になる。だが泣き言は言ってはもらえない。

「俺が陽の目を見る珍しい機会だ。頑張らしてもらいますよ」

「その意気だよ」

暫く道なりに進んでいくと、区画を区切る大きな扉の前に出た。

「ここから先が鍵付き部屋だよ。太一、チャム、ヤッシーの邪魔させんじゃないよ」

「分かってますよ」

「頑張つてね、ヤッシー」

「おう」

亜依奈が扉に手をかける。

「開けるよ。太一、武器を構えときな」

「はい…！」

太一の固唾を飲む音が聞こえる。扉を開けた瞬間、鬼の集団が待ち構えていてもおかしくない。

ギイ…

扉が開かれた。が、そこに鬼が待ち構えているわけではなく、静寂していた。

「バカな…、まさか本当に気付いてないなんてことは…」

「何にせよ、作業に取りかかるしかないか」

「そうだね…。私らで警戒する」

「頼むよ」

ヤッシーは手近な扉に近付き、ごそごそと針金を突っ込んだ。五秒と待たずに錠が外れる音が聞こえる。

「相変わらずいい手際だね」

「おかげで地獄に落ちたようなもんだけどな」

ドアノブを回しヤッシーはドスを構え警戒しながら部屋に入る。

「どうやら、誰もいないだな」

ベッドに引き出しにテーブルと、ただの個室のような作りだった。そこに生活感はなく、長らく使われていないようだった。

「なぐんかさつきから拍子抜けだね」

「こら、チャム！　ちゃんと警戒しなきゃ！」

だが確かにチャムの言う通り、あつさりと進み過ぎている。何処かの部屋に罠が仕掛けられているのは明白だろう。

「あまり時間かけてらんないし、次行くよ」

ヤッシーは次々とピッキングしていき、太一達はずっと周りを警戒し続けた。しかし一向にヤミとヤマが捕らえられている牢や、監守の一人も出会いはしなかった。

「亜依奈さん、場所間違えたなんてことは？」

「んー、私の知る限りじゃここくらいしか牢屋に使えそうな場所ないんだけどね」

「エンマが改築したとか？」

「いくら何でもそこまでやる時間なんか…」

太一や亜依奈が首を捻る中、ヤッシーは錠の異変に気が付いた。

「…ここ、他と作りが違う」

「ホントかい？」

「ああ、待つてな。すぐに…」

ガチャッと錠が開く音がした。ヤッシーはドスを構えゆっくり扉を開く。

そのはずだったが急に扉が強く開かれた。

「うわっ！」

ヤッシーが部屋の中に引き摺り込まれていく。亜依奈達も直ぐ部屋の中に入った。他の部屋と比べると大きく作られた部屋だった。その先に女の髪に絡まれ宙吊りにされているヤッシーがいた。

「ヤッシーっ！」

視線を下ろしヤッシーを捕らえている女を見る。清楚な着物姿に地面につくくらい長い髪の女だった。この異様な場面に出会わなければ、妖艶さに当てられ、綺麗だと思っていたかもしれない。

だがその妖艶さは危険な雰囲気を感じこちらに牙を向いていた。

「行け！ チャクラムっ！」

太一はチャクラムを投げヤッシーを女の髪ごと切り落とした。

「痛っ！ ありがたいが、乱暴だな……」

ヤッシーは髪の毛を振り払い亜依奈達の方へ下がった。

「いきなり女の髪を切るなんて……随分ぶしつけな人ね」

「襲ってきたのはそっちだろうがっ！」

ヤッシーは女にツッコムが足が震えていた。おまけに倦怠感のよくな感覚まである。

「うーん、髪に巻かれる時間が短かったかしら。まだ立っていられるなんて」

「ち、この倦怠感……。お前の仕業かよ……」

ヤッシーの言葉の威勢はいいが、身体を蝕む倦怠感をどうすることもできず、声が弱くなる。

「この男がいなければ、ヤミとヤマを助けることが出来ないのではありませんっ？」

「けどこの部屋の先に捕まっているのが分かっただけでもいいさ。

そうだと、清姫？」

亜依奈は清姫と呼ばれたその女の後ろの扉を指差した。彼女は思わず表情を強張らす。

「貴方達、知ってて来たんじゃない……？」

「いや、しらみ潰し」

両者の空間を沈黙が包む。清姫は堪えきれなくなつて、大笑いしだした。

「全く、いい道化だわ。でも、貴方達倒したら帳消しよね」

清姫の目付きが変わる。そして髪の毛が伸び始め、わらわらと動き出した。

「太一、チャム」

「分かつてます。こういう時のための僕達ですからね」

太一はチャクラムを構え、清姫を睨み付ける。だが彼女は太一だけでなくこの場にいる全てを相手にするつもりだ。

「誰も通しはしないわ。ここで存在ごと消してあげる」

清姫の髪が亜依奈達を襲う。

しかし

ズバッ！

四方へと伸びた髪が全て切断された。太一がチャクラムを投げたのである。それが彼の手元に戻ってくる。

「あらあら…、こつ何回も髪切られちゃ、女としては黙っておけないわね」

「じゃあどうする？」

「けど、あなたの思惑に乗る私じゃない！」

数十の束に分かれた髪がまた亜依奈や太一を襲う。これには亜依奈とヤツシーも武器を構えた。

「仕方ない、チャム！」

「はいはい！　歌います。ソルジャー・ララバイ！」

髪が皆に絡まる寸前、チャムの歌が流れた。これによって髪は項垂れていき、清姫は片膝をつき脱力していった。

「ち、フェアリー族ねえ…。でもこの痺れ具合…」

なぜか恍惚を浮かべながら清姫は倒れ込んだ。

「今のうちに！」

亜依奈が叫びヤツシーの手を引く。自分たちがいる反対側の扉へ

と駆け抜けた。

「そいつ始末したら直ぐ来るんだよ！」

「ええ！　直ぐ追い付きます！」

亜依奈とヤツシーは扉の奥へ消えていった。

「直ぐ追いかけなきゃならないのは私の方よ…。ソッコーでお仕置きして行かなきゃね…」

「嘘…、もう効果がなくなってる!？」

チャムが驚くのも無理はない。普通なら三時間は痺れているはずだが、清姫はものの数分で回復したのだから。

「さて、楽しい楽しいお仕置きタ　イムよ」

清姫は楽しそうに、しかし射るような眼差しを太一に向けた。

第三十五話・再会

清姫伝説という昔話がある。それはある僧に恋い焦がれた少女の物語だ。彼女の家はいわゆる庄屋であり、顔立ちのよい僧が宿を求めて立ち寄ってきた。この時清姫はこの僧に一目惚れし、僧は自分が仏に仕える身であることを理由に彼女の好意を断り続けた。

僧は彼女の家から逃げ出し、そのことで彼女は怒り彼を追った。僧は道成寺の鐘の中に身を隠すが、清姫は怒りに燃える情念から蛇の妖怪と化し、口から火を吐き僧を鐘ごと焼いてしまった。

細部に違いはあるかもしれないが、これが清姫伝説のあらすじだ。

今太一の眼前にるのがこの清姫とは限らないが、同等の力を持つているだろう。太一は大学で民族学を専攻していたので、たまたまこの伝説を知っていた。

髪が伸びる能力や精気吸収能力など他の妖怪の能力が備わっているが、清姫という名前といい、しつこさといい、伝説と合致する部分はある。

「さあて、どうぶち殺してあげようかしら」

清姫の瞳が妖しく光る。もちろん実際に光ったわけじゃないが、そんな鋭さを持っていた。

「悪いけど抵抗はさせてもらおうよ！」

太一は片方のチャクラムを投げ距離を詰め始めた。この武器ならではの常套手段といえる。しかしいくら増長天を倒した太一といっても、相性の悪さがあった。

「バカね」

清姫の髪がチャクラムを叩き落とす。

「くっ！」

事前にかけてもらったソルジャーソングで身体能力は大幅に上がっている。よって清姫から伸びる髪を器用な避け、片方のチャクラ

ムを太一は回収した。

「これで貴方の武器が通用しないって分かったかしら？」

清姫の言う通り、状況は最悪だった。後々のことを考えると、チャムに歌わせるわけにはいかない。切り札を使えるのはあと三回。出来ればチャムの力を借りず清姫を倒したい。

「くそっ！」

太一は走り出した。清姫はすかさず髪を四方八方に伸ばし太一を襲う。それを太一は全てチャクラムで斬っていく。

「なっ、ちよつとあり得ないでしょ！」

清姫が驚愕するのは無理はない。ほぼ全方位のオールレンジ攻撃を、太一は僅かなタイムラグを見定め、斬っていったのだ。ソルジヤーソングの恩恵か、はたまた太一自身の能力が上がったのか、定かではない。

「調子に乗らない！」

「っ!？」

清姫は火を吐き、太一はバックステップで一気に距離をあげ、炎を避けた。今まで伝説の特徴を出していなかったが、やはり清姫伝説の妖怪と類するものなのだろう。

残念ながらこの伝説に清姫撃退法は載っていない。太一は伝説以上のことをやることを求められた。

迫りくる力を奪う髪の手、それをくぐり抜けても紅蓮の炎が待っている。

こちらの武器はチャクラムのみ。首を落とすのが手っ取り早い。それを出来れば苦労はない。いかにしてチャクラムを清姫の首まで届けるかが勝利の条件となる。

いや、太一は一つ大き過ぎるカードに隠れた存在を忘れていた。彼は自分の最高のパートナーに目配せする。

「さあて、これで分かったでしょう。いくら貴方が飛び抜けた身体

能力を持っていたとしても、無駄だったことが」

清姫は余裕の表情で太一を見下す。彼を挑発するように、髪の毛がぐねぐねと動く。しかし太一はそんなもので惑わされはしない。

「ははは…、確かに近づくことも、遠くからこいつを当てることも叶いはしない。それでも、僕は諦めない！」

太一は清姫を回り込むように駆け出した。火炎の範囲外から切り刻むのだろうと清姫は考えた。

「甘いのよ！」

清姫は髪の毛を向かわせる。火炎に範囲の制限はあっても、髪に制限はないのだ。

「ふんっ！」

太一はチャクラムを投げ髪の毛を落とす。だがそれは太一の手元に帰ってこない。

「残念だったわね！　もっと武器は大切にしなきゃね！」

少し髪の毛を斬り落としたといっても、清姫の攻撃は緩まない。むしろチャクラムが一つになったことを良いことに、一気に仕止めてしまおうという腹積もりだろう。

ソルジャーソングの恩恵があるといっても、チャクラム一つという状況では厳しい。奮闘虚しく太一は髪に捕まってしまった。

「所詮坊やの浅知恵だったみたいねえ…。このままじわじわ体力を奪っていくか、炎で焼き殺されたいかどっちがいい？」

「忘れたのか？　僕は死人なんだぞ。焼き殺されるわけないじゃないか」

そう、当然だが死人は死んでいる。よって死ぬわけがない。故に清姫の勝利条件は魂を消すことである。

「あら、そうだったわね…。なら、徐々に私の髪にご馳走しようかしら。魂を食べるなんてホント久々だわ」

「なっ！？」

確かに対死人用の武器を清姫が持っていないのは、よくよく考えれば不自然なことだった。しかし最初からそこに疑問を持っていた

としても、太一は清姫の髪の特性に気がつかなかっただろう。

太一の精力が奪われていく。

「う…、けど大変なことを忘れてるよ」

「何ですって？」

それが清姫最後の言葉となった。彼女の首が、冷たい石造りの床に落ちた。太一を捕らえていた髪がほどかれる。

清姫の傷痕には刃物で斬った鋭い切り口がある。その傷をつけたのはチャムだ。

太一は自棄を起こして一つのチャクラムを投げたわけではない。チャムを信頼してこそその行動なのだ。彼女はチャクラムの輪の中に入り、猛スピードで刃を清姫首筋にかつ斬らせた。

（本当はチャクラムで助けてもらって、隙について倒すつもりだったけど、倒せたならそれに越したことないか）

「チャム、よくやった」

「あはは…、ちょっと怖かったかも。それよりヤッシー達に追いつかなきゃ」

「そうだな、急ごう」

清姫の亡骸と髪が乱れる部屋を後にし、太一とチャムはヤッシーと亜依奈を追った。

「亜依奈さん、開けるぜ…」

「ああ、早いとこやっつくれ」

他の部屋の扉より重く、ギイ、と嫌な音を立ててそれは開かれた。二人の目線の先には鉄格子の向こうにいるヤミに集中した。

「遅くなって申し訳ありません。亜依奈、ただ今戻って参りました」

「ああ、亜依奈…」

主と部下が再会した瞬間だった。しかし懐かしんでいる場合ではない。こうしている間にも皆は戦っているのだ。

「ヤミさん、でしたね。今開けます」

遠慮がちにヤッシーは鉄格子に近づき鍵を開けた。

「ありがとう。あの、出来れば…」

「分かってます。もう一人でしょ？」

「ええ、頼みます」

ヤマはヤミの隣の部屋に囚われていた。

「ヤミ！ 亜依奈か、よくやってくれた！」

部屋の奥で繋がれているヤマが叫ぶ。筋骨隆々の巨漢だが、今は衰弱し叫び声も掠れていた。

「ヤマ様！ 今助けます！ ヤッシー殿、お願いします！」

「分かりました」

ヤッシーは鉄格子にかかる鍵を開け、扉を開いた。しかしまだヤマの手足を縛る拘束具を外さねばならない。

「待って下さい、今外します！」

「すまん…」

ヤッシーは急いで拘束具を外しにかかる。彼曰く手錠と似たような構造だったので、彼が持つ一番細い針金で開けることが出来た。

「これで最後だ」

「ありがとう、助かったわい」

久々に解放された手足を振り、ヤマは身体をならした。

「ああ、ヤマ様…」

ヤミはヤマの胸に飛び込んだ。彼は優しく彼女を抱きしめる。

「皆さん、こんなところにいたんですか」

そう言っつて部屋に入ってきたのは太一とチャムだった。

新たな来客の方へ向きなおるため、二人の抱擁は終わった。そして、太一を見たヤミは驚愕した。

「まさか、あなたは…」

太一を初め、亜依奈までもが首を傾げるが、ヤマは気まずそうに目を背けた。

第三十六話・多聞天

多聞天とメタボは互いに武器を交えたあと、力が拮抗していると分かる。一旦二人は距離を取った。ここで力比べをしても体力の無駄遣いだからだ。

「なんてことだ……。四天王最強である私と互角とは」

「はっ！　俺はエンマを倒す男だぜ？　四天王なんか遅れを取るかよ！」

「勘違いするな」

調子づくメタボを萎縮させるように多聞天の言葉が突き刺さる。

雰囲気が変わった。四天王最強の称号に恥じぬ覇気が見受けられた。「本気を出すのはこれからだ。いや、何分全力を出す機会などなかったのだな。自分でもどこからが本気が窺い知れぬ」

多聞天の動きは格段に変わった。つい先程力を拮抗させていたのが嘘のようにメタボを圧倒する。多聞天の斬撃はくらくまいとメタボは刀の切っ先に注意を向け。しかしその隙を突かれ、多聞天に蹴りを入れられてしまった。

「があっ！！！」

彼の蹴りはまるで金棒で殴られたかのように、重みのある一撃だった。あまりの衝撃にメタボの身体は側壁に打ち付けられ、地に伏する。

「呆気ないな。その程度の実力で地獄に逆らうなど、笑止千万だ。そもそも地獄、さらには天国をも管理せねばならない我々に挑むこと事態間違っているのだ」

多聞天が勝ち誇るように語りかける。何の反応のないメタボを見て、彼は止めを刺すためにメタボに近づいていく。

「へっ……」

刀に力を込め、メタボの首に狙いを定めたところで彼の鼻で笑う音が聞こえ、多聞天は歩みを止めた。

「地獄と天国を管理するだあ？　笑わせんじゃねえよ…」

「なんだ…」

メタボはゆっくり立ち上がり、多聞天を睨み付ける。彼はメタボがとても大きく見え、理解し難い力を纏っているように感じた。

「言ってるんだろ…。地獄もちゃんと管理出来てねえやつが偉そうなこと言ってるじゃねえって…」

「だから貴様ら反乱分子を倒せば…」

「そうじゃねえっ！！」

メタボは叫び、突き刺すように多聞天を睨む。

「お前らが本気で地獄を管理出来てるってんなら、俺らみたいな存在は必要ねえんだよ。バカだからよくは知らねえけどよ、輪廻転生がめっちゃくちゃなんだろ？　それなのに地獄の管理が出来てるって言えんのかよ！！」

メタボは思いの丈を全て吐き出した。地獄に落ちたのは、自分の生き方が悪いせいだ。それは仕方がないと思う。当初は納得していた。しかし、いくら地獄に落ちたクソ野郎にも意地がある。ルールをねじ曲げられてまで地獄に留まる理由などないのだ。

「言いたいことはそれだけか？」

「何だと？」

多聞天は下らなさそうに、または大したことはないとも言いながら投げやりに言った。

「そんなことは、本来地獄を統括すべき天使共に任せればいいのだ。もつとも、地獄に落ちるような腐った魂など、どうでもいいがな」

メタボ目が血走り、怒りで拳や腕が震え、その振動が金棒まで伝わっていた。

「少なくともてめえに、管理者を語る資格はねえっ！！！！」

メタボは多聞天の頭を目掛けて金棒を振り抜く。が、多聞天はあっさり刀で抑えこんだ。

「管理される死人が口出しすることじゃない。それでも語りたくば、力を示せ！」

多聞天は競り合う刀と金棒を離させ、一旦距離を取る。優勢だった体勢を敢えて崩すことで、いつでも倒せることをアピールしたのだ。それに気付いたメタボは唾を床に吐き捨てた。

「舐めやがって…。いいぜ、その偉そうな口二度ときけねえようにしてやるよ！」

メタボは離された距離を一気に詰め、金棒を振り抜く。しかしそれは多聞天の刀に受け流されてしまった。

「どうした！　貴様の怒りは！　意志は！　想いはその程度か！」

「まだまだこれからだ！」

メタボは金棒を振り回すのを止めない。多聞天は全て避け、金棒が空を切る音だけがあった。

「ふん、力を示せぬのなら、私が示してやろう！」

多聞天を中心に、いやその刀を中心に力が発せられた。その衝撃でメタボは吹き飛ばされる。

「ち、なんだ…？」

多聞天の刀が白く光っていた。それ神々しいというより、荒々しかった。それは野で猛る虎を彷彿させた。亜依奈や若頭など、彼が四獣の一つに乗って現れたのを見た者なら勘づくことが出来たかもしれない。初見のメタボは驚愕した。

「まさか…、白虎？」

そう、メタボの前に現れたのは四獣の一つである白虎だった。エンマが麒麟を御すことによって、その下位に当たる白虎もエンマのコントロール下にあった。だがメタボに知るよしもない。

「そつだ。貴様らは玄武を転移用にしか使役しなかったようだが、四獣には他の使い方がある」

「なんだと？」

多聞天の横で鎮座していた白虎が粒子状になり、彼の中に入った。白虎が纏っていた荒々しい白い光は、多聞天から発せられる。

「驚いたか？ 四獣には使役する者の力を上げる能力があるのだ！」

メタボは確かに多聞天の力が上がったことを肌で感じていた。しかしメタボは恐怖していない。多聞天はそんなメタボを訝しんだが、圧倒され反応出来ないだけだと解釈した。

だがその解釈は間違っている。多聞天はメタボに大きなヒントを与えてしまったことに気付くわけもなかった。

メタボの中に四霊の一つ、応龍が存在することを多聞天は知らないのだから。

「なあ、応龍。俺もあんな感じにパワーアップ出来るのか？」

「ふん…、怒りで沸き上がる力を抑えるのがやつとだというのに…」

「抑えてやがったのか！？ このままじゃあいつを倒せねえんだ。何とかしてくれ！」

「…よかるう。白虎が出てきた以上、我らの問題でもあるしな」

多聞天にはメタボがなにやらぶつぶつ独り言を呟いているようにしか見えなかった。

「何をごちゃごちゃと言っておる？ 辞世の句でも詠んでいたか？」

メタボは多聞天があまりに的を外れたことを言うので笑った。

「へっ、てめえが詠んでるってんだ。行くぜ応龍！！」

「なっ！？」

多聞天はやつと自分の置かれた状況を理解した。しかし時既に遅し。メタボから青い光の柱が発せられ、天井に穴を空けた。

「まさか四霊である応龍を御しているとは…。体内に隠し切り札としていたか！」

「こんな能力あるなんざ知らなかったけどな。さてと、四獣の恩恵と四霊の恩恵、どっちが大きいなんて言うまでもねえな」

「く…」

四獣は四霊から生まれた存在である。受け継がれた力は四霊の十分の程度しか四獣にはないのだ。いくらメタボと多聞天に戦闘技

術の開きがあつたとしても、四獣と四霊の差は埋められない。

「じゃあ示してやるぜ、力つてやつをな！」

「応龍の力だるうに！」

「先に白虎使つたのはそつちだるうが！」

メタボは金棒を振るう。それだけで衝撃波が生じ、多聞天を襲つた。

「ぐっ……。私の中の白虎が怯えている……！」

応龍の恐ろしさを一番敏感に感知していたのは白虎だった。

「白虎がビビつちまつたようだな。この勝負、見えたぜ」

「大儀ある私が負けるものか！」

もう多聞天から白虎による荒々しい白い光はない。それでも多聞天の戦意は衰えることはなかった。

「天国を……、ヤマを見返すまで、私は倒れん！　それがエンマ様の願いだ！」

「ボ口出しやがったな！　何が天国を、地獄を管理するだ！」

「地獄を放つて天国に行ったやつに、世界を統べる権利などない！」

多聞天が憤慨するヤマのことをメタボは、話で聞いただけのことしか知らない。だが、地獄の死人達が振り回される理由にはならなるとメタボは思った。

「なんでそこまでエンマに首つたけなのか分からねえが……。その間違つた忠誠心、ぶつ潰してやる！」

「やれるものならやつてみるおっ……！」

青い光を纏つたメタボと、信念だけで立つ多聞天が激突する。振り下ろされる刀をメタボは避け、刀を金棒で叩き潰した。

そしてメタボの金棒は、容赦なく多聞天の頭部を直撃する。彼の身体は真横にぶつ飛び、ステンドグラスを破った。

第三十七話・力の理由

地獄の住人でも死ぬことがある。寿命はないし、老いもないので、死因はただ一つ。殺害である。持国天、広目天、増長天は激闘の末倒され冥府の裁きを受け亡者の一人になった。故にもう死ぬことはない。それはお嬢、エレン、サレナを苦しめていた。

三人共亡者に対抗出来る武器を持っていない。つまりこの勝負に勝利はない。出来ることは四天王達を引き止め、メタボや亜依奈達の邪魔をさせないことだ。

「長期戦覚悟はいいが、いい加減倒れてくんねえか？」

「冗談、あなたこそ引っ込んでなさいよ！」

エレンと増長天はお互い武器を失い、満身創痍になりながらも殴り合っていた。生きているエレンにとっては限界に近い。増長天はエレンの右ストレートを彼女の右側に回り込んで避け、脇腹を蹴り飛ばす。

「いい加減楽になってしまえよ……」

「ぬかせ！　こんな形で輪廻から外された仲間の仇……取らせるやあつ！」

流石のお嬢でも集中力が乱れ、剣筋がまともではない。ただ彼女を突き動かしているのは、仲間を信じる想いだけだった。持国天はお嬢の刀を少し身体を向けて避ける。そしてお嬢を蹴り飛ばした。「大した実力もないくせに頑張りますね。千里眼を使わなくても、今のあなたの動きが見えますよ？」

「それでも、エンマのエゴに天国も地獄も滅茶苦茶されるわけには……！」

エゴ、か……。広目天は中々的を射ていると思ったが口には出さない。ただの尖兵と成り下がった自分は、やはりエンマのために動かねばならないのだから。それが地獄のルールだ。サレナのジャベリンを避け、戟の矛先の逆をみぞおちに突く。

「うっ…！」

サレナは片膝をつき、何とか吐き気をこらえた。

持国天達が止めを刺そうと近づく。

お嬢は手に力を入れ、刀を強く握る。その時ふと、鏢に目が入った。そこには亀を象った紋章が刻まれていた。霊亀と契約した印である。お嬢は霊亀との話を思い出した。彼らは世界と世界の間を管理する者達である。天国と地獄はもちろん、もしかしたら地獄とタルタロスを繋ぐかもしれない。

試してみる価値はある。

お嬢は決死の覚悟で立ち上がった。

「何のつもりだ？　まるで勝つ見込みがあるみたいじゃないか」

「その通りや…。まあ見てみ！」

お嬢は叫び、華奢な身体から巨大な亀が現れた。霊亀である。と言っても屋内に収まるよう前回現れた時よりも小さめである。その姿に持国天達は驚愕せずにはいられなかった。

「四霊だと…まさか!？」

持国天はお嬢がしようとしていることに勘づき、阻止しようとして近づく。だが霊亀の巨大な足が行く手を塞ぐ。

「霊亀よ…。タルタロスへの道は開くことは出来るんか？」

「わしを誰じゃと思っておるんじゃ？　容易いことじゃわい」

「なら、こいつらを居るべき場所に帰したってくれ！」

「ええじゃろ」

霊亀は大きく息を吸うと、吐き出すと共に耳を突き刺すような強烈な咆哮を響かせた。すると空間に歪みが生じ、巨大な穴となった。

「さあ奈落の亡者達よ、ハデスが待つとるぞ」

巨大な穴はブラックホールのように持国天達を吸い込み始める。

「ぐぐ…、まだ暴れ足りねえんだよお！」

増長天の叫びも虚しく、穴に吸い込まれてしまった。エレンは少し複雑な面持ちでその様子を見ていた。

「さすがに…、四霊には抗えませんか」

「広目天は抵抗を止め穴に吸い込まれていった。」

「地獄の亡者でしかない貴様がこれほどの力を…。何故だ！」

持国天の疑問に答えたのは霊亀だった。

「地獄が変わる時が来たんじゃないよ。それをエンマに知らしめるためにこの子のような存在が現れたんじゃない。わしはその手伝いをしていくに過ぎん」

持国天は霊亀の言葉を咀嚼し沈黙のまま穴に吸い込まれた。霊亀は三人が吸い込まれたのを見ると穴を消した。

「ありがとくな。助かったわ」

「気にすることではないわい。四霊の不始末を片付けただけじゃ。まだぬしらにはやることがあるじゃろ？」

「せやな…、また助けてもらうで」

「うむ」

そう応えると、霊亀はお嬢の中に入っていった。

「どうして僕の顔を見てそんなに驚くんのです？」

太一はそう聞かすにはいられなかった。初対面であるはずのヤミが自分の顔を見て驚くのである。天国の長であるヤマは顔を背けたままであるし、異常に思えた。

「…貴方が死んでここに来たのも運命の思し召しなのかもしれない。お話ししましょう。…私の息子よ」

「息子！？」

今度は太一達が驚く番だった。だが無理はない。初対面で、しかも天国后妃であるヤミが自分のことを息子だと言ったのだから。とても信じられることではない。

「嘘、でしょう？　だって僕は人間として生きて死んだんですよ」

「そうでしょう。私は現世で貴方と雅人を生んだのですから」

もはや声を上げることすら出来なかった。皆は黙ってヤミの言葉

に耳を傾ける。

「私は天国で生まれました。古来蓮の池で蜘蛛の糸を垂らした伝説はご存知でしょうか？ 私はそこに落ちて現世へ行ったのです」

太一は蜘蛛の糸を垂らした先の世界は地獄ではなかったかと思っただが、亜依奈が蓮の池の世界の連結は不安定で、どの世界にも繋がる可能性を秘めているとフォローしてくれた。

「現世で私を介抱してくれたのが利彦さんでした」

利彦。早川利彦。確かに太一の父親の名前だった。

「私は彼の優しさに触れ、子を育みました。…とても幸せでした」

それが太一であり、メタボであった。だかこう聞かされても、太一は目の前の女性を母親と認識できなかった。

ただ、亜依奈とヤツシーは納得していた。メタボの人間離れた身体能力や、火事場のクソ力な底力はヤミの息子である由縁だったのだと。そしてソルジャーソングを聞いた太一がフェアシユテーエンを発動させることが出来たのもヤミの息子であるゆえかもしれない。

「そんな生活も終わりが来ました。天国に私の居場所が知れてしまったのです。現世で子を作ることは重罪でありましたが、従うほかありませんでした」

しかし今はヤミはエンマに幽閉されていたとはいえ、天国の後妃とまでなっている。そこに疑問が残った。

「本来ならタルタロスに送られる重罪を庇ってくれたのはヤマでした。彼は私を后妃として迎えることで救って下さったのです。節操のない女とお思いでしょうが、彼の想いも真剣だったのです」

ヤマはヤミが現世へ落ちる前から彼女のことを好いていた。やっと帰ってきた彼女がタルタロス送りと知ってしまえば、救わずにはいられない。失いたくなかったのだ。

「母のいない生涯を歩ませて、本当に申し訳なく思っています…」

ヤミは太一に深々と頭を下げた。

太一はどうすればいいものかと頭を掻く。

「…確かに貴女が母親だと言われても、すぐに受け入れることはできません。けど、貴女の子であったからこそここまで戦ってこれたならば、僕は貴女に感謝します」

「太一…」

それは親子の会話というにはあまりにも他人行儀だった。ヤミは無理もないと納得する。

「ありがとう、母さん」

太一の言葉を聞き、ヤミの頬に一筋の涙が通った。そして彼女は太一に抱きつく。

「私を母と認めてくれるのですか…」

「母さんが人間だろうと鬼だろうと天国后妃だろうと関係ないよ。

メタボも母さんが母親で良かったって言うよ」

「ああ…」

運命に抗えず、天国后妃として生きてきた自分を恥じていた。だがこの時ばかりは生きていて良かったとヤミは思えた。

第三十八話・再戦

ようやくヤミは泣き止み、いよいよエンマとの決戦を控えることとなった。ヤマはヤミをどこかに隠れるよう言ったが、安全が保証される場所など何処にもないので、結局ついてくることになった。

「とうとう最終決戦か…。メタボ達、大丈夫かな」

ヤッシーはメタボ達の安否を気遣うが、亜依奈は豪快に返した。

「先におっ始めてるくらいじゃないと困るよ」

当初の作戦では二人を救出しエンマを奇襲するはずだった。だが最悪多聞天などに手こずれば、メタボ達はエンマと戦っていないかもしれない。その場合奇襲する役は彼らに担ってもらうことになる。チャムによって回復したヤマはエンマを引き付けるに充分である。これを踏まえると、こちらの戦力も申し分ない。

「様子を窺う必要があるから徒歩で行くよ。…ヤミ様、構いませんか？」

「ええ」

「よし、なら出発だ」

一行はエンマが居ると思われる『謁見の間』を目指して進んでいく。支配者を気取る者なら、玉座を模したあの空間で待ち構えたがるだろう。それにエンマは決着をつけたがってるようにも思えた。ヤミとヤマを大した抵抗なく返したのも、そういった理由ではないかと考えたのだ。

しばらく進んでいき、謁見の間の扉へと辿り着いた。不気味なほど静かで、戦闘は行われている様子はない。メタボ達より先にエンマと戦うことになったようである。

「分かる…、愚弟のおぞましい気が」

ヤマは片手を出し、火球を作り出す。それを自身の大きさまで膨れ上げ、扉へと放った。

火球は扉を一気に燃やし尽くし、爆音を上げ玉座へと着弾した。

紅蓮の炎と黒煙が謁見の間を包む。

「やったか…？」

「いや、この程度で奴がくたばるはずがない」

赤い炎に照らされて、一つのシルエツトが浮かび上がる。紛れもなく、エンマのものだった。

「ふふ…、乱暴だな、兄さん」

「貴様に兄と呼ばれる筋合いはない。大人しくわしに倒される」

エンマとヤマが対峙する。あの時と違いヤマには仲間がいる。しかしそれでも埋まらない差があった。

「忘れたの兄さん？　僕にはこいつらがいるってことを」

エンマが呪文を唱えると空間の亀裂が二つ現れ、そこから強い光が生じた。四霊である鳳凰と麒麟の登場である。

二体は雄叫びを上げヤマ達を威嚇する。

鳳凰の輝きはヤマが発した炎を掻き消し、麒麟の纏う青い光と調和した。

「こ、こんなの勝てんのかよ…」

ヤッシーは自分の得物を見る。震える手に握られたドスは、あまりにも頼りなかった。これを突き刺すには当然近付かなければならず、それはエンマ、麒麟、鳳凰のいずれも不可能に思えたのだ。

「メタボとお嬢が来るまででいい。時間を稼ぐよ」

亜依奈はそう檄を飛ばした。四霊である鳳凰と麒麟を倒すには、同じ四霊である応龍と霊亀の力が必要である。この二体が来れば、数に任せてタコ殴りにすればいい。

「時間稼ぎすら出来そうにないんだけど…」

時間稼ぎであるから、こちらから攻撃する必要はない。だが麒麟と鳳凰がどんな攻撃を繰り出すか分からないが、避けていくのは難しいだろう。

「玄武を移動にしか使役出来ない亜依奈には出来ない芸当だろ？」

僕には四霊を戦わすことだって出来るんだ」

「く…」

亜依奈は奥歯を噛み締めた。エンマは鳳凰と麒麟を正式な契約で従わしているわけではない。何らかの服従を強いる術を二体に放っているはずである。だが四霊を長時間次元の狭間（亜依奈達が修行に使った玄武の間のような空間）から引きずり出すには強大な力が必要で、亜依奈はエンマの力を認めるしかなかった。

「最後の戦いを飾るには、ここは狭いね。鳳凰と麒麟も窮屈してるしよ」

エンマは両手を掲げ、頭上に火球を作り出した。それはがしやくろをも燃やし尽くすくらい大きくなった。

「あはは、行けえ！」

エンマは火球を天井に放ち、大穴を開けた。細かく砕けた天井は瓦礫と化し、亜依奈達を襲う。

「エンマあつ！」

ヤマは頭上に火の壁を作り、それを拡げ皆を瓦礫から守った。ヤマの火は瓦礫を例外なく燃やし尽くす。落下が終わるとヤマは火を消した。そして忌々しくエンマをヤマは睨む。

「貴様あ…！」

「こんなもの、また作ればいいんだよ。これで鳳凰も自由に羽ばたける」

何が自由なものか、とヤマは吐き捨てた。鳳凰の自由など、足に糸を結ばれ、その糸の範囲内を羽ばたく程度でしかない。

「さて、兄さんは僕が相手をするとして。鳳凰と麒麟にはザコの相手をしてもらおう」

ヤッシーは戦慄し、太一、チャム、亜依奈は身構えた。勝つ必要はないと分かっているにも、全力を出さなければ生き残れない。

「やっぱ死んでても痛いよね…？」

戦いに身を置くと忘れそうになるが、ヤッシーと太一は死人である。この特性を生かせられれば、時間稼ぎは比較的楽になる。だが、ヤッシーの考えは楽観的だった。

「生憎と、四霊にかかれれば魂を潰すなんて、簡単なことだろうね」
亜依奈の言葉は痛烈にヤッシーに突き刺さった。ようは一撃でも当たるとアウトである。

「来るよ！」

亜依奈の言葉通り、鳳凰と麒麟は攻撃を開始した。

鳳凰は燃え盛る羽根を撒き散らし、麒麟は亜依奈に向かって突撃する。ヤッシーと太一は振りかかる羽根を避けていく。

亜依奈は寸前で避けたはいいが、態勢を崩してしまった。麒麟の再度突撃を試みようとして、雷のような角を亜依奈に向ける。

「亜依奈さん！」

ヤッシーは叫ぶが、麒麟の勢いは止まらない。

無惨にも亜依奈の身体が宙を舞った。そして鮮血を伴い落ちていく。

「亜依奈あああああああつ！！！！」

ヤミの叫び声が戦場に響く。誰もが亜依奈の側へ駆けつけようとしたが、無情な羽根が行く手を阻む。

「チャム、何とかして歌を！」

「分かつてる！」

チャムは小さな身体を生かして亜依奈の側まで飛んでいった。しかしゆっくり歌っている暇はない。

「チャムっ！ 上だ！」

チャムが上を見ると、鳳凰の羽根が落ちてくる最中だった。チャムは避けられても、そうすると亜依奈が燃えてしまう。歌で跳ね返そうにも、強力な歌はあと三回しか使えない。

だが命がかかっている以上、チャムは迷うわけにはいかない。

意を決して口を開こうとすると、ガキンっ！ という跳ね返る音が聞こえた。まだチャムは歌っていない。

チャムと亜依奈を庇うように立っていたのは、ヤミだった。

「ヤミ様……」

亜依奈はヤミの姿を見上げる。彼女の姿はまさしく亜依奈が使えるに相応しい主だった。

「すみません亜依奈…。私が無甲斐ないばかりに」

また、鳳凰の羽根が亜依奈達を襲う。だがそれは彼女達を燃やすことはない。ヤミの妖術が羽根の墜落を許さないのだ。

「今のうちに亜依奈を！」

「はい！」

チャムは癒しの歌を歌う。亜依奈の傷は次第に癒されていった。その様子を苦々しく見ていたのはエンマだ。

「まさか義姉さんがあんな力を持っていたなんて…。正直驚いたよ」

「余所見をするなっ！」

ヤマの炎を伴った拳が空を切る。エンマは余所見しながらでも戦える、と暗に示しているようにも見えた。

「でも本当に厄介なのは、あのフェアリー族だね。兄さんが無駄に元気なもの、あの子のおかげだろうし」

凶星を突かれヤマは口ごもる。本来ならヤマに戦う力は残されていない。それを可能にしたのはチャムの歌だ。

気付いてしまえば、それを見逃すエンマではなかった。

「まずはあの子をどうにかしないとね」

「させるか！」

ヤマはエンマとチャムの間に立ち塞がるように移動した。しかしチャムをどうにかするのは、エンマではない。

「鳳凰、彼女達に特製の牢をプレゼントしてあげてよ」

「なんだと!？」

ヤマは咄嗟に頭上で羽ばたく鳳凰を見た。鳳凰は燃える羽根を落とし、それはヤミ達を囲むように落ちていく。

「っ!? 妖術が効かない!？」

ヤミは同じように跳ね返そうとしたが無駄だった。

彼女達の周りに落ちた羽根は急激に火柱を立て、牢を形成した。

ヤミは何度も妖術を火柱にぶつけるが、ビクともしない。

「無駄だよ。その火は特別なんだ。当然、歌も無力だろうけど、試してみれば？」

エンマが憎たらしく口角を上げる。こつも絶対の自信を見せつけられれば、試さなくとも無駄だと分かる。

チャムの歌が封じられたことよつて、回復の手段が絶たれた。これは相当の痛手だ。

「ほらほら、鳳凰だけじゃ可哀想だろ！ 麒麟の相手もしてあげなよ！」

麒麟は戦場を縦横無尽に駆け周り、ヤツシーや太一に突撃しようとしていた。二人は振りかかる羽根と、駆け巡る麒麟から逃げなければならぬ。

しかしそれには限界がある。ヤツシーは足をもつらせ、転倒した。おかげで角の餌食になることはなかったが、踏まれ蹴飛ばされてしまった。

「がっ……」

あまりの衝撃にヤツシーは意識を失つてしまう。

「ヤツシーっ！」

飛ばされたヤツシーに気を取られたのが、太一の運の尽きだった。その隙を突き、麒麟が猛威を奮つ。

「っ！？」

太一が気付いた時には宙を舞つていた。落ちてきたところを、麒麟は後ろ足で蹴飛ばした。太一はちょうど扉の方へと飛ばされる。

「ぐっ……」

薄れていく意識の中で、太一ははっきりと足音を聞いた。

第三十九話・四靈VS四靈

若頭が天国宮殿に入った時には、お嬢達の戦闘は終わっていた。

お互いに体力の消耗が激しいが、死人なので何とかなる。しかしエレンとサレナはそうはいかない。普段ならチャムに歌ってもらったところだが、エレンは気合いで笑顔を作った。

「あら、骸骨退治は終わったみたいね」

若頭はエレンの空元気をすぐ察した。本当は休憩を提案するべきだろうが、若頭はエレンの意志を尊重したかった。

「…メタボに無理をさせるわけにはいかん。先を急ぐぞ」

「分かるとる」

座り込んでいたお嬢は立ち上がり、階段を上がっていく。エレンとサレナはその後に続いた。

先を急かした若頭は、やはり二人のヴァルキリーが心配で、つい野暮なことを聞いてしまう。

「大丈夫か？」

「大丈夫よ。ヴァルキリー隊の隊長だしね」

エレンはやはり無理やり作った笑顔で答え、サレナもコクリと頷く。二人共戦意だけは十分だった。

「そうか」

若頭はこれ以上聞くことはなかった。

四人は大きな扉を開け、メタボと多聞天が戦っていた廊下へ入る。戦いは既に終わっており、メタボは金棒を杖代わりにして休んでいた。

「四天王ゆうても、応龍には勝たれへんかったようやな」

「何言つてんだ？ 俺の実力だよ」

事實は応龍に力を解放してもらっているので嘘である。しかし虚勢を張りたがるのが、メタボの悪い癖だ。

「行こうぜ、エンマをぶっ倒しによ…」

「ああ…」

お嬢が頷くと、皆も同様に頷いた。

長い戦いも、エンマを倒すことで終わる。

エレンとサレナは、天国のため。お嬢と若頭は仲間の仇と正しい地獄のため、最後の決戦に臨む。

ヴァルキリー隊隊長という肩書きから、よく天国宮殿を行き来していたエレンが先導する。

そして、獣の雄叫びが聞こえた。鳳凰と麒麟である。その後には爆発音がし、瓦礫が築かれる音が響く。

「もう、戦闘が始まつてる?」

「ちくしょう、先走りやがって!」

皆は急いで駆ける。戦いが長引いてしまったという後悔が胸を絞める。

そしてメタボ達が戦場へ駆けつけた頃、倒れた太一を発見した。

「兄貴っ!」

真っ先にメタボが太一の側による。

お嬢達は『謁見の間』で繰り広げられる戦闘を見て、啞然とした。燃え盛る羽根が舞い、麒麟が闊歩している。そして火柱の囲いの中に、ヤミと亜依奈、チャムが囚われているのが見えた。さらにヤマとエンマが激しく衝突している。

「ヤマ様が戦っていらっしやる…。加勢しなくちゃ!」

エレンが翼を広げ、飛び立とうと羽ばたく。サレナも続こうとしたが、エレンはそれを止めた。

「あなたは太一君と、ヤツシーについてあげて。麒麟から守ってあげなきゃ」

「…はい。でしたらこれを」

サレナはエレンにジャベリンを二本差し出した。エレンの武器で

あるランスは増長天に破壊されている。丸腰よりマシだろうと思いい、彼女はエレンにジャベリンを託したのだ。

「ありがとう、後ろの守りは任せたわ」

「はい」

サレナはホルダーに入ったジャベリンを握り、太一を見る。彼は今、弟に抱えられていた。

「雅人……。情けないな、兄貴だっというのに……」

「ったく、喧嘩は俺に任せときゃいいのによ……」

メタボはそう呟き、太一をサレナに預けた。

「本当は戦ったり出来るようなやつじゃねえんだ。守ってやってくれ」

「ええ……。それが私たちの役割ですから」

メタボは微笑むと、戦場に飛び出した。エレン、お嬢、若頭も後に続く。

「残りも来たみたいだね。ま、鳳凰と麒麟をどうにかできると思えないけど」

「無駄口を叩く暇があると思うなっ!」

ヤマの炎の拳がエンマを狙う。しかし一向に当たらない。お互いの攻撃が全く当たらない状況が続いていた。

お嬢はエンマとヤマが戦っている隙に、鳳凰と麒麟を封じようと考えた。

「メタボの応龍とうちの霊亀で鳳凰と麒麟を何とかする。二人はうちの邪魔されんよう、困らなっしてくれ」

若頭とエレンは鳳凰と麒麟の前に出た。二体の四霊がまんまと食いつく。

「出でよ、応龍!」

「出でよ、霊亀!」

メタボとお嬢の呼び掛けに応え、応龍と霊亀が姿を現した。ここに、全ての四霊が一堂に会した。

「命を燃やす時が来たのう……。行くぞ!」

「応っ！」

呼び出した途端、応龍と霊亀は鳳凰と麒麟の前に立ち塞がった。

「く、まさか応龍と霊亀が人間に手を貸すなんてね！」

エンマが珍しく苦い顔をした。それを見てヤマは笑みを浮かべた。

「貴様の暴拳を四霊は許しはしないようだな！」

「く……。なら僕のものにすればいい！」

「さっせんぞ！」

エンマが妖術を唱えようとするのを、ヤマは火球を放ち妨害した。

「私たちもエンマ抑えた方がよさそうね」

「承知っ！」

若頭とエレンがヤマに加勢していく。エレンはジャベリンを投げ、若頭の刃がエンマを捉える。

「邪魔をするなあっ！」

エンマは炎の壁でジャベリンを灰にし、大太刀を身を翻して避けた。ダメージを与えることは出来ないが、応龍と霊亀を操る妖術を防ぐことは出来る。

「若頭達の頑張りを無駄にすんじゃねえぞ、応龍！」

「分かっておる！　貴様の力、貸してもらっぞ！」

「ああっ！」

応龍は鳳凰に巻き付いた。鳳凰はもがき叫びを上げるが、応龍はきつく締め上げ脱出を許さない。

「ワシも頑張らんとっ！」

霊亀は甲羅に生える木々を急成長させ、それを俊敏な麒麟に絡ませる。四霊の中では小柄な麒麟では逃げ出すことなど不可能である。天井が破壊され空が露となった空間に、応龍と霊亀は切れ目を作った。それは大きく拡がり、穴となる。

「まさか持国天らにやったことをやるんか!？」

「ああ。このまま連れていく」

抵抗する鳳凰と麒麟を押し伏せ、大穴へと引き上げていく。

「バカだね！　そんなことしたって、僕の術が解けるわけじゃない

いんだよ！」

エンマは嘲笑するが、それを打ち消すように霊亀は強かに言う。
「分かっておる。じゃから、ワシ達は地獄を救う勇者に託す。貴様を倒してくれることをの！」

今、エンマ打倒がメタボ達に託された。応龍と霊亀は鳳凰と麒麟を抑えるため、メタボとお嬢に力添えすることは出来ない。

それでも、エンマを倒せると信じて、四霊は穴へと消えていった。穴は塞がり、四霊が姿を現すことはなかった。

「これで貴様一人だけとなつたな、エンマっ！」

ヤマが勝ち誇つたようにエンマを見下す。

鳳凰と麒麟を失い、数の上で絶対的に不利に陥っているのに係わらず、エンマは笑みを浮かべていた。

「僕はエンマなんだ！ 地獄と鬼を統べ、炎を司っているんだ！
夜を制するために炎を操る兄さんとは違う！」

エンマ、漢字を当てると『焰摩』となる。この『焰』という字は炎を意味する。エンマは炎の化身でもあるのだ。

ヤマは漢字を当てると『夜摩』となる。意味はエンマが言った通りだ。

炎そのものと、夜を制するために炎を使うもの。

どちらが力を多く持つかは歴然だった。

「教えてあげるよ。地獄を統べるものと、天国を統べるものの違いを！」

エンマの周りに炎が生じ渦を形成した。ヤマ、エレン、若頭は離れざるえない。

そして炎の渦から飛び出したエンマが狙ったのはエレンだった。

「露払いをしよう」

「っ！？」

エレンは身構える。彼女の手に残されたのは、一本のジャベリン。

小回りの良さがウリの小型投げ槍でも、エンマの動きに対応できなかった。

炎の爆発がエレンを吹き飛ばす。

「じばっ…!!」

エレンは壁に叩きつけられ、気を失った。

「ふん、咄嗟だったから燃えずに爆発しちゃったか。ま、起き上がってこないだろうし、いいか」

「よくもっ！」

若頭、メタボがエンマに飛びかかる。だが彼らの攻撃は当たらない。

エンマは若頭の背後に回っていた。

「っ!?」

気付いた時には、若頭の背中に一筋の痕が出来ていた。それはすぐ火傷となり若頭を苦しめる。

「ぐあっ…」

「邪魔だよ」

エンマは若頭を蹴り飛ばす。壁に背中を打ち付け、若頭は気を失ってしまった。

これで戦えるのはメタボ、お嬢、ヤマだけとなる。

「ふふふ…、応龍と靈亀に選ばれし者達よ。君たちは楽に輪廻の輪から外れられると思わないことだね」

メタボとお嬢は歯噛みする。早く若頭達の仇を取りたいが、圧倒的な力量を見せつけられては、迂濶に攻められない。

だがメタボとお嬢は意を決する。戦いを終わらせるために。

第四十話・兄弟

メタボとお嬢はエンマに向かって駆け出す。だがエンマの出す炎が、これ以上近付くことを許さない。

「君たちの相手は兄さんの後にして上げるよ。面白そうだからね」
鳳凰と麒麟が帰ったため、エンマはそれらの力の恩恵はない。それでもヤマはエンマにとって倒せる相手だと言うのだ。

「舐めた真似を…。お前らっ！　心配せんでも、わしがエンマを倒す！」

ヤマはそう言うが、メタボとお嬢はこの手で、地獄組の手でエンマを倒したいという気持ちが高い。

二人は意地でも炎の壁を越える必要があった。

「わしは炎を制する存在…、貴様が炎の化身というなら、わしは貴様をも制してみせるっ！」

「僕は兄さんのキャパシティを超えてるよ。思い通りに出来るなんて考えない方がいい」

ヤマの拳を、エンマは飄々と避ける。

「それに、兄さんは炎を操るしか能がないんでしょ？　それじゃ僕には勝てないよ」

「く…」

確かに炎の化身であるエンマに、炎を纏った拳ではダメージが少ない。エンマもるとも焼き尽くすほどの絶対的な炎が必要だ。

しかしこの世界にそんな炎は存在しない。いかに天国の長といえど、そんな炎は作り出せないのだ。

「ま、兄さんに対しても生半可な炎は通用しないけどね」

ヤマは炎を制する存在。故に大抵の炎の攻撃は打ち消しコントロールすることが出来る。だからエンマはヤマに対して攻撃することはなかった。

だがこれはエンマがヤマを倒せないことを意味しない。骨が折れ

るが倒せない相手ではないのだ。

「全てを焼き尽くすほどの炎を見せて上げるよ」

エンマ自身が発火し、炎のオーラを形成する。それが大きくなり、巨大な火柱となった。

「さようならだ、兄さんっ!!」

これだけ強大な炎を見せつけられても、ヤマは引き下がるわけにはいかなかった。夜を制し炎を操る存在である“夜麻”。この名にかけて、エンマの火を制する。

「エンマあっ!!!!」

ヤマの咆哮が、炎の壁を吹き飛ばす。それでもエンマの纏う火は消えない。

ならばエンマの炎に真っ向から立ち向かうのみ。

ヤマの炎が大きく膨れ上がる。

そして二つの炎がぶつかりあう。

大きな爆発が起きた。

この爆発は容赦なく天国宮殿を瓦礫に変えた。

メタボが、お嬢が、太一が、エレンが、若頭が、ヤッシーが、サレナが瓦礫の中に埋もれていく。

粉塵が晴れ、瓦礫の山と化した天国宮殿の跡が見えた。

ヤミとチャムと亜依奈は、皮肉にも鳳凰が残した牢のおかげで瓦礫から逃れていた。三人が見たのは絶望的な景色だった。

立っているのは一人。

エンマだった。

「あははっ! 勝ったっ! 鳳凰や麒麟の力なんかなくなっちゃっ

て僕は兄さんに勝てたんだ! あはは、あはははははっ!!」

エンマの笑いが訝する。

それをかき消すように、立ち上がる二つの影があった。

その正体は、メタボとお嬢。

エンマは笑うのを止め、二人を見た。

「面白いね、君たち…」

メタボとお嬢は粉を払い、エンマを見る。

「あのおっさんぶつ倒されちまったか」

「けど好都合や…。この手でエンマを倒せるんやからなっ！」

メタボとお嬢はエンマに突っ込んだ。

お嬢はエンマの首目掛けて刃を向ける。エンマの首は繋がったままである。

炎を纏った手で刀を受け止めたのだ。

「僕を殺すには、火を殺す必要がある。君にそんな真似が出来るかい？ 鬼退治のお嬢さん」

「こいつ…」

「敵がお嬢だけだと思うなっ！」

エンマの背後から、メタボの金棒が狙いをつける。だがフツとエンマは姿を消し、メタボはお嬢を殴りそうになった。

「危ねっ…！」

相手は炎の化身“焰麻”。生半可な攻撃は通用しない。そもそも刺殺出来る相手かどうかすら分からない。それでも二人は武器を振るうのを止めない。

「君は確か鬼の子…、ヤミの子だったね」

「なっ…」

メタボはヤミから話を聞いていない。当然太一と自分がヤミの子であり、半分鬼の血が流れていることなど、知る由もなかった。

だがメタボに取って自分が何者であるかなど、些末なことだった。なるほどな、だから俺は変に強いのか。ありがたい話だぜ。おかげでためえをぶつ倒せるんだからよおっ！」

メタボは金棒を突き刺す姿勢でエンマに突進する。だがエンマはそれを受け止めてみせた。

「君といい、その兄貴といい、ヤミの子にしては好戦的だね」

「母親の顔はちょっとしか見てねえっ！ てめえ倒して挨拶くらいしねえとなっ！」

メタボはさらに力を込める。だがエンマはビクともしない。二人の力が拮抗し動かない隙をついて、お嬢はエンマに飛びかかった。

「甘いねっ！」

エンマは片手でメタボの金棒を抑え、空いた手でお嬢の刀を取った。

「二人は普通の人間じゃない…、でもそれだけだね。それじゃ僕には勝てないよ」

メタボとお嬢は一旦距離を取った。

「俺達がそれだけの存在か…」

「よう見てから言いやっ！」

メタボとお嬢はとにかく攻めることにした。エンマはヤマを倒すため強大なエネルギーを使ったのだ。攻めていけば、隙が生まれると考えたのだ。

「…つまらないな。そうだ、天国ごと燃やし尽くしてしまおう」

エンマは突いてきたお嬢の刀を避け、彼女の後頭部を蹴り飛ばした。お嬢は瓦礫の山へ埋もれていく。

「てめえっ！」

メタボは横薙ぎに金棒を構えエンマに向ける。エンマは屈んで金棒を避け、ビュツと空を切る音があった。

「大振りだねっ！」

エンマは立ち上がる勢いを利用して、メタボにタツクルした。

「がっ！」

メタボは瓦礫の山に飛ばされ埋もれてしまった。

「天国の全部が灰になる…、ワクワクするね…」

エンマはまた強大な炎を纏い火柱を形成する。

「どうしてだよ…。てめえは天国を支配したいんじゃないのか！？」

メタボは瓦礫の山から這い出て、叫んでいた。持国天も、多聞天

も、エンマが天国を支配することを、天国を地獄にすることを望んでいた。

「そのためにこの地を灰にする必要があるのさ！　この世界を、兄さんでなく僕の世界にするために！」

いや違う。多聞天は言っていた。天使を見返したいと。そしてヤマを見返したいと…。

「てめえ…、兄貴が嫌いなんだから？」

「そうさ！　目の上のたんこぶ…、うっとおしくて仕方なかったよ！　君だって分かるだろう？　兄を持つ君なら！」

「そうだな…」

メタボは金棒を杖代わりに立ち上がった。チラと瓦礫の山を見る。だが直ぐにエンマを睨み付けた。

「確かにうざってえし、ムカつくし、インテリぶった嫌な奴だ。けどよ、ぶっ倒して、兄貴の物ぶっ壊して満足しようなんざ、思ったことねえよ」

「何…？」

エンマは奇異の目でメタボを見る。

「俺はそこまで兄貴のこと嫌いじゃねえからな。てめえだってそうだろ？」

「黙れ…」

「そこまで兄貴に執着するくらいだ。本当は相手してほしくて仕方がなかったんじゃないかねえのか？」

「黙れよ！」

エンマはメタボに向かって火球を放つ。しかしそれはメタボでなくチャクラムを燃やした。

「いつ僕がインテリぶったんだよ」

チャクラムを投げた主、太一がメタボに微笑みかける。目を覚ましメタボの窮地を救ったのだ。

「雰囲気かインテリぶってんだよ」

メタボも太一に微笑み返した。

エンマには兄弟が和気藹々としていることが理解できなかった。
エンマにとつてそれは幻想でしかないのだから。

「なら兄弟仲良く消してあげるよ！」

エンマの炎が太一とメタボに襲いかかる。

「へ、俺達がただの兄弟だなんて思わねえことだなっ！」

メタボは飛び上がり、太一は迂回して炎を避ける。そして目指す先は一つ。

「くたばれエンマっ！」

金棒を構え落ちてくるメタボ。エンマは炎で迎撃しようとするが、それは憚られた。

チャクラムがエンマに迫ったからである。それに気をとられ炎を出すタイミングが遅れた。そして初めてエンマに攻撃が当たる。

「ぐぼっ！」

横薙ぎに出された金棒がエンマの頬を捉えた。倒れることなく踏み止まったが、それは二撃目を作る隙を与えた。

「ぐぼっ……」

突き出された金棒はエンマの身体を貫いた。

「なぜだ…、僕は焔の化身であるはずなのに……」

エンマは瓦礫が崩れ砕ける音を伴い倒れた。

「ためえだつて人間だったってことだろ？　焔の化身とか、地獄のてっぺんとか以前によ」

「僕が人間……？」

「兄貴に嫉妬して無茶苦茶やって、んでスッキリして……。そういうのをやるのは人間なんだよ」

メタボの側までやってきた太一が続きを引き受けた。

「それを止めるのは人間だから、僕達が止めた。それだけだよ」

エンマが人間であるはずがない。だが彼の心は間違いなく人間だった。

「……ちっ」

エンマは両手を上げ、炎を生んだ。

「こいつまだ…！」

メタボと太一が身構える。だがエンマが生んだ炎は、どういっわけかエンマを包み、彼の身体を燃やし始めた。

最終話・それぞれの道

エンマの身体は燃え尽きた。ただ灰だけが残り、それも風に流され天国のどこかへ消えてしまった。

鳳凰の羽根が消え、ヤミ達は牢から解放される。

だが彼女らの目は二人の事態の終結の立役者に向けられたままだった。

「結局何がしたかったんだろうな…」

メタボの問いに、太一は答えなかった。

エンマとヤマ。いや、もしかしたらヤミも加わるかもしれない。ともかく彼らに何があったかは、彼らにしか分からないのだ。

「兄弟喧嘩をするのは、本人同士だけでいい。けど、それが出来なかったから、地獄と天国で戦争を起こした…?」

だとしたら、この戦争はあまりにも幼稚で、下らないものだった。尚更エンマは許しておけるものじゃない。

ガラガラ…。

瓦礫の山が崩れる音がした。メタボと太一が音がした方を見ると、ヤマが起き上がっていた。

「すまん、わしらのせいで、下らないことに巻き込ませてしまった…」

ヤマは深々と頭を下げる。この戦争がエンマとヤマの不仲で起こったのなら、彼は戦争を起こした張本人と考えられなくもない。だがメタボと太一はヤマに対して怒りは感じなかった。何も言わず、一礼だけして返した。

あれこれ考えても、この戦争をどう受け止めるべきか答えは出なかったため、反応出来なかったからかもしれない。

分かりあえないまま別れたエンマとヤマ。多くの仲間を失った地獄組、ヴァルキリー隊。戦争終結のため払った犠牲はあまりにも高い。

だがひとまず戦いは終わったのだ。

メタボ達は勝利の余韻に浸る仲間達を起こしに駆ける。

そして天国宮殿の戦いから一週間が過ぎた。

天国宮殿は建て直され、今はヤマが指揮を執っている。ヤマはエンマを失った埋め合わせのため、地獄の長として君臨したのだ。

天国はエンマや増長天が破壊した建築物などを復興していけばいいが、地獄はそうはいかない。

看守である鬼を多く失ったため、亡者を見張る数が足りないのだ。幸い地獄での戦いの舞台が亡者の牢獄になったことはない。長期刑を中止すれば、ギロチン処刑場や、広目天の宮殿なども復興していくだろう。

それまでの間亡者を見張るのは、多聞天の部隊など戦争にあまり関わらなかつた鬼達である。

だがヤマは、彼ら以外の人材も起用していた。

「地獄が大変だって時に、脱走とか下らねえこと考えんじゃねえぞ！」

牢獄に響き渡る声。その声は亡者達を震え上がらせる。

エンマを倒した最強の亡者…、メタボ。そう、今地獄の看守を引き受けているのは地獄組なのだ。

「ち、なんて俺がこんなことを…」

「そう愚痴るなって。おかげで俺達刑を受けずに済んでるんだから」

「そうだけどよ…、お嬢も面倒なこと考えてくれたぜ」

メタボの言う通り、牢獄の見回りを提案したのはお嬢だ。エンマ討伐にあまり貢献出来なかったため、ヤマ指導のもと、正しい地獄に戻す手伝いをしたいらしい。おかげでメタボ達はエンマ戦から三日で地獄中をパトロールに回っている。

「でもお嬢のが大変だろ？　パトロール隊には鬼だっているんだ。そいつらに言うこと聞かせていかなきゃならないんだし」

「大変？　まあ大変っちゃだな」

メタボが口を濁したことには訳がある。ヤツシーは苦笑してお嬢の苦労を思った。

「うえつくしよんっ！」

お嬢は盛大にくしゃみをした。すると周りの鬼達がこぞって心配し始める。

「風邪ですかいお嬢？」

「拗らせちゃ大変だ。すぐ宮殿へ戻ってくださいえ」

「あ、こちらにちり紙がござえます」

鬼達の対応にさすがのお嬢も苦笑した。取り敢えずちり紙を受け取り小さく鼻をかむ。そしてキリッと真面目な顔を鬼達に向ける。

「うちは死人や。風邪ひくわけないやろ。それに自分で仕事せな落ち着かへんわ」

「お嬢…」

鬼達は感動して涙ぐむ者さえいた。

「すいやせん、お嬢っ！」

「俺達が間違ってたましたっ！」

「一緒に見回りしやしょうっ！」

鬼達はさらにやる気を出し、足取り軽く進んでいく。お嬢はパトロール隊が結成してから数日しか経っていないが、完璧に鬼達の心を掴んでいた。

戦争に参加していなかったやる気のない鬼達に一喝して、彼らは

お嬢に心打たれた。よってお嬢は鬼達のアイドルのような存在になつてしまったのだ。お嬢本人は苦笑しているが、まんざらでもない。「亜依奈もええ奴ら紹介してくれたもんや……」

お嬢の申し出を許可したのがヤマなら、実際に働きかけてくれたのは亜依奈だった。彼女部隊編成や巡回コースなどをまとめたのだ。何故元々ヤマの側近である亜依奈が地獄にいるかというところ、地獄復興には人手がいると、ヤミが彼女を遣わしたからだ。

おかげで今亜依奈は、ヤマの側近として地獄復興に向けて努力する日々を送っている。

一方天国の浄瑠璃国。ここは増長天との戦いの舞台となり、被害が特に酷かった。復興作業が急ピッチで行われているが、今は休憩時間である。

「太一くん、飲み物いかがですか？」

「ありがとう、サレナさん」

太一はサレナから水の入ったコップを受けとると、一気に飲み干した。

「そんなに喉渴いてたの？」

「うるさいなチャム。たくさん働いたんだから仕方ないだろ」

「なっさけな〜い、チャムはそう言つて太一の頭上を飛び回る。」

「でも良かったんですか？ お母様の近くに居なくて……」

太一の母というのは、ヤミのことである。ヤミはエンマとの戦いの後、メタボにも自分が母親だと明かした。メタボはエンマ戦の時に気付いていたため、あっさりその事を受け入れた。

それでもメタボは、地獄へ行ったのだ。

「弟が地獄で頑張つてるのに、僕だけ母さんと一緒ってわけにはいかないよ」

太一はそう言つてサレナにコップを返した。

「天国の復興が終わって、地獄の復興も終わったら母さんに会おうと思う。雅人と一緒に。だから…」

太一はサレナの真正面に向き直った。

「天国の復興が終わったら、地獄の復興を手伝おうと思う。…ついでてくれますか？」

「太一くん…」

サレナは頬を紅潮させ、ゆっくりコクリと頷いた。

「ありがとう…」

どちらからともなく、二人は抱き合った。

「あの〜、私が上にいること忘れてない？」

「っ！？」

太一とサレナは慌てて離れた。二人は胸の高鳴りが収まらず、互いを見れないでいた。

「全くも〜、エレン隊長に言い付けちゃおっかな〜？」

「なっ！？」 チャム、それだけは止めてくれっ！」

エレンに「太一とサレナが抱き合っていた」など言えば、間違いなく仕事を放り出してからかいて来る。エレンはそういう性格なのだ。

天国復興はヴァルキリー隊が行っている。エレンはその総指揮を務めているのだ。それゆえ太一達は数日エレンに会えていない。

だが面白いこと、特に太一とサレナ絡みのことなら文字通り飛んでくるだろう。

「ったく…。もう休憩は終わりだ。作業に戻る」

太一は立ち上がり作業場へと歩みを進めていく。

「あ、待ってよ〜」

チャムは急いで太一を追いかけていった。

地獄、天国共にとてつもないダメージを負ったが、メタボやお嬢、太一のような人間がいれば、本来の姿を取り戻していくだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2413i/>

彼の世

2011年5月29日12時41分発行